主幹・麻生路郎

川柳雜誌

九月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和七年九月一日發行（毎月一回一日發行）
第九卷 第九號
川柳雜誌社發行

柳翁忌

日時 九月三日(土)午後七時

會場 大阪市南區千年町(市電日本橋停留場西辻北入)
ちとせ倶樂部
電話南二四五五番

兼題 「沈默」三句 麻生路郎選

兼題 「生醉」三句 松盛琴人選

會費 金參拾錢
初心者の來會を歡迎致します

加茂川句會

日時 九月十一日(日)午後七時
會場 仲源寺(京都四條綱手東入)
兼題「諒解」三句 幸男選
兼題「期待」三句 紫明選
會費 金參拾錢
京都市七條大宮東入桑原方
京都支部

各地支部增設

柳壇のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引き受け極力擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込んで下さい。

川柳雜誌 第九卷第九號目次

光耀抄感想 松丘町 二(二九)

文苑

柳友へ 麻生路郎(一)
武玉川初篇研究(四) 梅本秋農 森東魚屋 蛭子省二(二)
柳の絮(一七) 長野吉高(二〇)
考へる葦 松丘町 二(二三)
柳誌評 福田山雨樓(二四)
千日前今昔史(二六) 木村半文錢(二六)
赤城颪噂聞書 不朽洞主人(二五)

創作

近作柳樽 麻生路郎選(八)
光耀抄 麻生蔑乃選(一九)
川柳塔 同人・社友(二六)
粒々集 諸家(二八)
各地柳壇 (四七)

地下鐵

作句前後 阿部閑生(八)
幕の内 吉田水車(二)
川柳ハルピンの此頃(二) 立井登美坊(二三)
赤い屋根 石田沐天(一四)
自信は強く 路郎生(一五)
赤城颪の再演 高橋かほる(一七)
川柳雜誌句內閣 春田獅子王(一七)
スェノさんを悼む 麻生路郎(四六)

一路集(課題吟)

黃昏 長崎柳秀選(四一)
眞相 阿部閑生選(四二)
屑 西田艸樂 福田鶴峯共選(四四)

◇

編輯の窓 山雨樓(三〇)
西之町メモ 綠雨(四〇)

◇

表紙題字 吉岡鳥平 麻生路郎

柳友へ

——柳翁忌を前にして——

麻生路郎

「新青年」といふ雜誌がある。獵奇的記事特に探偵物に主力をそそいでゐる。讀んで見ると、なるほど面白いが、私たちの血となり、肉となるものを少しも提供してゐない。しかしながら「新青年」は私たちの血となり、肉となる營養物を供給するのが目的でなく、これが刊行は面白がられた結果その代償として阿堵物を掻き集めるのが目的であるから面白がつて讀んでくれさへすれば、それでいゝのである。

川柳も萬歳の親類のやうに面白がられて、能事終れりと嬉れしがつてゐる流派がある。が、これは少しく考へなければならぬ。川柳は決して子どもの添乳をするお伽ではない。川柳は社交の要具だとか、イヤ家庭圓滿の何んだとか、下手な修身みたいなことを說いてゐる人たちもあるが、滑稽もここまで來ると笑へない。

九月の二十三日はわれ等の柳祖柄井川柳の忌日である。かゝる淨日を前にして三思更生しなければ折角の柳翁忌も無意義な祭祀に過ぎないであらう。

武玉川初篇研究（四）

梅本秋農屋
械東魚
蛭子省二

（52）雪駄では返りかねたる三日の原

二＝みかの原の句を集めて考究の結果、苦しまぎれの解は持合するが、どうも面白くない。

秋農屋＝一夜吉原に遊び翌朝起出て看ると、大雪がふつてゐる故遂に流連をなし、三日目に歸宅しやうとすると、街路に雪解の泥濘で雪駄では歩く事が出來ないのだ。「みかのはら」は三瓶原と書き山城相樂郡木津附近にあるが、その名を借りて三日の吉原を利かせたものである。

東　魚＝私は「みかの原わきて流るゝ」の方で、夕立あとの潦を想像したが、前説を拜見し成程と思はせられた。只三日の原が餘り巧く寸法があつてゐるやうで、危ぶまれる點もなきにしもあらずといふ心持がする。

（53）門松の穴も心の置所

省　二＝冥土の旅の一里塚などは、御幣擔ぎにはいやがられたであらう。「穴掘といつて門松吐られる」。だがもの事は心の置きやうである。

秋農屋＝一休の詠むだといふ「冥土の旅の一里塚」といふ歌は大に疑ふべきで、小西來山の句に「門松は冥土のみちの一里塚」とあるより、後世の者がそれに下の句を附けて、一休作としたものであらう。

東　魚＝「門松は甲良に似せて穴をほり」の方が面白い。比較するのは變なものだが——

省　二＝（註）來山の句に就ては、大江丸の俳懺悔秋冬の部に詳かに出て居る。

（54）眼藥の貝も淋しき置ところ

省　二＝祖父は眼醫者として尾州侯に仕へた。貝入の眼藥（

眞珠をいれた）は名古屋地方で有名であつた。叔父の代には點眼水となつてしまつた。「貝の膏藥片寄せて藪にらみ」。昔の眼藥は皆貝入りである。その貝の置き場所に淋しさを覺ゆるは、眼病患者の實感である。

秋農屋＝昔の目藥は多く貝入のもので、現代に用ひられる、點眼水はなかつた。又乳汁で溶いてつける藥もあつた。

東　魚＝なんとなしに薄闇い棚などに置かれてあるやうな氣がする。淋しさが說明にならず、シックリ氣分を出して居るのがよい。

（55）後家で目を突く今の角丁

省　二＝「角丁はなほ〳〵書きに見物し」で、後家で目を突くとは、お茶ひきの謂なのであろうか。

秋農屋＝昔の角町ならば京橋であるが、今の角丁であるから新吉原に相違ないが、此町は遊廓の片隅なので、餘り漂客が行かず、お茶挽女郎ばかりゐるといふのであらう。

東　魚＝自說は別にない、どうも直に賛じかねる。

（56）夜のめかりに借金を迯

省　二＝メカリを利すは直感して先手を打つ事。「晦日とはめかりの利かぬ神事なり」などゝ用ふ。因に和布刈の神事は大晦日に執行された。

秋農屋＝和布苅の神事を拜みにゆくと稱して、債鬼を追拂ふといふのであらう。又俗に「めかり」といふのは「目先」の意で、「めかりの利かぬ」は目先の利かぬといふ事である。

東　魚＝「逃」はニゲと讀むべきで、ニグではなからう。

（57）利口になつて飛ぬ清水

省　二＝清水の舞臺から飛ぶなどといふ、大ゲサな事をしなくてもイジー、ゴーイングでやッつける。友愛結婚なんて、尤も利口なものであらう。

秋農屋＝現代はこの利口者のみである。

東　魚＝「飛ぬ」は勿論トバヌであらうが、トベヌだと假字一字違ひで意味合が異なつてくる處が面白い。皮肉な句だ。

（58）島に晝中くらき十二神

省　二＝島ではなく梟ではないか。

秋農屋＝梟に相違ない。晝猶暗き藥師堂へ、梟が飛込んだので、「十二神」は十二將神である。まづ三州の峰の藥師が聯想される。

東　魚＝原本明かに梟である。

省　二＝藥師十二將神とは、其名は略すが十二大願に應じ、晝夜十二時を守る。

（59）一日の機嫌も帶の人こゝろ

省　二＝〆こゝろではないか。

秋農屋＝「締め心」であらう。昔の武士の心理を捉へて咏んだ句であらうと思ふ。

東　魚＝原本「〆こゝろ」と明によめる。武士でも町人でも良さそうに思はれる。私の句「ネクタイのすつと結べた朝心」は此句から來てゐる。なんだか燒直し斗りするやうにとられては困るが。

（60）峠の宿の淺い居風呂

省　二＝水に不自由だ、贅澤はいへぬ。あさい居風呂につかつた峠情調は、また別趣であらう。

秋農屋＝異議なし。

東　魚＝「淺い」が何となく清らかな氣がされる。峠の清水などを連想するせいかもしれない。

（61）おとりか濟て人くさい風

省　二＝鎭守の森の踊としてもよい。下七は敏感な内容だ。

秋農屋＝人臭い風が面白い。現代作者には咏まれぬ句である

東　魚＝全く人くさい風は奇拔で面白い。大變華やかな所謂脂粉の香がたゞやふと云ふ氣がされる。

（62）白鷺のひたるいうちは水鏡

省　二＝藝術寫眞の材料。ヒタルイは、ひもじい。

秋農屋＝古畵に多くみる圖である。

東　魚＝理屈めいて響かぬ處がよい。感興的な表現が然らしめるのである。

（63）宿下の儘て雪駄は干からひる

省　二＝歸らない事情が出來て、雪駄は仕舞はれる。或は忘れていつたので大切に其儘になつて居る。この說がある。

秋農屋＝昔は商家の雇人が、主人の許可なければ平日雪駄を穿く事が出來ず、藪入卽宿下の時には例外としてはいたけれども、其後は穿く事が無いから、自然に干枯らびるのである。

東　魚＝明解である。

（64）面打を呼ふ一世一代

秋農屋＝能役者が一世一代の晴れの舞臺を勤めるので、面打をを手許に呼寄せて、新に面を打たせるのである。

東　魚＝贅

省　二＝曩に私の解したのは誤つてゐる。一世一代なる言葉から前說の如し。「謠曲と川柳」にも、「後には太夫が一世一代として催ふす大能の名稱となつた……勸進能は觀世太夫のみ一代一回興行する事が出來た」

（65）臺笠振つて這入る出女

省　二＝「お供まはりが振出す、毛鑓、臺笠、立笠」（宵戾申）貴人大名の行列に袋にいれて棒につけ、お供に持たせた被笠。宿驛泊りの折り、お供とひようきんな出女の風景。—現代なら「ステッキふつて這入る彼女氏」だ。

秋農屋＝斯る事は實際に無かつたらうが、滑稽味があつて面白い句だ。

東　魚＝供廻りが洗足でもする間に、槍などは違ふから、臺笠などは女が片付けるやうな場合があつたかも知れない。

（66）淋しい舟の五十嵐へ着く

省　二＝五十嵐といへば、先づ油屋が頭に浮べど、淋しいなどが判らぬ。

秋農屋＝船遊山にお供をした女中などが、屋形船から小舟に乘移り、兩國の五十嵐油店へ、伽羅の油を買ひに行くのである

東　魚＝今自說はないが、再考したい。

(67) 正直に獨つゝ寢るたから船

省 二＝福運の折半などはつまらない。正直は「二日の夜皆正直の頭なり」などを臭はせる。

秋農屋＝平日は二つ枕に一つ夜着の夫婦も、二日の夜は七福神に敬意を表し(?)、一人づゝ寢るといふのであらう。

東 魚＝幸運をめい〳〵神にたよる氣分、純な心持を正直と表現したのであらう。多少「頭に神宿る」が匂つてゐるやうにも思ふ。

(68) 今出た海士のあらい 鼻 息

省 二＝荒い鼻息は深呼吸の謂。そして、もそつと痛切味ある表現。

秋農屋＝志摩の鰒取りの海士は、海底より浮上ると深呼吸をするため、喉咽が笛を吹くやうに鳴るさうであるが、鼻息を荒くするといふのは、作者の想像で咏んだものであらう。

東 魚＝浮出た第一呼吸は深吸呼式に長いであらうが、後は小ぎざみになるのが自然だと思ふ。だから荒い鼻息は實際とみて良ろしからう。武玉川獨特の味だと思ふ。

(69) 能い頃を鶉の 起す 草 枕

省 二＝深草は鶉の名ごころといはれ、元政關係に「元政の朝寢鶉がきて起し」。草枕は旅の謂であるが、鶉は草を葡ひ歩く習性を有してゐる。

秋農屋＝この草枕は旅寢の意で、鶉は曉方に鳴くものであるから、出立するに能い頃ないて、旅人を起すといふのである。

東 魚＝「鶉が起す」といふやうな現はし方は、得て月並臭く思はれ厭なものだが、附合の調子でゆくと、此句の如くイヤ味を感じないのが不思議だ。「能い頃」などは何んでもない無雜作な文字のやうだが、サテ中々かう簡にして要を得た辭句は見當るものでない。

(70) 間夫の命拾ふて蚊に 喰 れ

省 二＝齊藤綠雨は現はれたる密通より、隱れたる密通がどんなに多い事かと言つたが現はれたのでないと句にはしにくい然し古川柳にも餘り多く詠れて居る氣味なしとしない。

秋農屋＝重ねて置いて四つにするやうな、淺慮の本夫ではなくて、姦夫姦婦を諄々として說諭する間に、手足を蚊に刺されることも有らう。

東 魚＝先づ平凡な句だ。蚊に喰れに皮肉とおかしみはある。

(71) 棒を潛つて供へ茶を 出 す

秋農屋＝此棒が不明で何とも解釋が出來ない。獵狩の獲物を擔ぐ棒で、其供人に茶を出すといふの歟。

東 魚＝棒は駕籠のであらう。入口に舁ぎ据えられた、其棒の下をくゞつて供人へ茶を出すといふ、しぐさを興じだものと思ふ。

省 二＝句面丈けで棒を確定するは餘程難事だ。參考句を得る迄お預りとして置く。

(72) 夜のしまいもはやい 齊 日

秋農屋＝齊日は朔日十五日廿八日であるが、夜のしいとはま

何であらう歟。妓樓の張見世とも思はれぬ。

東　魚＝店を片付ける意であらう、店員慰安の意味で齊日早めに店を閉ぢる場合と考へられる。

省　二＝丁稚小僧の方は朝からおひまが出る。番頭は「齊日はちッちやな用に事をかき」で、遂に早仕舞するのである。一月七月の十六日地獄のフタのあく日「齊日の藪入飛脚ほど歩き」

東　魚＝藪入は朝から休むのが通例かと思ふ。だから此句は朔月十五日廿八日とみてよろしくはないか。

（73）草も輪に成て涼しき御秡川

省　二＝「はつ〳〵に夏を彩る御秡川」（武十八）で、水無月秡後は秋であるところから、涼しきと云つたのだ。茅の輪である斯る神事が部會から喪せむとしつゝある。

秋農屋＝六月秡は川邊で行ふを本式とするが、江戸時代には川に遠い山の手の神社でもこれが行はれ、私も只一回茅の輪を潜つた事を、微かに記憶してゐる。現今は各神社で六月秡は行ふが、茅の輪を造るものは無いやうである。

東　魚＝茅の輪は社前に立て潜れば疫を免れるといふのであるさうだが、一昨年名古屋の確か朝日神社で行はれてゐた。間餘の徑の輪と俳諧辭典にある、私のみたのは夫程大きくなかつた。私の小供の折神田明神が氏神なので「形代」を社へ納めたやうに記憶してゐる思へばあれが御秡であつたのだ。

（74）旅衣脊中へ蝶を浴て行

省　二＝「野掛道生醉蝶になぶられる」と比するに、なぶられるは野掛趣味、浴て行くのは旅人に應はしく感ぜられるではないか。

秋農屋＝蝶を浴て行とは、數百千羽の蝶が群飛するやうで、餘り誇大の形容ではない歟。

東　魚＝浴て行を作者も選者も面白く思つたのであらう。四ツ五ツの蝶が一上一下して旅人の脊にむれ從てゆく樣を云つたので、さまで誇大と申す程でもないかと思ふ。

（75）松脂匂ふ清見寺前

省　二＝駿河興津に在る。清見關は清見寺門前なりと言ひ傳ふ。松原は詩歌に賞せられ、峻嶮高閣倚祇林、直射松原十里臨「春風や三保の松原清見寺」（鬼貫）

秋農屋＝清見寺前の有名な藤の丸膏藥店を咏むだものではない歟。これは私の憶說かも知れぬが、昔の膏藥は多く松脂を加へて煉製したものである。

東　魚＝成る程面白い。藤の丸に就て知らないから申上る資格はないが、俳諧の附句殊に武玉川の味から、たゞ松並木丈けではなさそうに思はれる。

省　二＝前の一字が氣になつてならなかつた。「此所に名代の膏藥の店」（東海道名所圖會）。「宿の中に萬病によして膏藥あり」（東海道名所記）で、寺前に膏藥店が刻むでゐたもの「松原はるゝ膏藥買ふて月を吸ひ出せ清見寺」（丹波與作）である。藤の丸は江戸日本橋二丁目でも亦大阪長町でも賣つてゐた。松脂は熱を除き惡瘡を癒すに用ひた、又芳香を加ふる用も

なしたのである。餘談に亘るが朝鮮では端午に藥草を採り、松の木に穴を穿ち、其中に數ケ月貯藏し以て松脂の作用に因て、萬病を治すの特効が得らるゝと傳ふ。武玉川十一篇に「根太から咄の續く清見寺」とあるは、藤の丸の句だ。＝因に根太には杉脂が特効あり。

（76） ちらくと池の蛙のうしろ紐

秋農屋＝蝌斗が稍長じて手足が生へても、まだ尾が脱落しないのを、後紐と咏むだものと思ふ。

東　魚＝人の小供の姿にも思ひよせて（附紐を後ろに結んだ姿）の作意であらう。

省　二＝尾の脱せぬうちが、可愛く滑稽なものだ。「忘れては餘ごぞ思ふ蛙の子」（一雪）

（77） 子をまたくらへはさむ中剃

省　二＝私も此經驗をもつ。頂髪の中央を剃るので、昔は七八才の時、中剃始の儀式さへあつた。「愛ざかりつむりと腰に二兩つけ」、一兩は迷ふ札、一兩は小判形の中剃。

秋農屋＝此中剃のことを、河童の皿ともよむだ。

東　魚＝面白い句だ。

（78） 盃出して伯父をしつめる

省　二＝句意平明、前句を知らぬから場合は決められぬ。酒も時の氏神だらう。

秋農屋＝「神代にもだます工面は酒が入り」この句もある。

東　魚＝「一體お袋もお袋ぢやないか、いつまで娘を手元に置くつもりだ」とか、内輪事の小言をいふ伯父さんであらう。

（79） 藪入の物あり顔な錢を買

省　二＝「けごられるやうに新造錢を買ひ」などの如く、錢屋（錢見世）から買ふのだ。＝（今日なら停車場などで小錢交換をして貰ふのも其一種である。

秋農屋＝昔は市中に兩替店が多く有つて、店頭には分銅形の槻材に「兩替」と彫刻した看板を出してあつたが、今は其影をも止めなく成つた。明治の初年には紙幣と錢とを交換するに、其打歩は一兩につき四錢であつたと記憶する。

東　魚＝細かいものに崩してゆく所に、藪入の聊か得意らしい氣持があるのであらう、物あり顔はさうした氣分も匂ふて居る。

（80） 我一生とおもふ河越

省　二＝川越はいやなものであつたであらう。「九十川たのみは天窓ばかりなり」。「こいつけんのん川越の禿頭」「なごいふ句も殘されて居る程、體驗者にとつては、こんな句も抹殺し得ぬ思出であらう。

秋農屋＝大河を越すのに餘り危險なので、我が一生もこれ限りかと、自ら感念するのであらうが、まだ少し謂ひ足らぬやうだ。又此句は大井川と限定せずとも宜からうと思ふ。

東　魚＝句は現はし方がイヤに生眞面目なので、何か悟つたやうな口吻に思はれるが、別に深い意味はなささうに思ふ。

近作抄

路郎選

悲しみの部屋と變れり夜の蜘蛛　大阪　新水
咳一つ聞こえる樣な朝を起き　同　同
燈明よたゞ幻の如くあれ　同　同
拜む手の先も子供と思はれず　同　同
詰らなく坐れば子供まで坐り　同　同

近　火（二句）

燒けてしまへば慾とくもなくなろに　大阪　琴人
もうそんな元氣はないと子をあやし　同　同
秋らしい風が箸持つ手にふれる　同　同
なかくに哀れ愚かの眼のうるみ　同　同
默したら言ひ負けたよに思ふなり　同　同
うりものゝ悲しい汗が滴する　大阪　雅幽
痩せてゆく我に近寄るものもなし　同　同
笑へども腮が動かぬ生活苦　同　同

作句前後

阿部閑生

一、幻影

坩堝の中に沸つてゐる心臟、錯を詰めこんだ頭、氣持は沈んでゐながら無暗に動悸の昂ぶる日が二三日續く。

食慾が減つて、顏が小さく眼が大きくなり歩く足から靴が脫げさうで、傘を持つ手が重くなつて雨ふる朝の街へころりと横になりたくなる、すると先に寢てゐた泥のやうな男が起きざまに歩き出す姿が目の前に浮んで自分を曳いてゆく。

午過ぎ、日がかんくと照り白む街路を南へ進んでゐると、消魂しい噪音のうへゝ、兩側の大厦がかたくと我に倒れかゝつてくる、其一つの百貨店の屋上から、折ふし身を逆まに飛び下りたのが、男か女か睫毛の尖へぶらさがる。

逢魔が時の、下から蚊の湧く古机に坐つてゐると、時間を超越して、周圍が暗くなり明るくなり、昨日見た映畫面と今日の實社會と

八月の草花活けて戀はなし　同　同
光彈の如き羽蟲ら羽蟲ら眞晝　大阪　町二
ジャムなめて貧しき妻と子の味覺　同　同
ふるさとはセピアいろなる秋の風　同　同
煙突の煙が秋をあたゝめる　同　同
玉蜀黍の毛にたはむれて風生る　大阪　閑生
蟷螂と對し我執の募るのみ　同　同
完膚なく虫に螫されしキャンピング　同　同
汗の襯衣リュクサックの型に濡れ　同　同
店賃はをろか立退き料と云ふ　鳥取　鐵洲
喧嘩して見るにしてもが錢がいり　同　同
注射料醫長ちつとも知らぬ顔　同　同
淫らなる笑顔で隙を突かんとす　大阪　艸樂
世の中は一手で詰みになつてゐる　同　同
すき髪もうれし眞夏の涼み臺　大阪　綠雨
さし上げる子に天井はちと低し　同　同

親友佐々木昇君を悼む

樫の棒折れるもろさを誰が知ろ　大阪　山雨樓
五十過ぎた豆腐屋の背女めき　同　同

○

無雜作な父と何も言はずお茶　島根　綠之助
女の子脚を揃えて蔭に向き　同　同

が急施回を初める。

「この世は唄つてゐるか泣いてゐるかだ」と呟いて我に歸ると、じやぶ〳〵この夜更けに勝手の方で誰か洗濯をして居るらしい、

二、小　我

蚊帳へ入ると、頭が枕につかぬうちに眠つて了つて、一夜の熟睡は日頃の苦腦を全く肚の底へ沈めてしまつた。

のろ〳〵してゐて遲く出勤し、卓上一杯に書類を擴げた所へ、滅多に來ぬ友人が汗を拭き〳〵やつて來ていと朗かに有りと有ゆる世間話をした揚句、海水浴の時期が終つたらその跡の砂を篩ひにゆくのだ、といふ新職業を豫告して惜しさうに歸つていつた。

急用を思ひ出して、あたふたと阪神國道口迄歩いて來た時、長靴を穿いた背丈の高い巡査が、自轉車の丁稚を追つ駈けて來て追つ着くと、早速巡査が自轉車に乘り丁稚が後からついて、もと來た方へ走り出した、自分は電車で淨正橋までくると、先刻の交通巡査が一尺離れて首垂れてゐる丁稚の頭を「止れ」を出してほ一つ突き、「進め」を出してほ一つ突き出してゐる、此處から追つ駈けたものと見える、降りて何か云つてやらうかと思つてゐる間に電車は走り過ぎた。

櫻橋の交叉點で止りきりの電車の窓から二十年前に自分の勤めてゐた事のある保險會社の裏へ眼を落すと、石の垣三ところに「小便御斷」と筆太く書いてある、そこで頭のなかへ小便御斷が丁稚と巡査と滑らかに入

新聞を讀む和尚樣夏の風　同　同
救ひとは金でなければ用がなし　同　同
實家へ來ればあゝ蛙鳴き蜓蜻鳴き　同　同
白いなあちこ海水へついて來い　神戸　明
留守居してゐれば溝にも月があり　同　同
ステッキも腹の足しには少しなり　同　同
羨んでゐるこころフト死んぢやつた　同　同
天高し希望は遠し　書寢こしよ　同　同
ノーパンでいけたらいつそ涼しかろ　大阪　豆
長靴の中で一ぴき蚊が暮し　同　秋
ウドンゲを見に來てくれと云ふ手紙　同　同
心中や身投げの記事を讀んで起き　同　同
さて金が出來ても愛うつらしい顔　同　同
プルヂョアに土用の畑打たせたし　松江　天痴人
西瓜茄子トマト八月になつたよ　同　同

三男好也松江病院にて逝く（二句）

せめて唇濡らすコップの水よ　同　同
玩具さへ買つてやらずに逝かせたり　同　同
笑ひさへ練習したと立志傳　大阪　翠夢
先哲の言より一歩進め君　同　同
月見草今日も暮れゆく花をつけ　同　同

れ替つた。

歸りの阪急に乘合したMから唐突に、「川柳は出來ましたか、」と問はれた、この問ひは自分には斯ういふ句が出來てゐると云ふ豫告とあなたも最う出來たらしいといふ定とを含んだものであつた、「これから作る」と元氣よく答へて、あたりの人を見廻した

三、記　憶

自分の句ば勿論、他人の句でも心に止めた佳句は、何時までも驚くべき正確さを以て記憶してゐる人には全く感歎させられる。

碁でも將棋でも、うつた手を正確に覺えてゐる人は相當な打ち手であるが、それが難しい、尤も難しいのは記憶力の問題ではない、

角力に水を入れてから、寸分違はぬ元の手に組ませたか否かは、行司にも力士にも見物客にも信念と疑念の殘るところで、レスリングの判定勝負に疑惑を持ち オリンピック豫選に全關西軍が棄權したのは、瞬間の後と雖も記憶の正確を期するには、異常な天分と熟達を必要とする事を物語るものであらう。

正確な記憶は、精密な觀察と明晰な印象の結果に外ならぬ、投句をしたあさつて頃になつて、十句のうちの五句が俄かに思ひ出せない朦朧さで、佳句が生れやう筈もない、他人の句に就ての記憶の錯誤は、尙更の事である

この方法で自分の頭と句の確かさを試して見ると、頗る危い。

四、自己批判

作句の昂奮が褪めると、句の過信價値が減

フン褌は失禮乍ら夏の色　大阪　奇可愛
身の程を知つて長屋に十五年　同　同

歸　村

電線が二本人口五十人　同　同
あまく見られまいとて針程のことを　大阪　二南
焦燥の捨て場に天井あるばかり　同　同
蠟燭二匹の黑き衣裝よ　大阪　鮎美

宇野あき子さんへ

物語り處女は嵐に灯をまもり　同　同
銀行がたをれたからこたよられる　別府　晃卓
夕立に風鈴あわてたる如し　同　同
青空よ生きゆく道を示せかし　滋賀　蒼太
抱きしめしわが胸板の痩せにける　同　同
ぼくはびようにんぼくののぞみもかはつたな　螢ヶ池　愚寵
病院を抜け出て乞食なごせむか　同　同
人妻になつて腕なご見つめられ　神戸　華水
夕立へ小包大きな聲で來る　同　同
暑き晝柱時計がねぶたくす　大阪　小柳子
カンガルに似た親子あり夏の海　同　同
白晝の恐怖誰にも會はぬ山　神戸　春秋
乳だらり多產婦暑い坐りやう　同　同

退するが、自らはそれを急に氣付く機緣に乏しい。

單なる記憶には批判が添はないからである、そこで假定人を選んで自句を聲に出して訴へて見ると、案外に充實が空虛になつたり明快が難澁に陷つたり、省略が欠字であつたり、亦その刹那に最後の推鎬を怠つた欠陷を發見したりするものである、自己批判を沒却した句は、內發する熱情を驅つて、左右を顧慮せずに、ごし〳〵と飛躍進展した場合でも句外に迸る餘炎が消ゆると骨を嚙むやうな索然たるものが殘るであらう。

五、個　性

生涯を通じて、自分を惱まし惱ますものは個性である、個性の半分を消せば、我が苦惱は慥かに半減したに違ひないが、更に個性の全部を消した場合には、苦惱は身を通じて倍加してゐたに違ひない、個性に對する嫌惡と愛着は同分量であつて、愛憎の機會は均等であるらしい。

信仰を足の裏で笑つた男は云ふた、非個性の發揮といふ事は、個性の發揮と同樣に、川柳には最も大切な事だ、と、個性か非個性か何れかの强く現はれた川柳は捨て難い。

苗を植えて置いた畑のトマトが今朝初めて一つ赤らんだので、早速膳にのぼせた、盛んに歪んでゐて、帶から深く割れ込んだ溝のほとりはまだ青い、赤いところは二ヶ所なめくぢが舐めてある、「食へるだらうか」と危んでゐる家族の顏の中で、剝けない皮を爪で

夏の雨に濕める土ふむ色　男　松本民郎
指に觸れた塵貸金もあるんだよ　同　同
夕立の樣な男で親しまれ　愛媛英賀夫
あさましさビールの栓が金に見え　同　同
食べる事計りで兄は痩せて居る　大阪紅
洋裝の足を痛めた下駄を履き　同　同
我も又死ぬる一ト役もたされし　大阪水車
外交のたしなみ競馬なご覺え　同　同
よく寢てるこゝにしられる襖越し　大阪八歩
夏の海村の子供に狹くなり　同　同

◇

烈風——地をはなれたる百姓や　島根羅門
みろ！太き眉や山々がよろめく　同　同
まづしき柱時計の獨占さなる　同　同
蛭が眞晝の神經を射て泳ぐ　同　同
飢ゆるまつたゞ中に鋭き砂針や　同　同
寂し右の手左の手風が去る　同　同
落ちぶれてせめて扇の新らを持ち　大阪大門
見學が汽罐の湯氣に二分され　同　同
輕蔑の鼻の穴にて人を見る　同　同
世の中に恐れをなして土いぢり　同　同

はいで、自分は食ひながら云つた。
「個性は甘くない」
そして後ろへ凭りかゝつた途端に、柱の短冊を見上げた。
「これやこの我に有るもの人は持たず人に有るもの我には缺げたる」
肚の底に沈んでゐた苦惱の蟲が亦動き出して、自分は家族分の大溜息をついた。

幕の内

吉田水車

と申しても御辨當ではない。本社八月例會の餘興「新柳劇」を幕の内からとやかく云ふのは如何かと思ふし立ち入つた批評も本旨ではないが空前の成功であつたことは異論のない筈、だがしかし演出と舞臺効果に善惡兩意の説があるとすれば、又あつた筈であるが、其兩者に對し些か駄文の御許しを乞ふ次第である。あの芝居はほんとに泣けた芝居である、忠次も泣いた淺太郎も泣いた勘助もお花も皆泣いたそして幕の内にゐる者も泣いたのであつた、淺太郎はその劍光にいとし愛兒の幻を見たであらふ、それが演出効果を助けたとすれば自らあやつる電照の明滅を良妻を失ふて旬日を出ぬ己が心さながらに感じた人に舞臺係の新水氏があつた。あの書割を一人で丹念に仕上げ戸の苦面までして娘風の大かづらに馴れぬ口紅を落すまいと汗よりも小さい氷を不自由に飲んだかほるさんそのかほるさんを泣かんばかりに鞭韃

しかすがに妻から見れば　TYRANT　同　同
黨の揉め少壯組も別に撮り　長野柳兒
總花にやる表彰に順があり　同　同
金が物言つた免狀額になり　同　同
休銀のあきらめさせぬ記事もあり　同　同
日曜を子のない夫婦無駄にせず　同　同
母親こ出た日の電車旗が立ち　京都豐次
おもむろに牛車はうごき始めたり　同　同
病院の窓からも見る輕氣球　同　同
友達の引受けるこは小さきここ　同　同
結婚しましたわこはがきで知らして來　京都佐一郎
金借りに行くに晝寢の時間なり　同　同
打診の手もむを女に見つめられ　同　同
教會の歸りマツチをくれるなり　同　同
給油所の庭に更けゆく夏の月　神戸麥刀子
戀もありヨットもあつてお孃さん　同　同
死んでゐる螢へ胸の痛む朝　同　同
温泉の避暑のこ隣騷いでる　大阪菊路
階級を見せぬ風呂屋がうれしくて　同　同
算盤をおき直しても直しても　同　同
樋を傳ふ雨女房も針に厭き　同　夜王

した里十九親分否忠次親分はもゝひきの繼ぎまで手にかけ、なろそかにせぬ舞臺稽古に兩三度出て來る丈でも一と仕事の劍劇好個の兩優華水二南兩君の絶へざる練磨と眞面目な愛好心によつてガツチリと盛りたてた新柳劇、物數寄きの域に脱し得た手柄をこゝに記すことは強ち樂屋のスツパ抜きとのみにみたものでもあるまい。

（一九二三、八、八）

川柳　ハルピンの此頃（二）

立井登美坊

肩章を畫く右手の無い乞食

ロシヤ言葉が通じない悲しさ（私に）彼氏が左手で不器用に畫く、肩章の繪、かつては彼氏も白系の時候でありたと云ふ。

ステツキで牛追ふ村のトマト畑

長靴を穿いた老人が乳牛を我家へ追ひ込で居ります、そこには美しい色にトマトがみのつて居りました。

振り向けば露西亞娘のニンポン語

「今日は」と聲をかけられて振り向けば青い眼の金髮さん、大邊に日本人がなつかしいらしい。

掠奪の村は南瓜の花盛り

土匪、兵匪、大刀會、紅槍會、さては反吉林軍、救國軍、なんと村の平和を亂す者の多い事よ。

浴衣着に出れば南はイナビカリ

薄墨を流した南の空にピカリ〳〵と電光、ハ

行末は遠き夫婦の足並や　同
テーブルを取卷く嘘のかず〳〵や　同
金送る孝行だけは續け切り　同　勝二
ポケットの砂に去年をなつかしみ　同
アトリエの埃を乳に見るモデル　同
休憩のせめては清い息を吸ひ　同　四五磨
折箱を廣げて父を呼び起し　同
布團ミじ二階は坐る處もなし　同
ラッシュアワーのがれて家の植木鉢　京都　草村
蚊を追はず佛みつめてゐる母ぞ　同
鶴嘴よりもがんぢような腕の汗　同
ほうたいを卷かすすなをがあつてほし　大阪　舟々
植木鉢たゞ一筋の陽影なる　同
對坐せる男の愚痴に暮れかゝり　同　與詩雄
淋しき心かな札束を數へ慣れ　同
思惑の男小さく寢て仕舞ひ　朝鮮　如空
奇襲めく聲で一杯つがれたり　同
その頃の女生だらりミ兒を背負ひ　大阪　沐天
髭剃つて行けばボン〳〵がミ言はれ　同
上役が這入り話題が又變はり　同　素月
寒むさうな濱でスターの夏姿　同

ルビンの今日此の頃は少しでも　雨の降らない日は有りません。

片割れの月に胡弓のすゝりなき
雲間をもれる夏の月、胡弓はほんとに哀れに聞へます。

ダンサーの乳房に觸れる胸を張り
ボイルの羅布に彼の女は　ふつくらした乳房のふくらみを見せて……、殊にイットを感ぜずには居られません。（昭七・七・二〇、哈市ニテ）

赤い屋根

石田沐天

「痒い處へ手の屆くものをサービス致します」と記つた名刷型のビラをくれた辻君の樣な女がゐた。カフェーの廣告だ。惡友と語つて行つてゐた。何圓也をチップの後へくれた其の「痒い處へ手の屆くもの」古川柳にもあり例の竹製の孫の手を一本宛くれた。背を搔くのに獨身者にはホン都合のよいものです

×

つい先頃神戸へ宿替をして行つた家の置土産に正一位稻荷大明神があつた。隣家の某は勿体ないとて派手に祭りあげて稻荷敎の先生を招き、近隣の人達大勢それを取圍んで祭りも酷の頃先生の申されるには。「よく祭つてくれた有難い、亭主！今晩は女郎買に行つて來い！博奕も打つてもかめへん、俺が嬶に謝つといたる」

×

是でも思ひ出したが先日生駒山へ　幾年振

立食の宴こは見えぬ醉ひぶりや　石川しこし
本氣にて說くか坊さんまだ若し　同　同
亭主へは怒りもならず子を叱り　愛媛孤鶴
サラリーの高が弔詞の順を決め　同　同
雷も知らずに寢たを笑はれる　大阪憲坊
言ひなりにせねばおかない父であり　同　同
間違があつてはこ云ふ男こ來　加古川督二
ふり向いた瞳は僕のものでした　同　同
乳母車たつた一ッを持てあまし　大阪柳次
泣いてゐる子へ人形の二皮眼　同　同
戀をして女アッパッパを嫌ひ　金澤今雨
繪日傘をくるくるくるこ待ち呆け　同　同
宵寢した子へ風鈴が鳴り初め　神戸秋彦
絕好こ呼ばれる空にビラが舞ひ　同　同
唇を押付けてきたらごうします　金澤たし路
自墮落な姿に女給の呪ふ陽よ　同　同
救濟の加減乘除にしびれが來　鳥取暢山
晝寢からさめりや瓦の陽に射られ　同　同
暝想過剩障子の穴に疲れ切り　神戸竹風
ノスタルジア今日も鳥が鳴いて行く　同　同
晝寢からさめてトマトの舌ざわり　螢ヶ池巷巴

りかで遊びに行つた。例のエログロの御本體を祭る寺と聞傳ふが――社殿に額いた四十才位の男が「どうぞ千兩勝たしてくれ千兩勝たしてくれたら三百兩寄附する　どうぞ千兩勝してくれ……」と聲をあげてお願ひ申してゐた。

×

由來職人とか職工とかは呐辯としてあるが一職工の父が病死した。同僚の一人りが悼みに行づた「まあ諦めなはれ、な、あんたとこのお父さんかて惡氣で死んだんと違ふさかいな、な」と肩を押へる樣にして慰めた。

×

丘の赤い屋根の主人公はソプラノの名手と聞く三十才位の女史サマ。彼女の子と近所の子とが喧嘩をしてゐる、時に女史サマがお出ましに成り「いゝ子だ〳〵そんな借家人の眞似をしなさんな、此ちらへいらつしやい！いゝ子だから借家人の眞似をするものぢやありませぬ！」聞けばその子は音樂敎師との仲に出來たいゝ子だつた。

自信は強く

路郎生

七月の下旬だといふのにまだ「川柳の夕」の跡始末がつかない。そのために生玉寺町へ幾度足を運んだことか。下寺町の方から行くにしても清水の方から行くにしても脂汗をタラ〳〵流して大阪には珍らしい、坂

洗濯の泡が眞夏の陽に躍り　同　同
打水もして請願の巡査なり　大阪　無鬼
金貸しの奥に女の笑ひ聲　同　同
蚊に蚤に南京虫に長屋の灯　神戸　鳴玉
取るものを取れば御世辭も言うて去に　同　同
せめて死顔へ煤煙を降らそまい　大阪　卜居
きみさゐてさびしきひろのヒメダリヤ　同　同
腹立てゝ來る集金は年若し　長野　有爲郎
この繭の白さ賣るのがもたいなし　同　同
因襲の音に更けてく通り土間　大阪　白柳子
半襟を撰る十六の戀なりき　同　同
惡緣は相手を呑んだ裾さばき　石川　醉羊
ノーチップ亦來た顔で迎へられ　同　同
ハイトリリボンぶら下げてシャンデリヤ　堺　慈雨來
五等景品デパートに馬鹿にされ　同　同
驛の名を逆に讀むのも旅のこゝ　大阪　二黑子
初年兵なぐられるのも國の爲　同　同
系累もなくお祭の淋しすぎ　鳥取　耕民
救濟の議論は議論店を閉ぢ　同　同
醫師の云ふ咀嚼忘るゝ病み上り　大阪　鯉友
酒からの病氣は春に末練なし　同　同

道を登つて行かねばならなかつた。

椎寺町から行つても、上本町の八丁目から行つても、七丁目から行つても不便さに變りはなかつた。

或る日のこと、私は七丁目で市電を降りた。そして生國魂神社の方へブラ〳〵歩いたこの邊に柳友の家がある筈だがと思ひながら表札を見てゐたが遂々見當らなかつた。私はいつの間にか古道具屋の店先で和本をひつくり返してゐた。

明治初年に出た光學に關する本があつた端本ではあつたが、私のこゝろを一寸ひきつけた。が、懷ろに廿幾錢しか持合はしてゐなかつたので値を聞くこともしなかつた。

私が店を出た時には寶暦五年新改とした一枚刷の「懷寶記」を手にしてゐた。

これとても値打のあるものでもないが、何一つ求めず出てゆく客の後姿を見送つてゐる商人の淋びしい氣持を汲んだからである。

その「懷寶記」に次のやうなことが記事されてある。

天地開闢△天神七代地神五代　兩代合二百七十五萬九千七百六十六年也——と。

どうして知つたか。何から割出したか。實にハッキリしてゐる。コレだ〳〵。この自信だ。私は川柳に、この自信を持たればならない。作句に於ても、批評に於ても。しかし常に自信から、うぬぼれを差引くことを心がけやう。（七年七月）

借金をして誇る可笑しさ　大阪いわを

三井義金給食

大盛や中盛めしの舌ざわり　同　同
十七に意見が過ぎた親の愛　栗林六文錢
氣に入らぬ顔も來て居る婦人會　同　同
死ぬるまで一金也にからまれる　松江柳人
夏は好し裸一つの宿にゐる　同　同
ドン底の中の一人の講議錄　同　翠句郎
だまされたその口髭は立派です　同　同
一人娘をかくまでさしてやつゝ食べ　尼崎虚白
久々の歸省も母の耳遠く　同　同
水引の疲れを見せた品が來る　大阪吐句坊
金時計今日もきまつただけ遲れ　同　同
義理固い人大阪にほつゝかれ　同　岩石
やせ犬のやうに眞晝のバスにゆれ　同　同
奥樣の眼に滿足な大ダリヤ　東京白丘土
憂きこゝの餘りに多き夜の壁　同　同
口笛は響かず自嘲ゝなりし足　大阪晴夫
金の話にさみしき夕餉なりき　同　同
損をしたのは氣の弱い高利貸　西條虹一
一人居る淋しい時の煙草盆　同　同

赤城颪の再演

高橋かほる

赤城颪を再び演るに就きましてトテモ嬉しい事が四つありました、それは外でもありませんが彼の粋な里十九氏が「此の暑いのに芝居みたいなそんなしようむない事でけるかいな……」と云はづに心よく出てくれやはつた事と華水氏がはる〴〵神戸から稽古しに勘助の首を上手にこしらへて來てくれやはつた事と、二南氏の奥さんが御病氣にもかかはらず「わたしの病氣の事は氣にかけずに今日の芝居は無事に仕遂げて來て下さい……」とおつしやつたそうです實に嬉しいお言葉ぢやありませんか

それからも一つは……「あんたお花の台詞を覺へてなはるか、わて淺太郎の台詞のとこを讀んだげまつさかいにお花の台詞をいつぺん云ふてみなはれ」と添乳してゐた家内が云つてくれました事とです……

川柳雜誌句内閣

春田獅子生

發端

待つたなしの歩にされたる犬養殺　路郎

と云つた譯で犬養政友内閣に變つて齋藤擧國内閣が出來上つた。併し諸君よ諸君！時局重大な時でありますからして何時川柳雜誌主幹路郎師に〇〇が降下しないとは誰

おきざりにされて妾猫と居る　大阪　詩郎
湯上りの氣持がつかす二タゲーム　同　同
戰爭も行けば愉快なものでした　京都　富美三
公園のベンチに地下足袋忘れられ　同　同
芭蕉の葉に陽があたつてゐる眞晝　蛍ヶ池　靜太
いつそ死んたるが幸せとは淋し　同　同
紙のような厚みで此の世は善と惡　同　湧水
雜沓へ子の手を痛いほど握り　同　同
蚤を捕る一人居の娘のみだらなる　三重　亨史
田舍道道一ッパイの荷と出合ひ　愛媛　西英子
時計の眞面目さが嗤ひたくなる　三重　沃里
お如滅の聲を待つてる貰風呂　大阪　灯羊子
一服の出來そうにない水車ふみ　同　小舟
ひがしの空に乙女のほゝの色を見る　尼ヶ崎　晩春
俄雨此處から先はアスファルト　松山　耕朗

海水浴場にて

見張船誰も溺れぬ日の長さ　奈良　青柿
荒ッぽいバスに蓮葉な女居る　大阪　世紀
喰ふだけに朝の星から夜の星　京都　啓秀
不仕末の女中に屑屋世辭をのべ　福岡　木喰象

れが保證しますか。其時になつて關員の撰定其他に泡を喰つては誠に天下の物嘲ひであります。其れで私は今の内に準備をして置こうと思ふのであります。左手愈々準備に着手して見ますと驚いた事にはです、凡そいつの組閣の時にも自他推選の獵官運動家がうよ〳〵するのに拙邸は依然として門前雀羅です而も更に驚いた事には苟も天下の川柳詩人に大臣稼業をやらせるとは何事だと云ふ反對の電話電報手紙が山積して寢る塲所もない位であります。併し諸君！只今は非常時中の非常時でありますから暫く御辛棒を御願致しませう。

首相麻生路郎君

豊葦原瑞穗の國の赤ン坊　路郎

政治の要は民をして一人の飢える者もからしむるにある事は今更呶々を要せざる次等である。我が國は由來神國であり、豊葦原瑞穗の國である。元來が一人も飢える者の在るべき理由のなき國である。此の點をしつかり自覺して居る路郎師は言はずして非常時内閣の首相たる資格充分である。此れ以外に蛇足を加へる必要は更ら〳〵あるまい。

外相松丘町二君

今日の我が國は又外交國難時代である。ジュネーヴに於ける十三對一の光榮ある孤立を初め外交上の難題は夥しいものである。此の難局を引受けたる町二君は、句によく交によく實に馬觸れば馬を斬り人觸れば人を斬るの觀がある。難局外相としての貫祿は充分である。

大阪に青き空ある日なり寂し　町二

「北東の風曇」花のない花瓶が一つ　同

文化村玻璃戸が夏を吸うてゐた　高知　鐵吉
ほゝえめばほゝえむ丈で濟まぬ戀　大阪　三丸
見つけられても結構といふ仲　泉南　黒天子
幻の裸婦でなかつた夏の窓　大阪　千雨
隣から下水流れてなすのへた　同　玄坊
惱ましく笑つて戀を讓つた氣　長野　風亭
にんにくを食べて支那人よく儲け　神戸　幸村
色街の灯を見て石に躓躓き　釜ヶ池　洋風
適所適材か胸を病む身なり　同　のぼる
父の死へいち早く來た家主なり　同　煙太郎
女學生筆一本も百貨店　同　松雨
ルンペンが默つて寢てる風があり　同　公平
ロボットに似たる姿の懷手　鳥取　湖山
人並みに吾れも二十四妻ほしき　今市　比佐緒
そろばんの手垢氣强く女戸主　石川　革刃
よい月だなあとしばらく苦を忘れ　大阪　方眠
淋しさの餘りに靴を並べとき　石川　青嵐
病室の母へ眞相讀んでやり　島根　愁人
父の趣味兒の趣味植木鉢並び　大阪　白峯
かまきりの如き姿で子を造り　大和　翠峯

波波を追ひ波波を追ひ裸の漁夫ら　同

内相阿部閑生君

由來日本の大臣は政策の持合せがない。政治に對する確固たる信念がない。之等は總て自身の哲學を有せぬからである。英國に於ては……等と外國に於ける政治家兼哲學者の名前を列擧し出して之を論ずる日になると優に博士論文が出來上る譯であるが今獨特の哲學を有してゐる閑生君が內相に就任された事は、日本の政界に一つの大いなる光彩を增し加へたものと云はなければならない。然らば其哲學とはと開き直られる人々に次の數句を示さう。

憂き朝に濡新聞を捨るなる　閑生
ため息の中に大ため息をつく　同
誰もゐぬベンチとなりて立ちにけり　同

藏相橋本綠雨君

勿論藏相兼副總理である。何々國難の多い中でも最も痛切に切實に吾々の財布に影響を及ぼすべき藏相の地位に十數年間不斷の努力と耐ゆまざる作句の步みを續けて來た綠雨君の就任は誰も異論のない處であらう。其の句風も又財政論同樣甚だ堅實である

衣裳をつけても車は來てくれず　綠雨
佛檀があけはなしではもたなし　同

陸相福田山雨樓君

私は決して軍國主義者ではない。併しで孤立日本の光榮が何時世界を相手に砲火を交えるかも知れないとは、誰の胸裡にも潛める想ひでありませう。斯うなると平素は大演習と觀兵式以外に餘り世間の注意を引かない軍部大臣が實に重要なる位置にせり上つて來るのであります。福田陸相は既に次の句の如く決心の臍を固めてゐります。

夕涼み眞中に坐る岩田帶　大阪　雷兒
時間聞いて又漕いで行く貸ボート　尼ヶ崎　今日郎
手を引いた子供夜店の道を知り　大阪　木公
うれしさの溢るゝ新居となるならん　同　あや美
照り續く野良から見えたピクニック　松本　正司

未亡人へ

銅錢と云ふ金あるを知らぬなり　大阪　坊茄子
面影の一年父は醉ひきれず　同　俊一
左褄また斷髮に追ひこされ　同　紀太
皆追ひ越して歩いた京の街　同　みつる
責任の重き自殺へ櫻散る　同　青兒
女房は辛からう亭主又辛し　同　禿山
金紗着て喰へない世とは面白い　同　富士雄
咳き入れば電氣が二ッ三ッに見へ　同　幸男
靴擦れへ外交員と云ふ悲哀　大聖寺　白花子
手を燒いて當座逃れの誓ひする　筑前　壽惠兒
凉んでる中を夜業は戻つて來　神戸　不夜城
濱寺に住めば日やけをうれしがり　泉北　錦石
夜あかしをして雀にも親しめる　仙臺　道樂
看護婦の旅はうれしい紺の服　高松　揚半山

算盤が教へてくれる道をさけ　山雨樓

海相水谷鮎美君

碇と櫻の徽章を戴いたあのスマートな海軍副官の帽子を試みに我等親愛なる社友同人の頭に載せて見給え、慶く誰れでも鮎美君程しつくりと板について似合ふ人はないでありませう。句も又才氣横溢、スマートのものばかりです。

良き心花を忘れてゐたりけり　鮎美
幻は消えて欄間の佛達　同

法相長谷川一徹君

世は今や擧げてエログロテロのスリーロとインチキの横行時代であります。此の歪んだ世相を正道に直すには人の子のやんちゃと云ひ得んや　一徹
の如き秋霜列日一歩も假借する處なき一徹君のやうな國士を必要とする次第で川柳雜誌社の謂はゞ上院とも云ふべき贊助員から柳秀君と共に特に懇請して就任願つた譯なです。

文相長崎柳秀君

唯主のための醫を疑ぐられ　柳秀
不器用に酌ぐはすかない男　同

之等の數句を擧げて文相として餘りに粹が利き過ぎると非難する者があるならば、夫れは一つを知つて二を知らぬ人である。本年三月本社句會席上に於ける柳秀君の涙聲列び下る講演を聞いた人々は双手を擧げて其の適材適任なる事を賛成するでありませう。

商相朝田新水君

賣損賣られば損といふ懺み　新水

商相新水君は就任後直ちに着手すべき仕事は何であるかと云ふ事を此の句に依つて明かに示して居ります。

所在なく雲をながめてゐるも旅　東京　蒼梧樓
寢付かれず煙草の煙り何處へ行く　武庫　遊歩
四十四を祝ふて生きて行くのなり　福岡　河烏流
このペンに任せて戀がなる樣に　長野　季一
笑うては淋し團扇の女ですま　螢ヶ池　寒子
まごゝが陰氣な雨になつてをり　大阪　正路
汗ふき〳〵やつぱり燗がして欲しい　同　巴調
我こゝになればなかない戀の末　福岡　一田
型錄に印をつけて金が無し　島根　鴉天
氣をきかし過ぎても主婦に叱られる　伊豫　紫雲
銘々が夕刊讀める籐セット　大阪　葉光
棒紅が一つ都會は食はれます　今治　曉童
白粉の香ひへ螢飛びちがひ　愛媛　紫水
號外にルンペン迄が緊張し　大阪　笛秀
癇筋の消える間のない親仁なり　愛媛　世都象
稅金の減つたを妻は淋しがり　大和　白帝子
母の裏を何にも知らず子は育ち　大阪　永樂
まだ母に甘へて見たい二十なり　同　素浪人
月並な世辭も嬉しい孤獨で居　石川　柳村
賣立に壺見る客の足袋白く　大阪　儀助

農相松盛琴人君

歸りたくなつた江戸の人に會ひ　琴人

此の句を示さなくとも琴人君が生粋の江戸ッ子である事は皆んな先刻承知してゐます。だが江戸ッ子に農林の事は解らぬ等と野暮な事を云ふ人には次の句を擧げてギヤフンと降參させてやりませう。

とつぶりと手元へ暮れて鍬をおく　琴人

遞相麻生葭乃女

遞相が伴食大臣であつた時代は過ぎさつた事は葭乃女史が遞相に就任されたのに依つても明らかに證明出來ます。そして時代が進むと通信機關も飛行機が最も重要な位置を占めます。

飛行機は流れゝせなの子は達者　葭乃

鐵相伊藤愚陀君

最近の急行列車「富士」や「つばめ」の興津江尻あたりの海浜を走つてゐる爽颯たる姿を見た人々は明快にして近代的な鐵相を豫想するでありませう。大臣愚陀君は決して諸君の豫想を裏切らない事は次の二句を讀んでも充分でせう。

霧の如く女の息吹き窓によす　愚陀

研ぎ澄ぬ線が肌の生毛を剃る月夜　同

拓相岩本素人君

明治維新から考へると日本も廣くなつたものです。だから拓相の仕事も北は樺太から南はマーシャル、カロリン島に及び、何しろ地球の半分以上に延びて居るのだから大變です。だから元日樺太ではもう初日が上つて居るのに南洋はまだ大晦日元日の午前一時頃と云ふ有樣です。其處で拓相に次の句がある譯です。

伸び上つてもお正月は見えず　素人

葦へる考

—前號近作柳樽よりー

松丘町二

句評を引受けたので、二頁ほど書く。少し纏つた感想を述べやうとすれば、一句で尙二頁を多しとしないのに、近作柳樽の誌友欄から、こゝに拔き出した句は二十句に及ぶから、レヴユウ式の短評にすることにした。

手紙など出して弱さを知られたり みつる

松江の喋朗君の句に「遠ざかる氣持手紙に見えてくる」といふのがあり、僕の舊作に「哄笑のかげの弱さを見透かされ」といふのがあつたところで、この句の持つ現實性の眞と、この句の價値とをいさゝかも弱めはせぬ。なまじ多少の筆が立つといふ自惚が手傳つて、書かでものことを手紙にして馬鹿なことをしたといふ悔と苦笑とは、筆者も亦身にしみて體驗してゐるのである。

大掃除へこの月出來る姙婦がゐ 裸人

これ大掃除は、姙婦にとつては悲劇であり、よそ目には喜劇である。此の世で泣けない悲劇と笑へない喜劇位始末におへぬものが他にあらうか。この句甚だ深刻である。

同じ作者の

晩酌へ袴をはいた娘がゐどり

も、一つのプロレタリアートの家庭を捉へてゐて結構だが、素材が通俗川柳的であるといふ點は免れ難いと思ふ。この慊ひは次に掲げる數句にもあるが、それぞれの表現技巧のなかに、それ〴〵のよさを持つてゐる。この「よさ」はどの程度の價値を持つか、どの程度に評價せらるべきか、といふことは鑑賞者の立場に依つて自ら異つてくるが……。

(一)**子を叱る眼にゐ糸瓜はぶら下り** 重陽子

(二)**團体をぬけて我子に會ひにゆき** とも坊

(三)**溜息をしてお針娘は鍋を燒き** 同

(四)**妻と子と晝の苦勞のまゝに寢る** 茲雨氷

(五)**鉛筆をけづりすなほに返事する** 豊次

(六)**聞きづらい話へ目鏡拭いてゐる** 史錄

裸人君の句で「袴をはいた娘」といふ言葉が働いてゐると同樣、(一)の句は「子を叱る眼」と「糸瓜」との對照に、(二)の句は「團体をぬけて」の親心に、(三)の句はお針娘の溜息に、(四)の句は「晝の苦勞のまゝに寢る」叙法に、(五)の句は「鉛筆」と「すなほな返事」との手法に、(六)の句は「聞きづらい話」へ目鏡を拭かせた技巧に、それ〴〵見るべきものがある。

額の裸婦に尻むけられて待たされる 大門

美しいけれども冷たい應接間に待たされてゐる作者の苦笑は、時計の針の進みと共に憤懣と化して、額の裸婦の尻ほどに膨れ上る。着想の妙讃ふべし。

とかげ動かず冷たい石と思ふなり 南面子

蛇が全身的にぞくりとしたものを與へるなら、とかげは局部的にひやりとした感覺を與へる。作者はこの感覺を直接法によらないで、とかげを乘せた石によつて表現を試みてゐる。小手先の器用を賴

む作家には、決してこんな句は生れない見事に定着した作者の眼ではないか。

經營難を思はす新聞社の 硝子 素舟

その贅肉は幹部の無能を示し、その經營難は窓硝子が如實に語る。但し硝子の無言の言葉をきゝ得るものは、甚だ稀ではあるが。

ふるさとにこんな蛙の夜があつた 寒子

友の死へゆふべの雨が光るなり 同

夕立へ咳のはげしく止まずして 煙柳

屈辱に下駄の鼻緒が切れさうだ のぼる

螢ケ池に病を養ふ人々の心の聲をきけ

現實には幾多の虚偽と矛盾が錯綜し、人々は假裝した世に假裝して生活する。人間の意志を正直に傳へるための方便として生れた言葉は爾來人類の狡智に適應して、無數の嘘の言葉となり、人々は好んで「言葉の嘘」を弄びつゝ、「言葉の嘘」に飜弄されるかくして遂に言葉は言葉の魔術性を會得する。魔術は嘘の極致だ。ではあらゆる穢れを甘受して尚一點の穢れなき言葉は滅んでしまつたのか。裸の言葉の探求者は、決してそれを信じない。眞實の言葉は、地底の水脈のやうに、裸のまゝの無垢を保つて流れてゐる事を確信するのだ。言葉の藝術を奉ずる藝術家のなかで最も「裸の言葉」「眞實の言葉」を貴しとする詩人達である。殘された問題は、如何にして裸の言葉を追求すべきか、といふ事である。螢ケ池の人々が、其精神と肉体との大きな試練の中に在つて屈せず、ひたすら眞實を求めて已まぬ對度に、敬意を表するものである。

川一つ向ふは祭畑をうつ しとし

俳越味の句であるが面白い。

鮮人は鮮人の唄夕月や 山茶花

鮮人を歌つた句として、美しい句である。理由なき輕蔑やことさらの同情が顔を出してゐないのもいゝ。

長女朝子と命名

日月の下に幸あれ女の子 鳴玉

危なげなくがつちりとして、前書付の句として上乘の出來である。

ひとりとりの刈されてかぜがさる 羅門

貧しき事ばかりなるまるく坐る 同

近頃主觀川柳と客觀川柳について何かと書かれてゐるのを見るが、漠然とした常套的な概念から割出した常識論や通俗論で、餘り感心したものではない。さうした議論は淺薄なわりに獨り合點で——尤も獨り合點である點では僕も敢て人後におちないらしいが——とまれ僕の念願は、主觀と客觀とについて、川柳の如き短詩の視角から論じ、ひいては藝術川柳の進むべき道を暗示したい點にあるが、菲才容易に纏める事が出來ないでゐる。

さて、作者羅門君である。君は徹底的に主觀川柳の作家である。絶えざる精進は急速の進境を見せて、既に特異にして出色の存在となつた。君の情熱が正しく燃燒して、崇高にして力強い主觀が、それ自らの顯現として客觀性をも併せ持つとき、云ひ換へると、主觀的に表現して尚客觀性を失はないていの主觀を我がものと爲し得たとき、獨り作家羅門の完成に止らず、新しい川柳の一分野が拓けることにぞる。

× × ×

柳誌評

（八月號）

福田山雨樓

□**番傘**——巨星五葉氏を失つた番傘がその追悼號出すのに九月迄延ばしたことは手温い。七月六日の長逝だから八月號で間に合つてる筈だ。特輯の計劃も故人へ送る贐として肯けるが先づ八月號より始むべきだつたと思ふ。句風再吟味と題し小太郎外三氏の筆は眞面目な研究として嬉しいが、概して初歩向だ。好讀物は寧ろ芝有氏の「句境を擴大せよ」と十紫氏の「生活即川柳」だ。殊に十紫氏の末項の言葉には頭が下がる。

雜吟二十數頁中飛び付くやうな句が餘りに少かつた。

□**ふあうすと**——紋太氏の「本格川柳是非」は所謂本格川柳なるもの、肺腑を突いてゐる點では肯けるが個性とか自由とか云ふ藝術上の最も月並な言葉でその大乘的本格川柳を説いてゐるのは、本格川柳を今頃問題にする以上に古い。「番傘のペーヂ」は何れもよく見てゐる。中でも東洋鬼氏の觀點に最も我意を得たものがあつた。斯う云ふ眞摯な檢討は柳壇を益すること蓋し少くないであらう。

□**きやり**——雀郎氏の「俳怪談」は流石俳諧に造詣深い氏の博識振りが肯かされると共に、前句付の側面觀として興趣豊かな讀物である。「明治元年よりの川柳書」では○丸氏が持前の克明さに鞭打つて細大洩さず網羅しやうとの意氣込がひらめいてゐる。川柳興亡史として見ても面白い。氏が斯う云ふ繁瑣なしかも後方勤務的な努力に懸命なる篠川柳の將來に深思してゐることは敬服に堪えない。テレスコープ欄の「淋しからずや」を讀んでその感を深くした。ところが課題吟で迷亭氏の選評、周魚氏の初歩添削欄、啞三味氏の川柳文典、作句顧問部開設等初心者相手の頁がかなり多いことは、少くとも關東の青年にチトあきたらぬ點ではあるまいか涼臺閑話旅日記ではエロの記事が多かつた。

□**國民川柳**——三太郎氏には槍も鐵砲も向けられないので困る。あれだけ筆の人であり乍ら會員欄の選評走り書の外には表紙に暑中御伺（三太郎）とあるのみだ。他に讀物は一つもない。これが八月號だとうそぶいてゐる三太郎氏なんだからかなはない。これだけ文章の少い川柳誌は一寸珍しい。それでゐて盟主三太郎氏の勉强振りが全卷を覆ふてゐる。

骨をくすぐるやうなユーモアの句が多い。

□**京**——京は人の好い四十男で城を固めてゐる。事務所紫明雜詠選二山、編輯兼發行人千枝發行所樂山、遊擊手福造の諸氏で貧乏ゆるぎもしない。社内の誰一人として敵に作るやうなものはない、皆親しめるものばかりだ。だが雜誌の内容は依然舊態を改めてゐない。傳統を固守する京都のこと故あれで滿足してゐるのなら何も申上げることはない。しかし時には議論もし競爭もして京の底冷えを思はすやうな凄味を見せて頂きたい。

□**みなと**——句の頁が多い。同人諸氏の精進振は大いに結構だが、川柳新星會活躍當時の亞流を汲む白然觀照の句と感傷的メロデーを奏でも主觀句が、傾向を作りすぎてゐる感があるやうだ。

「潮」を廢刊した大塚健爾氏の「柳情片々」天津 和田默然人氏

の評題吟「影」の選評が本誌の重い存在をなしてゐる。異色ある柳誌だ。横濱には早川右近氏がゐられる筈。みなとを通じてその健筆に接したい。

□**むさしの**——俳人風見明成氏の「川柳雜感」で「川柳家がいつ迄も川柳式の眼鏡をかけて世態人情を觀てゐる時代ではない」と喝破してゐるのはいゝが「むさしの」を讀んで昭和川柳の動向を見やうとした」とはチト大げさだ。天王人の「大阪だより」は巨星五葉の追悼句會の模樣を遺憾なく報じてゐる。紅太郎氏の「五葉さんの死」も故人を偲ぶ好記事だ。爆彈欄は夏枯れの爲体。

□**川柳人**——通卷二三八號を算し乍ら孤城落日の觀を呈してゐる本誌が劍師の本壘を嚴として死守してゐる有樣は壯烈襟を正さしむるものがある。扉の川柳祭記念撮影は只わけもなく嬉しい。劍師の「川柳百七十年史」は月々あれだけの分量では物足りない。本誌には眞摯な句評批判の記事が多いのも特色だ。國夫氏の活躍は目覺ましい。通讀して一番心をひいたものは蛇太郎氏の「刺戟を求めて」であつた。氏の健在を祈ると共に誌上の創作に付て一戰を交へたい

□**川柳街**——若さ（純と熱と意氣を示す）の漲つてゐる柳誌だ。清堂氏の「モンターヂュ川柳を排す」舜二氏の「番傘の所謂統一選の批判」無冠王氏の「純無産藝術派川柳の稱揚」は何れも吾人と意見を同じうするもの、しかもある勢ひをもつてゐるのが頼母しい。「夏のナンセンス七話」の入賞二篇は清新な筆觸を感じた。

松窓氏が「京都川柳家評論」「一人一句評」「五葉君を悼む」にそれ〴〵どつしりした筆陣を見せてゐる。素晴らしい跳躍振りだ

□**鯱鉾**——大曾根大吉追悼號である。同誌の創立者として多年中京川柳社を守りたてゝ來たこの先輩を失くした哀愁と痛惜と記事で埋められてゐる。故人が如何に圓滿なる人格と統制の妙を得てゐたかが如實に窺はれて悼ましい。

□**三味線草**——飽迄ジャーナリズムで行かうとする柳誌。川柳みなとが評した如く正に「柳界の飛耳張目、その消息に明るきこと驚異的」だ。雞牛子氏は硬骨と熱血で鳴る男、あれだけの編輯其他一切を君一人で續けてゐる點敬服に堪えない。ジャーナリズムはしかし誤つた觀察によつて讀者を誤まらしむる危險がひそんでゐるものだ、新聞記者もやつたことのある同氏には釋迦に說法だが、一言留意を煩はしておく。町二氏の「この一つの道」東洋鬼氏の「川柳家の感傷」默然人氏の「プリズム」等しつくりした讀物で誌上を飾つてゐる。

□**東北川柳**——すきな道百題、柳誌巡禮、校註一枝筌に蛭子省二氏の健筆倦むところを知らない有樣。中でも柳誌巡禮の「きやり七月號から」は傾聽に價する。雜詠（五花村選）には概して新興派のものが多い。しかし白河能因會同人の句が極めて少いのはどうしたことか。生方賢一郎氏の「近時軟尖集」は興行師の旅日記と云つたもの。東北柳壇發展の爲同地方の作家養成に努められたい。

□**たまむし**——編輯子が言つてゐる通り八月號の減頁は涼しい涼し過ぎて風邪をひきさうだ。中島巨柿氏の「道田葉平氏に望む」は葉平氏をよく知つてゐるものゝ言葉だ。だが巨柿氏の四句は寧ろ散文ぢやないか。秋にはうんと太らすとのこと、切に奮發を祈る。

（附記）この他にまだ澤山の柳誌があるが、誌面の都合で割愛さして貰つた。盲評多謝。柳誌はABC順。

川柳塔

ひ・町・素・琴・山・綠・合議選

○　朝田新水

贅澤が云へて悲しき氷嚙む
棺の出たあとの座敷の廣すぎる
死顔の十六燭もまぶしかろ
ペンの手を止めて嬰子の欠伸を見
禁治產それとは女知つてゐて
駈落の男の膝へ落ちた梯
ゆるく流るゝ笛のひとふし
月の出へわが貧しさもうち忘れ
我が心たちまち悲し宵の雨
勞力のしたゝりなるはした金

○　松盛琴人

晝頃に起きて女給の生欠伸
亡き母の薄き記憶に香を焚く
度し難し度し難しとて老ひにけり
俺が俺がも泣く日ありけり
淋しさは秋の鏡に映る雲
吹くな風せめていつときの命の灯

葉平氏へ（玉むしの句より）

大地に立つたオー・君のオーロラ

○　西田艸樂

戸ざしせぬ田舍の氣安さ見て夜汽車
思ひきつて書いたに讀むだとも言はず
キモノ着て出た日は暇な折かばん
つまらないまた大阪の灯に戻り

○　岩崎柳路

非常線ホースのしぶき顔へ來る
如露の水九官鳥は何か言ひ

◇　水谷鮎美

まごゝろのさびしく青き鳳仙花
酒やめて兒がにぎやかにしてくれる
職工のねばり强さの火華にて

足並をそろへたプロのぷろふゐる
見ぬふりの許す眼もこのすゞしいよ
ねくたいぴんにするごさをみる
幸運のその魂は創らざり
新任に見ゆるかぎりのさくらいろ
時計のねぢかけるこ友が歸りゆく
はげたのは見へず親分まぢめなり
里十九丈へ　二南丈へ
眼つかひの險し血氣の淺太郎
華水丈へ
鼻たかく高く勘助すて科白
かほる丈へ
呼び聲のお花さんやらかほるさん

◇　熊谷　紅

段梯子つばくらの子が覗かれる
嬉しさの涙が皺にたまる母
密談の窓へゆがんだ月が出る
辯解の餘地を餘してかしこまり
傳票へ力が過ぎたホッチキス
待呆けの掌にカフエーのマッチ呉れ

◇　日野　華水

農村の足ぶみごこまで續くのか
山の色海の色の故郷よ
靜寂へ着物の柄が褒められる
解け込んだ樣に女の肩の巾
額の字が讀めて笑つて待たされる

◇　楊井　二南

盆近く丁稚へ國の便りが來
赤城颪上演（四句）
親分こ云へば笑はぬ顔を向け
三味線が鳴るこ樂屋の氣が揃ひ
「やれ御兩人！」おつこ刀が輕過ぎる
近眼同志刀は鼻の前にあり

◇　吉田　水車

スピードが無駄になつてる交叉點
組見の團扇舞臺も使ふなり
新水氏の不幸に
孟蘭盆へ佛のなかの佛なる
タクシーを値切そこねた俄雨

◇　龜井　愚寵

看護婦は幸福そうな顔で來る
夢捨てゝ玩具うる子こなりにけり
レヴユーの線が哀愁こなる彼だ

悼む時本幸二郎

震へ屋根時本兄は死してあり　岩垣奇可愛

◇　病床吟（二句）

末だ死ねぬぞ長男二年六ケ月
胆石に菊も枯れてる餓死してる

夏の夜景

親の大子の大妻も少し大　喜多春秋

◇

見送つて恩師の猫脊眼に殘り
出羽ケ岳じやまくささうに負けるなり
心配があつて近所へ怖い顔　西村明珠

◇

とぼ〳〵と歸へれば西陽照りつける
飯食つて吾れを忘れた日が戀し
月白し波白し夏の夜の寢不足　廣江天痴人

◇

ブルヂョアの生命線に花氷柱

三男を逝かせて妻に（二句）

三男の代りに乳房抱いて眠る
三男の墓に玩具を買つて來る　尼絲之助

◇

猜疑の中の白きズボンの憂欝や
暑さうに坐り扇子を忘れ　N氏へ生田翠夢

◇

凡人と呼ばれん事を願ひたり
ランデヴー街は眞夏の陽にひかり

粒々集

—路郎選—

盆踊島に剛染まぬ娘が一人　松山前田五健

詰襟へ夏痩の頸振つて見る
饑餓線を說く陳情の卷煙草
玩具屋へ委員で來たが欲しいもの
秋だなあ、倚り添ふ月に山の線　御影長崎柳秀

社の退けを待ちつ待たれつ新世帶
眞劍な時の一つに妻の產
鯉幟だらりつとして雨近し
新妻の化粧へ濱の風が吹き
知り人の不幸が俺を弱くする
年下に云へば仲居ほゝ笑みぬ

光耀抄

葭乃選

大阪　貴志子

チョコナンとお壽しが侍る雲の彩
アモルスキン附けねばなら懸が出來
お土産を麥粉ときめた叔父が來る
猿年の梅に壺又買ひ足され

神戸　茂もよ

風の吹く座敷で西瓜食ひ荒し
さそはれたシネマあきらめ迴しなり
七夕の竹を二人に二本買ひ
秋風がちらほら吹いて帶をしめ

大阪　道子

眼をつむる瞼の裏のプロフイル
三階にいゝ娘がゐてる貸事務所
三十と言ふ着こなしの縞明石
髪梳けばほのかに母の香ひする

大阪　公子

海岸へ一年振りの夏休み
白靴を磨いたまゝで日は暮れる
バスガール何かくはへてゐるらしい
虫干へ不歸の旅なる油虫

大阪　伊勢子

まぼろしと氣付き淋しい雨の音
君の名でうめしノートの置き所

○　葭乃

風鈴の正體ガラスとは淋し

高師濱にて（二句）

漸うに松の梢へさはる月
望遠鏡次はやぶれた帆が這入り

光耀抄感想

松丘町　二

光耀抄の句を讀んで第一に感ずることはやはり女性の特長として、纖細であるといふこと、そして善い意味での稚拙であるといふこと。旅役者のやうに惡達者な句や、溫室の花のやうに技巧かぶれのした句などは、藥にしたくも見あたりません。讀んで氣持の惡い滓はちつとも後に殘りません。これは光耀抄の美德です。しかし近代女性の手に成る創作川柳として、いさゝかの野山と粗野と冷徹と情熱とを併せ求めるのは、求める方の無理ではございますまい。かう申したからと云つて、この欄の句に、それらが缺けてゐると云ふのでは決してなく、選者葭乃女史の持たるゝ新しき野心と粗野と冷徹と情熱とを貫く深く高いエスプリに指導されて、女性獨特の新しい川柳の萌芽が孕まれつゝあることを祝福してゐるのです。

今の短詩壇で最も多數の女性から關心を持たれてゐるのは短歌でせう。そしてすぐれた女性歌人も澤山現れてゐます。短歌に次いで多いのは俳句で、川柳は最も少いことは爭へません。併し新興短詩として、それだけ開拓の新天地を豊富に持つてゐるわけで、徒らな詠嘆や感傷を事とする他の短詩に比べて、より眞實により端的により力强く表現してゆく川柳に、女性作家の鋭いメスを期待してゐるのです。

柳の絮

長野吉高

（一七）

出不精な雨軒居士も、天鐘先生だけはよく訪問する。表面は研究上の問題に就て、といふことになつてゐるが、實際は無駄口をたゝきに行くので、これには天鐘先生も迷惑してゐるに違ひない。

天鐘先生は、俗事に恬淡な典型的な學究で温厚そのものゝやうな人である。同じ學究といつてもピンからキリまである天鐘先生を月並なそこらにザラにゐるかけ出しのやつとこ論文博士なんぞと同一に見てはならない。天鐘先生は世界的に有名なドイツ文學者で日本學界より寧ろドイツに於てその名をよく知られてゐる。かの地の大學に數多の貴重な研究を發表して、學界最高の名譽賞を受け、ドイツ帝國學士院會員に推薦されたのは既に二十數年もの前である。曾つては、ベルリン大學やライプチヒ大學に招聘されて、特にドイツ古典文學を講じたこともある。これは丁度、英國のチャンバレン氏が、日本の大學で日本文典を講じたのとよく似てゐる。

天鐘先生が歸朝すると、待つてゐましたとばかり××大學教授に無理に推されて、やむを得ず講壇に立つたが、この爲め遂に天鐘派の學派を生んだ程である。雨軒居士はこの天鐘先生から教へを受けた直屬の門下生の一人だ。天鐘派には俊才が多く、分けて直屬組には學界や文界に名を成してゐる者が極めて多い。雨軒居士は、純粋な學統を繼ぐ者として、天鐘先生に愛され、その將來に多大なる期待をかけられてゐたにも拘らず、すつかり世にすねて年と共に凡々になつて行くが、これでは恩師に對しても申譯の無い話だ。

天鐘先生が世に貽つた幾多の研究は、洵に學界の誇りである。さりながら、物質には無緣と見えて氣の毒な程の貧乏さである。時々、篤志な富豪から「研究費を差上げたい」と申込

むことがあるが「それに及ばぬ」とあつさり謝絶して了ふ。明けても暮れても金の事ばかり言ふ俗輩どもは、天鐘先生の爪の垢でも煎じて呑むがいゝ。

雨軒居士が「ドイツ文學史」の著述に筆を染めてゐる事を誰よりも悦んでゐるのは天鐘先生だ。「意義ある著書とせよ」と葬りに激勵する。それに研究材料はドシ〳〵提供してくれるし、疑義は明快に應答してくれるので雨軒居士としては、何よりも有難いことに違ひない。

この著稿の内幕をのぞくと、當初の像定では七、八百頁だつたのが、まとめかねて更に追補して一千頁に餘る大著になりさうなことである。で、これを上卷と下卷との二部に分ける。上卷の部の稿に着手したのが既に二、三年もの前で、今は下卷の部の約六分通り成りつゝある。妻君はこれを齒痒がつてヂリ〳〵してゐるが、泥田の中に辷りこんだ荷馬車と同じで、さてどうにもならない。

この著述が、在來のものと多少毛色が變つてゐるのは、小說篇と戯曲篇とに分類して、然もその作品を分解して一々批評を加へ、馬鹿丁寧にそれ〴〵の素材調査までやつてゐることだ。そも、文學史とは縱に文學の餉達變遷を述べるだけでその使命を果す、文學の性質種類まで分解するの必要はないゲーテが一七八〇年に呼鈴と、その年の二月二十二日に書函箱を調製した等といふことは、歷史哲學に於て否定してゐるが如く、これは單なる好奇心の對象とはなつても、歷史の對象とはならない。同樣に、文學史に於ても、作家及び作品の個々の事柄を述べても、それが文學としての思想變遷を組織立てる一部分として役に立たない限り何んの意義も無い。

雨軒居士は、どう思つてか戯曲篇に於て、その素材調査を最も詳細にやつてゐる。例へばシュニッツレルの「ベルンハルデイイ教授」は、作者の兄の描寫だとか、ハウプトマンの「フエーラント」は、ドイツの古い傳說鍛治匠ウイーラントをもじつたのだとか、ヴエデキントの「フオン・カイト侯爵」の主人公は作者の友人の井リイ・グレトオルがモデルだとか至極得意で樂屋をのぞかしてゐる。これ等の所論の證左として色々の記錄を引用してゐる。然もその記錄の綿密な檢討までやつてゐるが、これでは一休どちらが幹か枝か解らなくなる。更に驚くことには、雨軒居士自作の三幕物の戯曲「北と南」を引用して論じてゐる。「北と南」は餘り出來のいゝ作ではない。木に竹をくつつけたやうに、これを無緣の「ドイツ文學史」に洒々と書き込んだのは、甚だ怪しからんやうではあるが、然しこれには理由がある。

「北と南」は、日本では最初發表されなかつたものである。これはドイツに淡られて、かの地の雜誌に發表された。ところが、當時ベルリンに滯在して劇文學を研究中だつた某が、何んと感違ひしたのかこれをご苦勞にもまた日本譯にして、故國へ逆輸入して了つた。何處で恁う間違つたものか、某から雨軒居士宛に翻譯通知があつた時は既に「北と南」は日本

の雜誌に發表された後である。これには雨軒居士も驚いたが後の祭だ。某は何んの氣もなく、寧ろ好意的にやつた仕事なので、これを責めるわけにはゆかない。とにかく、その爲めに雨軒居士が惧れてゐた、とんでもない騷ぎが起つたのである。要するに——いや、先づこの戯曲の梗概だけは述べておかねばならない。

Aは文學者志望の青年、始めB女と戀をする。B女の友達のC女が現れるや今度はC女とAとの戀になる。普通ならB女が悲劇役を買はされるところだが、反對に他の男と幸福な結婚をする。AとC女との戀愛苦行が、いよ〳〵結婚といふ段になつて、Aは經濟的に自分が危機にあるここに氣がつく病弱なC女は到々胸の病氣になり、北の國の故郷に歸つて行く。やがてAも亦病氣の爲め南の國に歸る。だがAは全快した。C女は治癒しない。C女はAの許に逃げて來たいと嘆くがそれも出來ない。この間、實に十一年もの歳月が流れてゐる。Aは遂に志望通り有數の作家になつた。曾つての美少女だつたC女は、病氣と懊惱の爲めに見るかげもなく窶れ衰へ到々Aのことは斷念して、たゞ久遠の良人としての幻を抱いたまゝ癈人で姿をくらます。Aはc女が心變りをしたこのみ思ひ、或ひは怒り或ひは悲しみ、誤解のまゝで遂に自殺をして了ふ——。

大體、以上のやうな極めて平凡で月並なプロットである。だが、この戯曲が一寸變つてゐるのは、北の國のC女と南の國のAとの生活懊惱を深刻に、總べてモノローグの形式を採り、書簡を中心にして描いてゐる點だ。これ、この「北と南」は雨軒居士にとつて問題の作である。作の優劣如何ではなく、そのモデルに就てゞある。これがドイツから逆戻りして、突然に發表された時、激怒したのは妻君だ。何んとなれば、作中のC女は人もあらうに妻君をモデルにしてゐるからである。若き日の妻君の性格は、餘蘊なく浮彫りにされてゐる。尤も幾分の構想を加へて、悲劇的な結尾にしたのは雨軒居士だが、それでも寫實的場面の方が多い。はる〴〵ドイツまで送つて、發表した雨軒居士の心情はこの爲めである。

妻君は、今でこそ足の裏を眞黑にして臺所を這ひ廻り、平氣でつまみ喰ひをやつてゐるが、若い時は雨軒居士と相當戀愛苦行をした人間だ。亡父は仙臺の古い二高の出身で、生前には文壇の人とも多少交遊があつたらしいが、急死した爲めに妻君の少女時代は、精神的にも物質的にも、かなり慘めな打擊を受けてゐる。雨軒居士は、妻君を知つてから十年餘りも、色々の事情で結婚せずにゐた。

「北と南」は、この間のことを描いたもので不都合なのは妻君からの書簡をそつくり其のまゝ取入れてゐる事だ。妻君が憤激した理由はこゝにある。だが、妻君は雨軒居士の相手役だけあつて、その書簡といふのがなか〳〵大變だ。何んにも知らないドイツの人々は、「北と南」の東洋のムスメの温和で理智的な情熱を、單に作者の空想から生れたものと思つたら

うか？その書簡には、例へば次のやうなのがある。

お天氣の良い日曜日です。只今貞子と二人でドロップをなめ〳〵小包をつくりました。開けて口惜い玉手箱かも知れません。御笑納下さいませ。くわしくは貞ちやんから申上げるさうですからこれで失禮いたします。日曜日の朝に

八　重　子

ドイツ譯では「貞子」が「サダコ」になつてゐるがこれは誤りで「テイコ」が正しい。勿論、貞子さんのことであるだが、雨軒居士でも時に「サダ」と言つたり「テイ」と呼んだりして一定しない。本人の貞子さんも、人から「サダ」と言はれるとそれで承知をし「テイ」と呼ばれるとそれで押通す。別に訂正しない。

○

たう〳〵御彼岸が參りましたわね。涼しくなりましたのも無理がありませんわ。只今お手紙拜見いたしました。御体がいけないのね。お大事に遊ばせ。お仕事も大事ですけど御体あつての事ですもの。ご自愛下さいまし。餘りお考へなさらぬ方がよろしうございますのよ。頭を使ふ事が一番いけないのですものね。でもおん地がお体に大變およろしいご樣子で何よりと存じます。お母樣でもご一緒におゐで遊ばせば心配ありませぬけど——

○

私のお友達にほゝんごお母樣になつてゐられますわ。お家をお持ちなさるとお手紙などご下さる方ほだん〳〵なくなつてしまひますもの。ご主人やお子たちとお寫しになつたお寫眞などご送つて下さいます。お母樣になられた嬉しさうなお寫眞を拜見いたしまして今迄私はおうらやましく思つた事ございませんの、自分にだつてこんな時が來るご後々の事まで想像しては病床にゐます時でもよろこんで居りました。あなたといふ方も無く獨り病床に長年ゐるのでしたら敏子のやうに私もあの世に行つてゐたでせう。何時死ぬんだか解らない私が何時までも何時迄も待つて頂く事は苦痛でたまらなくなりました。どうしてこんなに氣になるのかあなたの事が氣になつてたまりません。

○

今日は久しぶりで雨が降りまして花草にはよろしうございませう。家のお花畑にはまだ一つも開いた花はありませんのよ。定植さへまだ出來ないのが澤山ありますわ。おん地より二ケ月も遲れて居りますでせう。二十種ほどまきましたから色々と開きませう。朝夕の水かけがなか〳〵大變ですのよ。とても可愛がつてやらないと赤くなつてしまひますし。朝早く起きて水をやるとよろしいのですけど私にはとても出來ません。

○

お手紙有難ふございました。拜見してゐる中に泣けて泣けてしかたがありませんでした。何んといふお寂しいおたよ

りでせう。秋の日の分けても淋しいこの頃私達がこんなお便りを書かなければならないことは夢にも思ひませんでした長い〳〵間お互にごんなに苦しんで參りました事でせう。たゞ幸福になれる其の日のみを樂しみに……昨夜も床の中で十年近い過去の事を考へまして餘り悲慘だつた自分がほんたうに可哀想になりました。

以上これ等一部の書簡を見ても解る如く、非常に暗い感じのする書きぶりである。齒の浮くやうな美辭麗句をならべる事は容易だが、かうした風ながつちりした朴素な筆致の中に餘韻を含ます書きかたは六ケ敷ものである。妻君としてはこれだけは上出來だ。

こんな書簡を公表されて、蒼白になつて憤つた妻君には十分同情する點がある。「わしが作つたのでは實感が無い。でお前の手紙を一寸引用したまでだ。手紙を破らずに置いてゐたのは好都合だつた」と、雨軒居士は涼しい顏をしたものだが、其の實感といふものが妻君にとつては問題である。

當時、この事に就て妻君の怒りはなか〳〵とけず「離婚していたゞきます」とまで險惡になつたが、雨軒居士もそこは男の意地で「女房づらに頭は下げぬ、よろしい」と、妙な鼻つ柱の突つ張り合になつたが、この爭議の調停に立つたのは兩者の母堂である。すつたもんだの一騷ぎの後、とにかく調停者に一任といふ事になつて、到々有耶無耶の中にこの問題は落著した——いや、させられたと言ふ方が妥當かも知れない。モデル問題で騷動を起す事は何も珍らしくはないが、然し多くの場合は外他的なもので、雨軒居士のやうにお膝元から火の手を見せるやうなのは尠い。同じ書くなら、名物の大きな蕗の葉の下でおばこ節でも唄ふ秋田美人のことか、大提灯を長い竿の先に四、五十もくつつけて肩にかつぐ變な竿燈の曲藝のことでも書いてドイツに送つて置いたら、この紛爭は起らなかつたかも知れない。

要するに「北と南」はかうした因緣づきの作品である。雨軒居士がこの戯曲を、またぞろ引つ張り出して「ドイツ文學史」に書込んだのは、作品にモデルを餘りに露骨に採り入れる事の可否問題を論ずるにあるのだ、藝術として其れは成功しても、多くの場合は感情的に失敗になり勝である、といふ一例としてゐるに過ぎない。そして、同樣な運命をたどつたドイツの數多い作家に、同情を寄せてゐるまでゞある。其れ以上の何物でもない。

「ドイツ文學史」の編著方法に、絕對不贊成なのは猫庵君である。猫庵君は「小說篇に輕く、戯曲篇に餘りに重點を置き過ぎる。これでは文學史としての體列を失ふ事になる、戯曲史でないから、衒學ぶらずと無駄な事はよろしく省略するがいゝ」と言ふ。更に「駄作の北と南なんて天氣豫報のやうなものを、何んと血迷ふて書きこんだ」と罵倒する。雨軒居士は「戯曲に就て、從來ろくな研究が出てゐない。故に其の蒙を啓いてやるのだ。フランスはフランス、ドイツはドイツ、

他人の領分に侵入して無用な心配をせず、默つてすつこんでれ」と吹きまくり頑として耳だに貸さない。猫庵君は、あれでなか〳〵の短氣者である。芝で生れて神田で育つ、と言ひたいのだが實は牛込生れだ。江戸つ子は狂が強い。グワン〳〵に怒つて「言ふて聞かなきやア勝手にしやアがれ」と、從三位の大學教授が魚屋の八公のやうな權幕で尻をまくつたものだ。リシユレの約八百餘頁の「フランス詩韻辭典」の翻譯を二ケ月で完成した猫庵君のことだ。尤もその爲め健康を害ねて十日餘り寢込んだが、とにかく雨軒居士の仕事が、まだるつこくて堪らないのだらう。

猫庵君は、近頃ごうも胃が惡く、爲めに本が出せないと殘念がつてゐる。かうなると胃病も馬鹿に出來ない、氣まぐれに魚釣や碁の話を書く連中があるやうに、猫庵君の本といふのも亦自分の駄句つた怪しい川柳を集めての川柳句集に過ぎない。川柳入門とか川柳手ほどきとでもやつて、一理窟こねたいのだらうが、然し流石に身の程を知つて遠慮したものだらう。だがこの本は賣れても賣れなくともいゝと言ふ。句集もすさまじい。川柳といふものゝ爲めに、猫庵君の句集なんてものは陽の目を見せない方がいゝかも知れない。だから胃病と川柳との關係はなか〳〵重大である。

雨軒士は猫庵君のやうに、本は賣れても賣れなくともいゝなんて呑氣な事は言つてゐられない。この點では心配が大きい。折角に苦心して出版しても、ごうせ落行く先は夜店の古本屋で、埃臭いボロ雜誌と一緒に並べられるのが定石だ。印税稼ぎゃ容易では出來ぬ。人と生れては、間違つても著述家なんぞになるものではない。（つゞく）

本篇に引用した個性鮮やかな書簡は私の作ではなく、これは別に嚴とした本人があることを一言して置きます。（作者）

赤城颪噂聞書

不朽洞主人

八月の納涼劇の當日折惡しく私は暑さにあてられてゐたので溜飲の下るやうな、あの赤城颪の劍劇を見る機會を失つてしまつたが、あの芝居は一度神戸で觀たので大體の想像はつく。まづ〳〵上出來だつたらしい。かほるの得意さが先づ私の眼に浮ぶ。なんしろ、他の連中が一切衣裳屋の手を煩はしたに反して、かほるだけは娘お花の衣裳を、しかも錦紗で調へたのだと聞くだけでも凝り方が想像される。それをスツカリ汗で汚して妻君に叱られたなどは決して笑ひごとではない。ソレに多年お道樂に芝居の看板畫を習ひに行つてゐた腕前で、バツクから書割を一切引受けたんだから物凄い。

二南は前日流產したといふ妻君に勵まされて出て來ただけに劍道三段の腕の冴えが思はされる。いよ〳〵芝居にかゝると二南の刀だけが眞刀であることに氣づく。これを見た相棒の華水、二南が眞刀を振り廻はすのだつたら危ぶなくて出られない止めた〳〵と抗議が出る。そこで急に衣裳屋へ走らす騷ぎだつたとか。その意氣見るべしである。華水の老け役は當夜第一の好評であつたとか聞くが斯くなるまでに度々二南につき合つて來たその熱心さには誰もが感心してゐる。里十九の國定忠次は儲け役だけに、多年の淨瑠璃仕込みで、グツと落ちつき拂つてゐたとか。一人寫しの舞臺姿を一枚送つてくれたがその翌日、コレなプロマイドにしたら賣れまつせ、と虹のやうな氣焰をあげて行つた。

千日前今昔史（二）

木村半文錢

（3）一錢屋の變遷

筆者の回顧は「一錢屋」から始る。

千日前の南端、彌生座の東向ひの少こし南より（現在の東洋ガクション風の叩き見世のある位置）に小さな小屋があつた。たしか寶席？と言つたと思ふ。（或は小寶？）そこが一錢屋の定小屋だつた。

間口は六七間、江州音頭の踊り姿や、忠臣藏の山崎街道や、さては熊太郎彌五郎の河内十人斬の看板などが飾られて、小さい顏に比較して莫迦に胴體の長つたらしい、人物が描かれてゐた。

木戸は南と北との兩入口に在つて、三尺四方位の板臺の上で「さあ、いらつしやい〳〵」を連發してゐたものだ。木戸錢を渡すと蒲鉾板をびしりッと一つ叩いて「お一人さーん」と威勢よく通してくれたのだ。木戸錢は大人一錢、小人五厘だつたから、俗稱して一錢屋といふ有難い通り名を頂戴した。

表の方は犬芝居や猿芝居と同じやうに、これから出演する役者や手のあいた連中が往來の方を向いて、餘り賢明でもなささうな人相をむき出しに見せてゐたもので、又、その賢明でもないしやつ面を見るために、用のない閑ま人がつくねんと立つてゐて、ゲラゲラと笑つてゐるなどは、此奴も餘り賢明でもない代物に違ひない。少くても三五人、多い時には二三十人も立ちはだかつてゐるのは敢て珍らしくはなかつた。入つたところで僅に一錢の見料だのに、なぜ其の代を拂つて內部へ入らずに、斯うして外部で立つてゐるか、その點の眞理は捕捉するに苦しむが、然し、斯うした用のない、閑の多い連中の存在することは、いかに其の頃の人間に生活的餘裕が豐富であつたかを知ることが出來得やう。

何れにしても「米が十錢すりやサツコラサノサ、南京米が九錢、のちよサ、しまつせにや喰はれぬと嬶がゆた」の流行唄のあつた時代だから、金一錢也も可なり尊い價値を有したもので、決して現在に於ては其の通用價値も消滅してしまつた五厘錢が、まだ筆者の少年時代には斯うした歡樂地帶へ接衝せしめる機能を完全に有してゐたのだから有難い御時世には相違なかつた。

表で貰つたカマボコ板の木戸札を中の勘定場に渡して、ブラと通ると平民的な場面が展開する。

表の街路に沿ふた方が舞臺であり、樂屋である。面積約十坪前後の舞臺があつて、其の三方が觀覽席で、後方に向つてだん〳〵と高く勾配造り、觀覽に便じ、客は皆な立ちんぼである。木戸錢一錢也を仕拂ふた以上は、貴族も、金滿家も（まさか御尊來はあるまいが）我々風情の貧乏人も一列すまして甘露臺の立ち見だ。その氣分が如何にも平民的で、通俗的で、無差別的で、簡易的で、人情的で面白いと思つた。

淡暗く且つ小高い天井には役者の引き幕(若し言ひ得べくんば)や、ひいき筋からの名前入りの小旗などが交叉されてゐて、道に一錢屋に過ぎないにしても、斯うした部落にもわれ鍋にとじ蓋式の似たり寄ったりの贔屓客があるものゝと、漫ろに興趣を深くしたものだ。

煙草と白粉と髪の脂と髪附と、人間くささと、一種の塵埃の古くさい臭氣と、濕氣と、便所のフクイクたると、 寝雑無比なる香氣にむせ乍ら、客はのんびりと我を忘れて笑ひこけてゐたのだ。開演時間は午前十一時頃から夜の十時過ぎまで、中に一度、夕方に入り替りをやるが、二六時中、客は出たり入ったり、たかが一錢であるだけに自由なものだ。

筆者は少年時代だったから夜は殆ど見ずに多くは晝であった。木戸番の木戸札と共に白い鹽が敬々しくピラミット型に盛り上げられてゐるのを横眼で見乍ら、足を宙に浮かして木戸を潜ったものだ。だから大抵は「御祝儀寶の入船」たる拍子木でガ チャ〜と舞臺の板の間を叩いて、所謂掛け合ひ噺しの頭のはり合ひから見物したものだ。

そして「お一人さん」から「お二人さん」と順々に客が殖えて、果てはぎつしりと詰つてしまひ、舞臺の突端で身動きもできない程に壓迫されて行くことを、いかに心強く感じたことであらう。即ち客が大入滿員になればなるほど、役者の藝にみが入って、面白ろ可笑しいことにも効果が倍加されて行くからだ。時には客が投げるハナのバラ錢が頭のテッペに衝突したり、首筋に飛び込んだりして、不意の悲喜劇を演じることもあったが、いづれにしても お客の多寡は子供心にも關心事だった。

この一錢屋にかかってゐたのは 男を主とした俄、女を主とした舊劇、男女を打って一丸とした江州音頭及び河内音頭であって、今から見れば、低劣卑俗見るに耐えない代物であづたに相違ないことは申すまでもない。要するに今日の萬歳が 既に兩人掛け合ひ噺しの型に成り切ってしまった、肝腎の表道具たる鼓を閑却してゐるのは、進化か退歩かハッキリ論結できぬにしても、其の今日のあるのは恐らく一錢屋の遠き過去に 發してゐるものと見做しても強に不當ではあるまい。現在萬歳界を牛耳つゐる連中の多くが、その前身は斯うした一錢屋に根を おろしてゐたことを知る人間にとっては、斯うした觀察も批評も許容されてよい筈だと思ふ。例へば芳丸にしても千代八にしても、皆な俗稱一錢屋の出身なのだ。筆者から言はせば、其の當時の一錢屋の進化したものが 現在の十錢本位の萬歳與行だと謂ひたい。

昔の一錢、今日の十錢——そこに經濟學的考察を加えなくても、全てが世智辛くなるに順應して、一錢の木戸錢が十錢に展開し、萬歳が鼓を閑却してお座敷藝とまで 出世したのだ。何の七六ケしい理屈が要るか。昔、五厘を拂って見物した筆者が、今こんな減らず口を敲いてゐるのと同じ理由だ。へん、行く水と人の身の上だ。はくしよん。——

閑話休題。さて此の一錢屋に楯籠ってゐたのは—— と言っても大江山の酒呑童子でも但しは熊阪長範でもない。其の頃——明治三十年前後に於て一錢屋を 牛耳ってゐたのは歌松であった。これは藝が達者で、たしか舊役者出身だったと思ふ。舊劇によく俄によく踊りによく、何でも來いの腕達者だった。

續いて登場したのは、後に一錢屋の帝王と仰がれた眼玉こと東家力太郎だった。この人はツイ最近まで千日前の一部に 昔乍らの俤を見せてゐたが、昔の全盛と比較して、今日の凋落に思はず筆者は瞼をあつくした。思へば力太郎の擡頭時代より、新世界の一角に於ける飛躍時代に至るまで隨分ゝ久しい間の關係に繋がれて來たものだ。殊に此の千日前の最初の印象としては、天井や四方の壁間に

飾られ大目玉の定紋や、東家力太郎さんと染めぬかれた幕や幟がどつさりと贈られてゐたのを、一番深くとどめてゐる。

力太郎は人も知るやうに、この一座では座頭であり從つて演出すべき臺本も作れば、趣向も立案したものだ。舊劇ござれ、俄は專賣特許踊りも少々——それに聲もよし、機智も働く、第一呼びものの大きな眼玉が人氣を集めて、兎にも斯にも一錢屋の帝王としての貫目は十分だつた。

傳へ聞く、彼の全盛時代には給金制度でなく、歩興行だつたといふ。以て彼の人氣と其の君臨振りを洞察すべきである。

其他男俳優が三五名と女役者が六七名で切り盛つてゐた。是で舊劇もやれば俄もやる最も舊劇と言つても女許りの出演にはマジメな芝居もみせたが、多くは男が混じつて助演するから、舊劇やら俄やら判別に苦しむほどの滑稽なものだつた。又、女ばかりの演技ではお客の方が欠伸をするから何うしても營業本位にオドケて見せる必要があつた。客としても其の露骨な滑稽に腹を抱えるため、わざ〳〵一錢也を投じた者が多かつたのだ。

舊劇と言つても筆者の記憶に殘つてゐるのは忠臣藏の判官切腹、山崎街道、勘平の腹きり、茶屋場などがあり、國七九郎兵衛、先代萩御殿、岩見重太郎排々退治、松王丸首實見等も記憶の一端に存する。殊に夏祭りの殺し場と、山崎街道は何度見たか量り知れないものがある。

俄は、まことに他愛のないものばかりで、これと言つて纒つた筋を記憶してゐない。彼の一時は千日前の奇蹟として當時の人氣を集中した鶴屋團十郎一派の大阪俄が未だ搖籃時代にあつたのだから、一錢屋の俄にしても誠に人を小馬鹿にした低劣なしぐさに過ぎなかつた

出て來る人物にしても、大抵は型に嵌つた町内のお人よしか、愚人か、世話好きのオツサンかおしやべりの雀のお竹さんか、私生兒を孕み通しの淫奔な娘さんかに決つてゐて筋もそれに相應した程度の、放蕩、姦通、媒介の手違ひ、頓馬な泥棒位ひで、それを時に應じ、機に臨んで、改作したり、增訂したり省略したりして御覽覽に供したのであるから、其の内容の低級さ推して知るべしである

男が女になつたり、武士に扮裝したりする時には、額から上に髪だけの部分の張り、紙細工のメンを被るのだ。だから正面向いてゐる時は女の髪や武士の髭が見ゆるけれども、後ろ向きになるとさつぱりわやである。被てゐるおメンの裏が見へるし、散斬り頭がニユツとも何とも言はずに露出する。

又、舞臺にしても小道具としては何日も同じ煙草盆と、入口の格子戸があるばかり、背景は正面に吊り下げる座敷用のもの、田舍風の遠景位ひのもので、それを上げたり下げたり手つ取り早いこと夥しい。

正面に引き幕を引いた時代もあつたが多くは幕なしの開放式で、チョン〳〵と幕ぎれの柝が入ると、役者は生き人形の姿よろしく見得を切つたまゝ「左樣なら」をするか、又は「おい幕だ、幕だ」と役者自身が自分の着てゐる衣裳の袖をひろげたりして、幕を閉める格好をなし、一座大笑ひして引つ込みとなるといふ。寔に重寶至極な演出法だつた。

舞臺の正面の上部が、役者の部屋であつて右の端に樂屋があり、左に鳥屋口があつた。とや口には芝居の花道と同じやうに幕を下げてあり、そこから俳優が出入りして花道の心持となるのだ。とや口の幕の向うに役者が二階の部屋へ通ずる梯子があつて、可なり急角度に立てられてあつた。

役者が其の梯子を下りて來て、ひいき客と囁いたり、うどん屋にうどん代を仕拂つたり

但しは小便に行くために、更に下駄をつつかけて、白粉をし汚たい顔を羞かしげもなく、便所（客席の左横）へ通うのも克く眼についたものだ。

歌松——力太郎時代から、ガスト（四旅八）小芋の擡頭時代に入つて、この一錢屋も可なり時代の涙に動搖しはじめた。

即ち斯の定小屋が取り拂はれて 其の後に南座？が出現することになつて、力太郎一派は一時松島方面へ移動せねばならなかつた。それは恐らく 日露戰爭前か若しくは其の戰爭の酬であつた時代であらうも知れぬ。

斯うして一錢屋の特質が 再び千日前に見現したのは、同じ日露戰爭直後であつて、場所は現在の 東洋劇場の建築されつつある一部で、昔は横井座、春日座の存在した一角だつた。勿論、横井座が前に燒失し、續いて建つた春日座も同じく回祿に見舞はる、謂はゞ空地となつたところへ、臨時の半永久的小屋を建てゝ、我が懷かしき鄉土的娛樂機關一錢屋は復活したのだつた。

然し、この時は名詮自稱ではなく、木戸錢も二錢となり、時には紋日に五錢と高く値上げされたこともあつた。

此の時代には前述しだガスト（是は背が高かつたから瓦斯燈（街燈）を皮肉つた綽名から出たのであるが）當時は日露戰爭から凱旋して名も四旅八と改名し、人氣が沸騰してゐた。年は若いし、前男もいゝし、體格も立派だし、（砲兵だつたさうだ）したので、藝には是ぞといふ特色もなかつたが、然し人氣は莫大だつた。未だ、彌生座前に力太郎傘下の一人として存在した頃には、さまで出色のある藝風でもなく、どちらかと言ふと不器用な位だつた。

それが果然人氣を蒐めた。勿論日露戰後の事だつたから、凱旋將軍のやうに歡迎されたのも無理はない。ヌーボーとした藝風と、嗄れた聲とが筆者の記憶に遺つてゐる。

今一人、最も人氣を博したのは 月の家小芋だつた。小柄な男で、チョコ〳〵〳〵と忙しさうに、そして鼠のやうに口を突き出しては、いつも阿呆な男ばかり演じたのだ。この男は出現して尙ほ日も淺いに係らず 人氣があつた。

と言ふのは其の態度が憎めない 分子が多量に含有してゐたからだ。故人小島六厘坊も非常に小芋ヒイキで、閑があると五錢白銅一枚を握つて、小芋見物にやつて來たものだ。筆者と二三度鉢合せして互に 大笑ひしたのも記憶を新にするやうだ。

こゝでは既に女役者が凋落し、萬歲が頭角を現はしかけ、一方に於ては劍舞、壯士芝居が參加し、俄は依然として勢力の大半を占めてゐた。これは或は筆者の記憶の錯覺かも知れないが、兎に角、さうした印象をのこしてゐるのは事實だ。

この四旅八、小芋時代の人氣が二三年續いて、筆者の記憶はポツリと斷絕した。恐らく後に新世界の一角、現在の國枝館の北手に於て力太郎、四旅八、小芋、千代八等が群居した時代を現出するまでは、松島方面へ塒を變更してゐたのか但しは旅から 旅へ轉々としてゐたのか、その點は詳でない。

が、新世界で久しく（〻言つても三五年を出でまい）打つてゐたのを全盛期として、漸次凋落の步調を辿り、現在に於てはすつかり萬歲にお株を奪はれ、彼等自身も、又昔日の俄本位ではなく、萬歲師となり、尙ほ今日の大衆と握手接觸する關係にある。考えて見ると世間は狹いやうで廣く、時間は長いやうで短い。

萬歲が昔の一錢屋から胚胎した事は 前述の通りだが、昔の客と今の客とを比較してみると、大體に於て大衆的としての差異は認め

難いが、然し、内容は兎に角、外面的には客種が良質になつたことは否めない。昔の一錢屋は迚も下卑た雰圍氣に包まれてゐたが、今日の萬歳には下卑た人種も多少は混入してゐるが、然し、客種は確かに向上したと同時に、昔の一錢屋に横溢した野性味素撲味、露骨味が漸次影を淡くし、ものみなが時代の文化を意識し、洗練されつゝあることを自覺し何となく動く氣配の仄見ゆるのは、一面には結構な事には違ひないが、他の一面には言ひ知れぬ淋しいものが足音も立てずに迫つてゐることを見免すことはできない。

今日の萬歳の全盛が、凋落を前にしての線香花火の存在に過ぎないと觀ずることが不當であるとするなれば、筆者は其の杞憂を斷然棄てるに吝ではない。然し、又一方に於て、一錢屋の凋落が今日の萬歳を生みつけたことに起因することを諒解する以上は、今日の萬歳が、軈ては全盛期より凋落期に到達した時いかなる型態と内容とを以て、再び來るべき大衆に呼びかけるであらうかを興味ある宿題とする。（つゞく）

西町之 MEMO

緑雨

▼春元紀太君は今回社友として入社されました、今後活躍を祈る。

▼同人伊藤愚陀君は八月八日から福井方面へ旅行されて東尋坊の涼風と海の碧いのが何より喜びですと云つて來ました。

▼社友松村夢裡君は日本樂器會社の運動會で八月六日から七日にかけて叡山から琵琶湖巡りをされて歸阪されました。

「學僧を生んだ叡山霧深し」いわを
「靜寂を破り雨垂の音高し」夢裡

▼社友熊谷紅君は八月十二日三河新須磨海水場へ行かれて左の句を寄せられました。

涙しぶき風にも耐へよ磯千鳥。

▼社友越田久水君は高岡支部の幹事で本社から送本した「川柳雜誌」を讀了後每號高岡市立圖書館へ寄贈されてゐられるそうです。同圖書館から禮狀が着しました。

▼社友姫田夕鐘君は八月十六日郷里德島へ行かれて盆踊をしてこられたそうです「ひさ〳〵に踊の渦にまきこまれ」夕鐘

▼社友立井登美坊君から七月廿七日附の滿洲國新切手で滿洲便りを寄せられました。

▼社友西村山月君は八月十八日郷里岐阜へ行かれ長良川を遊覽されたさうです。

▼池田享史君は七月一日から八月五日まで志摩の友人の宅で遊び引續き紀州那智方面へ旅行されました。

▼竹内機見女さんは八月一日郷里高知へ歸へられた便りを室戸岬から寄せられました。

▼「川柳街」で故池田柳舟氏の一周忌を兼ねて八月例會を十五日夜催されました。

▼ふあうすと川柳社では八月三日夜協和會館で神戸市物故川柳家の追善句會を催されました。

▼神谷狂司君から八月十五日日本アルプスへ登山されて左の句を寄せられました「靴すれをさすり岩湯に湧くのろけ」「ドロップへ山の兒のお手まんまるく」

▼久田狂水君が主宰する「川柳あけぼの」は七卷九月號で廢刊される由。

▼前八月號は創刊以來始めての延刊讀者諸氏へ大變な御迷惑を御かけした事とお詫び致します。主幹の病氣と印刷場の機械場に病人が續出したので何とも致し方がなかつたので申し譯がありませんでした。

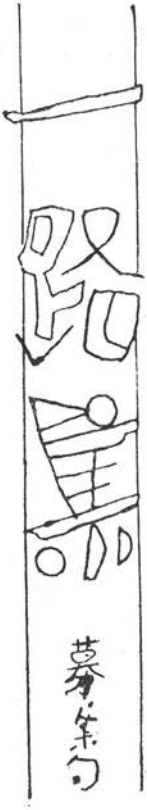
▼本號の編輯は路郎先生、山雨樓、琴人、町二、水車の諸君と私とで本社事務所で致しました。

新誌友

（七年八月廿日まで）

「川柳雜誌」前金半年分壹圓八十錢以上拂込の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載致します。何卒新讀者を御勸誘下されるやう御願ひ申します。御紹介下される方には川柳雜誌の近刊を見本として差上げますからお申込み下さい。（緑雨）

角田のぶを（關本雅幽）小崎勝江（生田翠夢）石崎千仞、小坂英三、高見柳骨、塚本棹二、中田松太郎、坂口芳一、上田光胤、坂井拓水、糸谷千春、青柳紅雨、平野瓢々、鈴木九葉（本社事務所）括弧内は紹介者



黄昏

長崎柳秀選

黄昏の色海岸を異人行き　幸村
黄昏へもう一蹴の汗を拭き　湖山
(佳)黄昏の鏡へ生きる肩を引き　革刄
熟柿にたそがれてゐる田舎道　秀一
黄昏に妻の襷も家の味　耕民
たそがれて湊へ戻る船頭唄　壽惠兒
黄昏に夫の歸り待ちわびる　寒月
黄昏に遍路の杖も淋し過ぎ　阿鴻
黄昏の寒さを知つた海水着　胡蝶
歸宅途兒等の遊びへ笑ひかけ　馬骨
貧しさの中へ黄昏訪れる　玉兒
黄昏へ娘の皈り氣をもませ　木公
兒をつれた遍路に野道たそがれる　今日郎
(佳)約束のある黄昏へほゝゑまれ　道樂
黄昏を悠々然ミルンペン君　虚白
黄昏をバスも疲れたまがりやう　不夜城
黄昏の街を煉つてく優勝旗　吐句坊
黄昏を夜店の塲割もめてゐる　沒食子
黄昏をしよんぼり丘に立つて居た　いわを
黄昏に大きな希望持つて往く　正路
望鄕の念黄昏の窓に立つ　棹二
黄昏れて際立つ顔の浴衣がけ　玄坊
黄昏や初奉公を母思ひ　千雨
黄昏の街に交通事故があり　秋生
黄昏を感傷的に別れたりしをし　
來客をうながす暮の電氣つき　素月
黄昏の畔を唱歌の兒が歸り　伊勢子
年老ひし母夕燒へ手を合し　柳村
黄昏の戰死悲壯なラッパの音　葉光
黄昏に妾の化粧出來上り　菊路
黄昏の空地襷の人も立ち　雅幽
たそがれて戻る荷馬車は唄こなり　沐天
今日もあふれた黄昏を雨に遭ふ　暢山
黄昏に孫はをわれて戻つてき　雷兒
黄昏へ母の浴衣も涼しさう　白峯
高臺に立てば黄昏煙るなり　白柳子
黄昏の戀へ口笛冴えてゐる　華水
黄昏に麥刈り殘る雨模樣　鯉友
黄昏の汐へ嬉しい船歸る　白陽
黄昏の金波まばゆきボートなり　あや美
(佳)黄昏へ憎みきれない腕を組み　民郎
戀を得て黄昏時を落つかず　蕊雨來
黄昏れる西陽へ向いて脊延する　鳴玉
黄昏の街を腰辨忙しさう　美津女
漁村の黄昏時の賑かさ　一田
たそがれて町の灯火戀しがり　紫雲
黄昏を今補回戰必死なり　青柿
黄昏の色へ殘つた畑工事　鴉天
黄昏へショベルが重い地下工事　水車
畔上げや蛙の聲にたそがれる　柳民
たそがれる別府に着いたホネムーン　麥刀子
黄昏に本を讀むなこ母の云ふ　貞三
黄昏へ鰯を少し賣殘し　英賀夫
子を先きに黄昏時の一家族　紫水
黄昏れて故鄕を懐ふ旅の宿　灯羊子
黄昏に行水の娘の曲線美　笛秀
黄昏を飛行機が飛ぶ會戰地　虹一
たそがれた街を小走る燗徳利　白花子
讀經の聲山門はたそがれる　紅
黄昏の露次から豆腐屋呼ばれてる　富士雄
人の身の黄昏ばかり哀れなり　恒三郎
哀愁を知る黄昏の旅にゐる　八歩
黄昏の襷は出たり這入つたり　四五磨
新妻の門に出て見る日暮時　青坊主

黄昏の長屋ごぶ板踏み外し　青嵐
父母の耕す蹶へ黄昏れる　無鬼
黄昏を待たず花火に子等騒ぐ　禿山
やゝこしい黄昏時の臺所　一柳
黄昏て遊び疲れた兒が歸り　南葉
公園のベンチあたりが暗くなり　素浪人
黄昏へこれからと云ふ紅をつけ　白帝子
出稼の身へたそがるゝ海の色　柳村
きれ話黄昏に立つ長い影　ひさし
(佳)黄昏の渚を歩む出養生　永樂
黄昏の彼方に淨土ありと說き　紅洋
歸國にきめた黄昏の空　機見女
ルンペンへ波は呀くやうに暮れ　玉絃堂
黄昏へ海は眞ッ赤に燃て居る　曉童
黄昏の空に色々雲が浮き　柳夢
黄昏の空を鴉の一羽行く　富美三
黄昏をルンペンと云ふ歩きやう　柳次
黄昏を家路に急ぐ人と牛　遊歩
黄昏の鍛蚊たゝいて金桂香　義郎
法師蟬暮れ行く空に鳴き續け　世都象
塒へといそぐ烏の二羽三羽　同
(佳)黄昏へバット一本吸ひに出る　今雨
黄昏を急ぐ母あり託兒所　同
空想へたゞ赤々と黄昏れて　鐵吉
黄昏へ俺は詩的の眼を持たず　同
黄昏るゝ露次を蝙蝠抜けて行き　巴調
舟に灯がちらほら港たそがれる　同
黄昏れる鋪道を急ぐ迷ひ犬　明珠
黄昏に霞れ殘りあり小商人　同
黄昏の厨に光る母の聲　孤鶴
(佳)黄昏を言ひ合したか皆歸り　同
黄昏へ鮮婦の服の目立つなり　翠夢
黄昏の門にいつもの乙女が居　同
森の家夕餉の煙ゆるく立ち　烏流
ひぐらしが一きり鳴いて暮かゝり　同
(佳)黄昏れる窓へ疑ひまだ續き　勝二
黄昏へあくまで白い顔に出來　同
黄昏を窓にもたれて故郷の事　方眠
黄昏の街を夕刊走しつて居　同
黄昏に老ひ行く齡をふり返えり　青兒
入相の鐘に涅槃の響あり　同
黄昏の酒が吐き出す菜ッ葉服　肩山
黄昏の水道を待つアッパッパ　同

眞相

散らむとす雄蘂雌蘂は相抱き　半文錢
大工の小悴それがキリスト　同
なりなりてあまりしがぴんと　同
米の喰えない百姓でそろ　同
蚤虱南京虫よルンペンよ　同
ばつたりと落ちしは風の音なるか　同
只かぶり振るばつかりで子供泣き　一生
黄昏の曠野歩哨の眼が光り　白帝子
女給みなもう黄昏の模樣替　義郎
たそがるゝ椽で息子は髮を別け　佐一郎
黄昏のボートは輕く波に搖れ　遊歩
黄昏を行く自轉車へ兒がもつれ　柳次
黄昏の荷馬車疲れた音で過ぎ　富美三
黄昏にごの寺か知ら鐘が鳴り　柳夢
黄昏へ一聲高し「鰯エー」　曉童
黄昏のドサクサに靴してやられ　肩山
(人)黄昏へ母の氣性は縫ひ續け　白丘土
(地)黄昏を盲目きちんと坐って居　春秋
(天)黄昏になると息子は家に居ず　唐變木
(軸吟)黄昏え水打つ母のかたし　柳秀
(同)留學生に迫る黄昏　同
(同)黄昏を出る春に母の瞳も感じ　同

阿部閑生抽

眞相が言へず拳が慓へてる　同
お互に追求せずに酒を飲み　同
眞相を摑みそこねて殘る酒　民郎
眞相になつてカラーの汗じみる　同
眞相へ生れ變つた瞳と出會ひ　同
あかるみに出せば夫人の虚榮から　しとし
眞相を摑み慌てる電話口　同

すら〳〵といふは事件の外ばかり　同
眞相へこれからふれる水を呑み　柳次
眞相へふれてはならぬ瓜を嚙み　同
眞相をはなれて醉ふた醉ふた　同
代表も冒は眞相知らず來る　水車
眞相を知らず高塀續くなり　同
眞相も解らぬまゝに轉任し　同
眞相をつかめば淋しさがしみる　明珠
泣いてゐる譯氣の毒な顏で聞き　同
曝露して記者の心に輕い悔　白丘土
引越してから眞相を聞かされる　同
眞相のわからぬまゝに廊下過ぎ　新水
眞相を見拔かれてゐる僕に酌し　同
眞相を母へ迫つて悲しまれ　千雨
眞相をはつきりさせて疑はれ　同
眞相を問はずに外科醫メスを取り　素月
丸腰になつて眞相ぶちまける　同
眞相もきかず今夜は寢ること極め　夢裡
かゝわりのなき眞相へ筆をこり　同
眞相を知らぬマダムの怒りよう　義郎
家といふものが二人を叛かした　同
眞相を打明けてから溝が出來　禿山
眞相を聞いて子供に泣かされる　同
怪談は家賃を値切る下地にて　紅
眞相を思ひ掛けない人に聞き　同
眞相を話さず夏の雲を見る　麥刀子

はつきりと世間を知つた就職期　同
眞相がばれて緣談それつきり　菊路
書置が出て眞相がよくわかり　同
眞相を語れば午前二時が鳴り　柳村
安全な首弱點を握つこり　同
良心もなく眞相は語られる　青兒
眞相を聞いて牧師は目閉ぢる　同
ほんこうの事へゴクリと咽喉佛　春秋
核心に觸れて氣拙い茶となりし　革刄
黑煙の下ボイラーの火が燃ゆる　烏流
眞相が知れて此世が恐くなり　巴調
眞相は血がついてゐるペルシヤ猫　秋生
眞相を秘めて見つめる罌粟の花　耕民
白粉にやけて眞相に觸れてゐず　華水
眞相を握つて里へ泣きにくる　初歩

新金色夜叉

眞相を抱いて純情に蹴られてゐる　葉光
眞相は金庫のやうに口を閉じ　玄絃堂
今頃になつて眞相まにあはず　方眠
眞相の根から生えたる柳の木　鳴玉
我秘密重き枕の父に聞き　遊歩
親友になつて妾の子と知れた　秀一
眞相を書いて淋しい婦人記者　幸村
こかく眞相てえものは甘いもよ　正路
眞相はマンホールの蓋がこび　玄坊
二人の心を見透く親を持ち　暢山

眞相をきかせてくれとよつて來る　美津女
女囚美しく眞相まだ吐かず　柳民
眞相をあばけば皆んなけだもの　鐵吉
眞相を母は小聲で問ふらしい　木喰象
眞相を腹で迷つて嘘にする　一田
病院はまだ眞相を知らぬなり　今雨
局面は意外の方へ進展し　肱川
眞相は疑問のまゝの遺書であり　鴉天
眞相を身振り手眞似で語り出し　世都象
眞相かわからぬまゝに詫びる嫁　孤鶴
眞相も知つておきたい彼女なり　伊勢子
明かな笑誤解のこけた聲　曉童
實際は噂程ではない美談　沐天
眞相を語るに唇輕きけいれん　英賀夫
眞相は忘れられたが獄に居り　灯羊子
眞相を〇〇にする事ばかり　白花子
眞相をよう知つてゐるインク壺　虹一
眞相を知つて二人が酒になり　詩郎
眞相を戸蘚騰本見て知りぬ　一柳
眞相は九官鳥も知つてゐる　佐一郎
眞相を握つて汽車のまごろしく　四五磨
無視されたまゝに眞相なつてゐる　沒食子
右翼とは云へど眞相わかりかね　柳夢
眞相を裏切る世間を斜にゆき　呑湖
眞相を言ひ兼ねてゐる嫁の襟　道樂
眞相はこれだと小猫提げて來る　富美三

奥深く秘めて娘の死んだ謎　壽惠兒
眞相を知つた女の目のくもり　錦石
うなづく理解眞相にふる　白柳子
眞相へ青葉の音のすが〳〵し　湖山
眞相を殘らず知つたカルモチン　白帝子
たよりない顏で眞相話される　柳村
眞相を聞くも話すも酒がいり　ひさし
眞相のばれた二人へ灯取虫　永樂
眞相を知りたる暴風雨の夜を出る　いわを

眞相をごつちの家も知らぬなり　勝二
眞相を聞かして腹を立たせたり　雅幽
知つてゐる土手の柳は闇に垂れ　同

（選後）匿意が内容を低下するかと思つたこの欄を、まづ牛文錢氏の出句によつて異彩あらしめ、他にも「ほんとうの事へごくりと咽喉佛、春秋」の如き作品があつて興深からしめた、採錄句七分の一、全没三分の一といふのが眞相です。

屑

◇　艸樂選

（佳）紙屑にしてしまつたる氣の弱さ　明珠
紙屑を引つかき廻す所書　紅
紙屑を捨てる背中は風へ向き　革又
紙屑をつぎ合せてる刑事室　孤鶴
紙屑に先を讀みたい記事が切れ　鐵吉
紙屑を戀は擴げたり　柳次
天才の兒が紙屑の中にゐる　佐一郎
（佳）紙屑屋辻を曲つてひらげて見　水車
紙屑屋迷惑さうに儲ける氣　紅
今日でも屑屋は輕い荷で歸り　沐天
或る日フト屑屋になつた友に逢ひ　菊路
屑買に値踏されそなのを曝し　民郎

西田艸樂
福田鶴峰　共選

屑買のはかりへ女房じつとゐる　翠夢
紙屑屋小腰かゞめて通される　春秋
宿替へすかさず屑屋やつて來る　英賀夫
長い紐ほどいて屑屋金を出し　短兵
お拂ひにマッチ一つを置いて行き　湖山
さみだれになやまされたる屑拾ひ　柳夢
屑屋さんとソッと呼んでる娘聲　美津女
屑拾ひしつゝも父である威嚴　柳民
會計が立つてやつぱり屑拾ひ　玄坊
屑拾ひ或る日の夢を笑はれず　秋生
久方の儲けに屑屋飲んでゐる　沒食子
瓶は瓶並べて屑屋値をつける　一風
（佳）屑籠へ捨てたと云はぬ強情さ　新水

無表情な手が屑籠へ運んでる　かつら
屑籠にあつて女中は信じられ　狸村
總がゝり屑籠あけて調べ立て　巴調
屑箱の中に破戀を投げすてる　與詩郎
屑籠の底をたゝいた苦勞人　白峯
屑籠へ讀みつゝ破る日記帳　白帝子
屑籠に姉の丸めた物があり　才兒樓
（佳）人屑に云はせて別に持つ理想　耕民
痛める母子屑一人に眠られず　鯉友
育方おんなじ筈に屑が出來　初步
屑一人あつて遠慮の母でゐる　勝二
屑と云はれカスと云はれ生きて居り　禿山
人間の屑が工場の煙を見る　季一
糸屑も捨てゝはならぬ手藝展　今日郎
アレ糸屑がと新妻そばへより　杢十
糸屑にまみれて退けの笛をきゝ　曉童
糸屑を金魚呑んだり戻したり　白丘土
かんな屑扳手の型で拂ひのけ　素山
御普請ゆほめ〳〵鉋屑貰ひ　道樂
鉋屑蹴る樣にして硯ぎに行き　當樂
綿屑がついて哀れな顏の色　四五磨
オガ屑もまぎれ込んでる水枕　陀羅助
なんにかはなる女の布の屑　棹二

採るも憂し棄てる惜しゝ布の屑　一生　白柳子
硝子屋の屑は氣味よい者を立て引越しの屑へ末ッ娘氣を殘し　木公
退屈はポケットの屑拂つてる正晴　借金のないのが嬉しい袖屑　錦石
屑にして値段が違ふものを撰り　新水
屑物もあつて特價品の山　吐句坊
すぐ屑になるを母にたしなまれ　今雨
(軸)屑の値に叩き錢を摑んでる　艸樂

屑屋、紙屑糸屑鮑屋、硝子の屑から人の屑世の中の屑を全部集めて、さてその中から撰り出した玉が右の如し。紙屑籠の中から女文字が澤山出たが、女文字だけでは句にならず人の屑にも色々態々あれば、人の屑にあらで句の屑多し。もつとよき選者ならば、もつと多く屑をはねつけたらん。

◇　鶴峰選

屑屋町電燈淡く暮れかゝり　青兒
屑芋が芽を吹き出した梅雨上り　錦石
紙屑の中から秘密にぎられる　呑湖
鐵の屑花火となつて散つて居る　壽惠兒
ほろ屑の欲に老母の淋しまれ　季一
屑米の腹に重い鍬を持ち　湖山
紙屑を猫がそばえるのごかな日　遊歩
屑も出る事と算盤おいてゐる方　眠狸村
屑籠にあつて女中は信じられ　今雨
すぐ反古になるの母にたしなまれ　河烏流
紙屑のかげに細そ〳〵生くる人　耕民
お邸で出た屑物に起る反抗　吐句坊
裁ち屑は截ち屑として用があり　義郎
朝露の妻も子もあり屑拾ひ　白柳子
硝子屋の屑は氣味よい音を立て　民郎
屑籠も脫稿らしい霸氣に觸れ　富士雄
持つ人で光ろうものに屑でゐる　鐵吉
屑紙に先を讀みたい記事が切れ　佐一郎
天才の兒が紙屑の中にゐる　巴調
總がゝり屑籠あけて調べ立て　鴉天
糸屑を丸めてお茶を入れに立ち　虹一
屑箱に犬の欠伸を見付けたり　白丘土
紙屑を拾つて母の氣は足りる　杢十
綿屑の樣な「タンポヽ」空歩き　正晴
かんな屑炭いて大工の冬の朝　秋生
屑拾ひ或る日の夢を笑はれず　翠夢
屑買ひのはかりへ女房じつと　棹二
轉宅の屑はも一度見なほされ　幸村
紙屑を捨てゝ淋しい若い母　人間の今日を生きるに芋の屑　勝二
屑箱の底をたゝいた苦勞人　白峯
家柄へ馴染の屑屋やつて來る　英賀夫
新家庭屑屋默つて行き過ぎる　白帝子
人生の疲れし屑を燒く夕　いわを
綿屑をつけて近火の見舞に來　ひさし
日本海にコックが捨てる大根屑　笛秀
屑買ひの後姿に目が光り　世都象
屑買ひの財布やたに搖つて出し　西英子
華かなりし頃を屑屋へ思ひ出し　水車
退屈の母きれ屑を縫ひ合せ　明珠
屑籠をさがせと亭主色をかへ　しとし
絹糸の屑にお師匠くだびれる　曉童
屑籠にまで姑の目は屈き　菊路
今日とても屑屋は輕い荷で歸り　沐天
文明が人をこんなに屑にする　麥刀子
紙屑屋迷惑さうに儲ける氣　紅
糸屑を繫ぎて母の老ひ給ひ　興詩雄
賣る覺悟然し屑屋の安いこと　一風
屑屋さんソット呼んでる露路の角　美津女
屑あさる一人に街の月が更け　かつら
(佳)木屑積み積み大工の子の抱負　葉光
(同)鮑屑ふんで大工と大且那　春秋
(同)屑拾ふ車の上に兒は元氣　柳民
(同)屑籠へ捨てたと云はれる強情さ　新水
(同)屑子繭と娘を連れて町に出る　暢山

スエノさんを悼む

麻生路郎

朝田新水君の令閨スエノさんが七月二十四日午後五時十分に、守口町の自宅で永眠された。

スエノさんは光耀抄の中でも特に光つてゐた作家であつた。光耀抄の作家の多くが抒情的な一つの流れをもつてゐる中で、スエノさんだけはその性格の勝氣の反映で、句は新らしい穿ちに生きてゐた。その穿ちにも女性としては珍らしいほど危ぶな氣がなかつた。自分は一度も會つたことはなかつたがその句風には特に親しみをもつてゐたのである。

その訃が傳へられたのはあまりに突然ではあつたが、スエノさんは春のころから藥餌に親しんでゐられたのださうだ。床の中でも「川柳雜誌」が來ると二三度は繰返へして讀んでゐましたとは夫君新水君の語るところであるが、その熱心さがあればこそあれだけの句が出來たのであらう。古くから「川柳雜誌」は讀んでゐたが作句をはじめたのは昭和五年の春ごろからですと、これも新水君の話である。僅に二年餘の作家生活としては珍らしく多くの佳句を遺してゐる。

スエノさんは明治三十五年三月二十六日に、德島縣那賀郡羽之浦町古庄で生れ、大正十年三月二日、その二十歳の時に朝田家の人となつた。趣味としては讀書、園藝等。行年三十一歳。法名釋尼妙季。若くして逝ける君が冥福を祈り謹んで哀悼の意を表する。

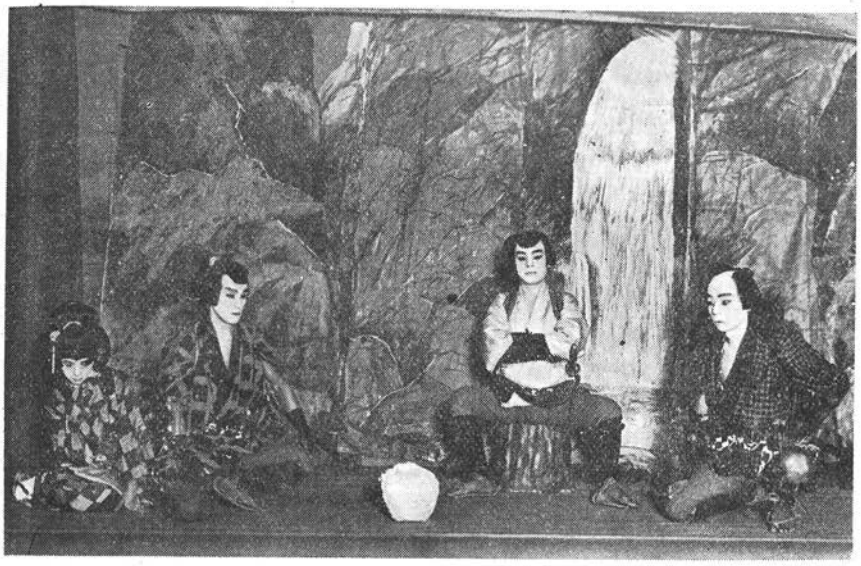
（カットの寫眞は朝田スエノ女）

スエノ句抄

燒香の型を和尚に示される
方針を問はれて女給とも云へず
洋裝にその挨拶の派出なこと
別莊で病む奥樣に仕へてゐ
妾宅の皮肉肴屋からも聞き
結婚といふ水引をまぶしがり
あれもみな嫁がこさへてくれました
刷毛使ふ頃を御目覺め遊ばされ
匂ひだけ隣へ分ける味淋干し
新緑のほこり夫のブラシ借り
かちわりを口にしてほごきもの
手のとゞく柿をむしに帶がたれ
家計簿へ節約すれば外で飲み
なぜ何れも女性の畑を耕すに努めたも
擧手の禮我が子ながらも成人し
強ひて笑へど心は曇る秋の虫
北風へ女の顏の念のいる
元日にだけは歸つてくれました
婦人科と美容院とに今朝は出る
失職にもう嫁ぐ氣のタイピスト
戀の浴衣むつきとやならん
白紛を塗る氣になつた夏の空
ごの筆を使ふて見よう硯箱
三越を出れば日傘に風があり
失職にあられぜ夫働かず
新緑の中を地ならし機のひゞき
新緑のほこり夫のブラシ借り
糸屑に嫁の在所を尋ねられ
言ひまけて呑む牛乳の冷たすぎ
かちわりを口にしてまほごきもの
若造りしても夫の氣にいらず
狸フト我れも祀つてほしいなり
アパートの冬は淋しい波の音
地圖を手に父下宿屋へやつてくる
美の極み孔雀の帶の花もよし
清き愛バラの模樣にまで凝つて
羞恥心肩のあたりの線にまで
手のとゞく柿をむしるに帶がたれ
逢ふ事の橋を怖ろしげに渡り
振袖の柄見せられて話し込み
家計簿へ節約すれば外で飲み
子を前に妻のお酌が意に適ひ
身構へる猫に夫婦の立ち上り
後添ひと知らず疑問の眼をそゝぎ
悲しみの屏風よ姉を見送りて

各地柳壇

＝れ創を句るあちのい＝



納涼劇　赤城颪舞臺面

（るほか化お頭の助勘　（二南）郎太淺の詞板　（九十里）次忠定圓　（水華）入定の山高（りよ右てつ向

本社納涼八月句會

八月六日夜於ちとせ倶樂部

昨夏の動物園句會に代ふるに、今年は新柳劇を上演して、吉例納涼句會を飾らうといふ趣向。舞臺には幕がひかれ、花環が飾られて會場を明るくする。京都や神戸からの參會者を加へて、まづ作句精進。山雨樓氏作のパンフレットは天地人問題その他を提供し、新しい試みとして宿題吟を募集した。路郎主幹は微恙のため不參されて一沐の寂しさを與へたが、珍しく葭乃女史が顔を見せて下さる。定刻九時半、待望の新柳劇「赤城颪」は開幕された。素人ばなれのしたその演技は觀衆を魅了し去り、大喝采裡に終演したが、別項記載の通り、息もつがせぬ面白さと緊張裡に終始し、近頃まれな收獲であつた。散會十時半。

當夜の出席者。

葭乃、絲雨、孤舟、黑ン眸、鵜郎、豆秋、司郎、柳民、鶴峰、遊步、晩春、藤澤、古木、卯三、鮎美、鳴玉、鵜足、白峯、雅幽、新水、松之助、小柳子、あや美、紫石、芳太、一久、柿三、山雨樓、禿山、水車、紫明、町二、掉二、葉平、艸樂、白柳子、溪花坊、夕鐘、のぶを、おさむ、汀華、里十九、華水、かほる、二南

兼題　海　岸　琴　人選

海岸へ來て戀人のマンドリン　鵜郎

母一人岸にのこして海水着　松之助

海岸でヨットの連れがあぶなかり　柿三

青春の口笛波へ高く鳴り　掉二

海邊から夕やけこやけの歌となり　夕鐘

海岸へ塀を廻りて建つ工場　水車
麻雀は更ける海岸荒れてゐる　司郎
青き渚にま晝の風は光る也　葉平
別離淋しく潮鳴りの重し　華水
病身は海岸だけで戻つて來　卯三
二日月をみて磯の香をなつかしみ　鵜足
胸を病む芦屋の濱も夏が來る　紫明
海岸に女性の肢線みるまひる　溪花坊
打つ波をジットながめて恐はくなり　一久
電灯がついて海岸靜かなり　同
獨身のやけに波頭へぶつかり　紫石
海岸へ來て獨身は淋しがり　同
珍らしい櫛を漁師は拾ひ上げ　新水
波の音聞いて乞食の小屋があり　同
海岸に散る三越の包裝紙　鮎美
海の戀四瓜の味も知り給へ　同
海岸へ詩の一編をすてゝゆく　同
(佳)海岸で會ふ家主の褒せすぎし　孤舟
(佳)戀人に夜の貝殻はまだ踏まれ　白柳子
(佳)海岸が強く生きよと說いてくれ　艸樂
(佳)ラブシーンへ海岸の砂燒けてる　卯三
(佳)海岸で大きな心呼び戻し　夕鐘
(佳)しれつたい聲で呼ばれる濱の姉　掉二
(佳)海岸でつたエロを包んでかへる　葉平
(軸)海岸のキャンプ炊事の煙を見せ　琴人
(同)海岸へ創痍をうけて一人來る　同

兼題　袖　二選

特價部で邪魔になるのが袖だつた　汀華
あつい鍋娘は袖でそつと持ち　一久
ひるがへる袖の輕るさへ言ひ寄られ　柳民
病上り浴衣の袖のたよりなく　司郎
打ちあける氣持になつて袖を置き　鳴玉
忙がしい袖へ我が子を寄せつけず　孤舟
妹の袖に親しむ日もあつて　華水
薄情な女の袖と思ひゐず　鵜足
女教員小さい袖がありはあり　琴人
總踊り袖々がからみそう　鶴郎
働ける袖にお酒の汚點があり　同
醉ふて戻つて片袖がない　古水
醉ひすぎて仲居の袖を綻ばせ　同
ためなみだ袖に殘つた別れなり　夕鐘
風はらむ秋になにかはみ出でる　同
淺ましき男に見えて袖引かれ　艸樂
はづかしい人を袖から覗くなり　同
涙にぬれし袖を無情と言はん　鮎美
親方は叱咤の袖をまくりあげ　同
刺繍あるマダムの袖へ風よ吹け　同
(佳)袖をかへせば夜が更けてゐる　鵜足
(佳)マシンオイルが滲み込んだ袖夏たけ　葉平

席題　張板　溪花坊選

張板に正午のサイレン慌てさせ　松之助
張板をうらみがましく叩いてゐ　柳民
張板を半分張つて病みつきぬ　鶴郎
張板を隣へたのみ留守にする　豆秋
張板の母へ子供は櫻んぼ　鮎美
張板が並びあぢさい影になり　雅幽
張板を片蔭にする雲の峯　紫明
張板へ母の機嫌は背を向け　山雨樓
張板へ虹はちく〳〵薄くなり　同
(秀)張板は夫が歸る日足なり　黑ン眸
(秀)張板に大きく亂れ蟻の道　司郎

席題　素顏　雅幽選

チヤーリーの素顏はにしやちこ張り　晩春
素顏なら未だましだろに此の寢顏　柳民
素顏にうつる妹のこのみ　あや美
白粉を落した顏を親しまれ　孤舟
素顏見つむはかなし破れし鏡　葉平
寂寥は素顏のもてるなつかしみ　鵜足
病んでゐる素顏へ通る赤とんぼ　鮎美
取消しにしたい素顏をもつ女房　山雨樓
飯臺へ向いてほんとの顏になり　白柳子
よつぽどの事に素顏で奥から出　同
丹那の氣を知つて素顏が慌てる　艸樂
電話口素顏は素顏の聲になり　同
(佳)ひよるながき素顏の人となつた晝　鮎美
(同)朝の鏡の中に忘れし素顏　葉平
(同)素顏から素顏へしけた旅役者　町二
(同)その素顏父を知らずに賣り出され　山雨樓
(同)金のない素顏が月に浮いてゐる　同

席題　質札　互選

質札は女名前になつてゐる　鳴玉
財布の中に質札だけのうらさびし　晩春
バット買ふ度に質札いつしよに出　掉二
質札の二三枚片付かず　禿山
質札がオベラバックへ這入つてた　豆秋
厄介な事に質札だけのこり　白峯
質札に讀めぬ字もある使にて　白柳子
手がゝりは只質札があるばかり　鶴峯

スエノ女追悼句會（大阪）

於　端之坊

八月二十日

七月二十四日に永眠されたスエノ女を偲ぶ集りが光經會の主催で、俄かに殘暑の加はつた二十日午後七時から開かれました。一同

故人を偲びつゝしめやかに作句に精進、夫君新水氏の挨拶に續いて各題の被講があり十時過ぎ散會致しました。路郎主幹良乃女史共に差支があつて欠席されたのは殘念でありました。

當日の出席者は

茂代、蒼太、機見女、鶴峰、綠雨、水車、司郎、八歩、琴人、禿山、柳民、京郎、柳次杏三、豆秋、兼平、伊勢子、松之助、かほる武子、町二、里十九、あや美、山雨樓、素人みつる、とも坊、白柳子、鬼丸、舟々、規堂、革又、いわを、夢裡、石皮、棹二、紫石、毒仙、夕鐘

追悼句

（各地より夫君新水氏に寄せられしもの）

彌陀淨土を携えて逝けば蓮　笑郎
蚊やり火に在りし日語る君となり　石皮
白蓮の俤偲ぶ露と知る　羊紫樓
湯の沸ぎる音も聞えず戸をあける　白柳子
ありし日の廊下を思ふ水枕　武子
明け易き家に夜明けを待ち兼る　毒仙
思ひ出の白百合淋しくうなだれし　翠夢
後姿よぶにまかせて涙ぐみ　民郎
夏の窓妻と覗けば星一つ　明珠
思ひ出す事ばかりなる涙なる　晃卓
燈明へ話かくればゆれて吳れ　同
初盆へ佛の中の佛なる　水車
聲のない闇の厨にぢつとゐる　蒼太
夕顔へはかなく逝きし人憶ふ　佐保園
朝顔の咲かぬ今朝なり物忘れ　光路
此の秋は一しほ虫の聲悲し　素人
散る花に悲しき夏の雲が湧き　綠之助
阿彌陀經額の汗をふきあえず　杏三
夏の風御靈を呼びて獨りゐる　鮎美
紫陽花へ亭主の肩か痩せてゐる　山雨樓
亡きひとの髪一とすじが殘る櫛　町二
ありとしもなき靈棚を覗き込む　琴人
おもかげが夏の雲にもうつるなり　綠雨
蓮の葉の雨にうたれし風情なる　路郎

兼題　牛　襟　町二選

牛襟は赤く唇軟かし　奇可愛
牛襟の垢を氣にして世帶じみ　晃卓
白い襟みんなうれいにしづむ顔　方眠
牛襟は白く座長の椅子へ着き　京郎
母親の選つた牛襟氣に入らず　水車
牛襟のれぶみに男笑はれる　綠雨
牛襟の店美しく更けて風　司郎
無地衿の好みも死んだ母に似し　機見女
牛襟に刺繍の趣味があつた妻　とも坊
思ひ出にその牛襟を讓りかれ　柳民
特價品ばかりの妻の牛襟　杏三
牛襟へ幸福の影しのんでる　紫石
牛襟の色歌澤に凝つてゐる　素人
なやみある顔に牛襟うつりすぎ　石皮
ありし日の妻の匂ひがする襟よ　夕鐘
襟一つ買へぬ女給に秋が來る　松之助
同窓會丸髷のえり老けてゐる　茂代
牛襟の好みも同じ仲のよさ　伊勢子
あの頃の妻牛襟の垢をふき　鬼丸
牛襟の皺も殘さで逝きし妻　禿山
色褪せた儘牛襟は箱の中　いわを
牛襟へふと麗人の死を思ひ　翠夢
牛襟が十九と見せぬ澁さなり　同
紫陽花のはなの牛襟さびしい妓　鮎美
牛襟へ言はぬ尼僧の心かな　同
急用へ牛襟だけをかへて出る　みつる
白き牛襟に處女の夏來たる　同
牛襟にうつる香りも夏やせし　舟々
牛襟のどれも淋しい色にして　同
蓮つ葉な態度に出るも朱子の襟　白柳子
白襟のその夜氣付かぬ酒の染み　同
牛襟の色もあせてる秋近し　武子
氣に入らんだけで牛襟ほつとかれ　同
牛襟へ未練は揮發買ひ替へる　革又
秋近い膝に牛襟よりまどひ　同
牛襟にゆかしき好みみせてゐる　夢裡
流行は追はず牛襟ジミな柄　同
牛襟は青く國から出て間なし　かほる
牛襟が寫る鏡がかけてあり　同
嬉しい日母も牛襟かへてゐる　八歩
なつかしい人に牛襟見なほされ　同
黑繻子の襟に或る日を思ひ出し　新水
牛襟のいつそ無地なる夏の色　同
人絹の牛襟をかけて宵を出る　里十九
一掛の襟も主人の好みなり　同
牛襟を買ふて待たゝ秋祭　山雨樓
牛襟へ父の見立てはなつてゐず　同
牛襟も派手に雛妓の稽古本　琴人
牛襟もいつとはなしに無地をかけ　同
牛襟の色あせしまゝ夏たける　葉平
牛襟に妻の匂ひの殘るは哀し　同
白襟の妓が人形のごと座る　同
（軸）牛襟の色にそぐはず曇る空　町二

席題　朝風呂　かほる選

姉にさそはれて朝風呂に行き　武子
公休日だけ朝風呂へ行くときめ　みつる
朝風呂は一番といふ朝の艶　柳次
朝風呂で今夜のセリフ口すべり　革又
朝風呂でいつもの人がお叩頭をし　豆秋
朝風呂に此まゝれむい月曜日　禿山
朝風呂を馬穴でうめてまだ熱い　琴人
ポマードを光らしてはる朝の風呂　町二
朝風呂を出て氣の毒な町の角　白柳子
寝不足の朝風呂下駄は横を向き　杏三
朝風呂の一人は休む肚でゐる　水車
朝風呂の出勤せればならぬ身の　新水
朝風呂で繃帶のした人に合ひ　緑雨
朝風呂でお灸の話聞いて來た　茂代
とりとめもなく朝湯の希望　司郎
藪入りはもう今日限り朝の風呂　松之助
朝風呂のか〳〵ミルクとトースパン　里十九
いれずみが來て朝風呂はみなだまり　棹二
ぜいたくなこと朝風呂で考へる　八歩
朝風呂へどこかで時計鳴つてゐる　同
朝風呂でいつもの顏にひやかされ　京郎
朝風呂でワマの合ふたる高笑ひ　同
(人)朝風呂へ久々に來て落ちつかず　革又
(地)朝風呂で見馴れた男よく太り　夢裡
(天)朝風呂は初めてと云ふ長い帶　舟々

席題　過去　素人選

過去を包んだ金紗にて　水車
過去は語ろまいさあ飲まう友よ　みつる
出世して過去は逸話にされてゐる　革又
古き心の傷にそとふれしひと　葉平
想出は死線を越へた過去なりき　夢裡
口紅は過去を包んで赤く濡れ　蒼太
過去を言はず今日もせざに出るのを　武子
過去の富父は淋しく笑ふのみ　松之助
過去は過去ケシの赤さにある惱み　柳次
過去の事忘れて二人手を握り　鬼丸
切れ〳〵に過去夢見るきり〳〵す　豆秋
その頃の夢なつかしき日記帳　町二
あの時は心にもなく叱りつけ　規堂
集ればまた追憶の新らたなる　同
乳の痛み過去に觸られし思ひする　舟々
過ぎ去つたことに御飯が亦遅れ　同
そんな過去もあつた友も友も老い　琴人
こうろぎに過去を思へば灯が暗し　同
てんぐうを見てゐると過去の面白く　かほる
二階から下りると過去も考へず　同

席題　歌留多　杏三選

おはこだけ取る氣の歌留多は前に　伊勢子
占いの解けず歌留多を繰りひろげ　夢裡
歌留多會母入れ智惠と知らぬなり　とも坊
歌留多會母じれつたい眼でおしへ　棹二
歌留多會母の手つきが叱られる　町二
ソプラノが躍つて歌留多一つ飛び　蒼太
母火鉢かゝえて嬉しかるた會　司郎
嬉しさはいろはかるたに母も居て　革又
歌留多會にらみ合つてる天津風　柳民
歌留多なぐつまらぬ氣持ち向ひ會ひ　同
歌留多會好きな女と差向ひ　柳次
好きな札逆に讀んでる歌留多會　同
歌留多に負けて男すたりぬ、　山雨樓
歌留多會煙草を吸ふて叱られ　同
きつちりと座つて勝つた歌かるた　かほる
許嫁らしく歌留多をかたすける　同
讀札の減るのを見てる病み上り　舟々
花札の行儀も女同志として　同
(佳)赤丹へ自信をもつたひざを立て　革又
(同)歌留多會花瓶の花がふと崩れ　町二
(同)一枚になりてまかせぬ歌留多　禿山
(同)歌留多會隠居の方で咳がする　規堂
(同)お母さんいろはかるた〳〵疾れて來　柳次
(同)首筋がみんなきれいなうたかる　かほる
(同)かるた會かきもちなりと燒ぎま　棹二
(同)歌留多取密柑の皮の置所　とも坊
(同)歌留多讀む父は寝さしてほしい　松之助
(軸)歌留多讀む傍にこげしビール瓶　杏三

席題　髪　互選

せめてもに髪の黒いをほめて置き　水車
洗ひ髪ラジオに依つて日が長し　司郎
煩悶と髪を亂してゐるばかり　みつる
ふくらして結へぬ淋しい眼をふる　伊勢子
ほつれ髪ギロリと動く被告の目　豆秋
黒髪を切りて心のほどを見せ　機見女
黒髪のぐつと握ればすごく見え　新水
同窓會その境遇と言ふ髪の型　とも坊
女らしい匂ひは矢張り日本髪　柳民
髪の艶合せ鏡の灯がすべり　革又
生前は髪さへ梳かずにたゝかひし　赤仙
髪結つて妻小走りで戻つて來　鬼丸
目の底に髪結ふ妻の目が殘る　葉平
後からのぞき込まれる髪の出來　八歩
寫眞にもはつきりうつる髪の艶　里十九
髪結ふて歸つて來ると十一時　かほる
立秋も待たずに髪の毛が拔ける　素人

突然の客に髪を氣にしてゐ　緑雨
洗ひ髪きかぬ氣性のほそおもて　琴人
一筋の髪から謎が解けて行き　茂代
立つた儘髪を分けてゐる男の手　山雨樓
子が出來て髪は櫛の齒通すだけ　同

川柳雜誌　加茂川句會（京都）

八月十九日夜　於仲源寺

平岩司郎報

「回を重ねる度びの盛會をお祝ひします」と言はれた幸男兄の言葉も嬉しく作句にふけりました。

兼題　同情　紫明選

同情の最後に選ぶもの悲し　進示郎
心から同情をして本を伏せ　紫水
同情をされる身金の音を聞き　豊次
同情をしつゝ大旦那は叱り　草村
同情の中に乞食の子は眠り　双光
同情をされて頬へ秋の風　秋生
同情の手紙に不足税を取られ　幸男
同情へ遺族健氣な事を言ひ　櫻月
子を抱いた男乞食でよく貰ひ　同
同情の嘘を病人聞きとがめ　欽乃
同情はすれど斷る松葉杖　同
同情は一錢と云ふ鍋の音　乃の字
貰ひ泣き鼻つまらせて幕となり　同
（五客）背中のほこり拂つて遣る同情　流石
（同）被告席同情をする眼と出合ひ　紅壽郎
（同）同情の眼は一とゝこを見なかつた　迷帳
（同）かげ口に姑を憎む共同栓　修造
（同）四五人の情で歸へる旅費が出來　由之助
（人）同情もせずスキ焼を匂はせる　幸男
（地）氣にくはぬ奴が同情してくれる　豊次
（天）同情に一層くやし涙が出　司郎

兼題　上陸　幸男選

上陸のやう〳〵湯屋を見付け出し　京郎
上陸の人人人のランチゆれ　麗光
上陸の移民に明日も晴れらしい　草村
上陸へ彼女忙しい化粧なり　喜久男
上陸の瞳には日本の青い松　富美三
上陸に近く甲板シヤツが干せ　進示郎
紅白のタラップで笑顔寫される　京二
半舷は明日のプランでハンモツク　紫水
上陸の緊張靴の紐をしめ　司郎
上陸の皆なつかしい影を踏み　紅壽郎
上陸の一夜なまめく灯へ座り　同
上陸を知らす二枚の頼信紙　双光
上陸の眼は母親を探して居　同
上陸は屋根の瓦の黑さから　甫三
上陸の波止場は虹の立つ日なり　同
（五）上陸の一歩希望のアスハルト　柿葉
（五）棧橋をもう三尺で土の色　ゆきら
（五）凱旋の生きては踏まぬ土なりし　白扇
（五）上陸の馬潮風を尻にうけ　秋生
（五）上陸の明日に迫つた靴の音　紫水
（人）上陸の夜二人とも嘘を云ひ　甫三
（地）乘つて來た船の灯女も見送る　草村
（天）上陸の眼に日本の旗ばかり　双光

席題　散歩　紅壽郎選

當ての無い散歩夏帽洗はせる　みのる
此店で散歩は煙草買ふにきめ　喜久男
疑ぐられそうな散歩の時間なり　佐一郎
京極へ曲る揃えの貸浴衣　紫明
マ・と來る散歩家まで歩かされ　司郎
散歩する俺に圓タク手を上げる　麗光
飼犬を連れた散歩は原へ來る　新水
郊外に住んで散歩の下駄があり　幸男
散歩して來ますと錢の音をさせ　同
見つかつた散歩に憎まれる　修造
散歩から歸ればパンと乳の膳　甫三
平熱へまだ散歩がゆるされず　同
散歩の眼に退屈な交番所　双光
交叉點だん〳〵散歩になつて宵　草村

席題　流星　紫水選

マドロスの眠れぬ夜を星が飛ぶ　双光
流星に十二時がなる鳩時計　秋生
流れ星一とつ見付て寢に上り　京郎
風絶へた空に不氣味な流れ星　進示郎
盆踊りの櫓へ星が流れたり　白扇
流星母國へ長く尾をひきぬ　啓秀
星流れて京洛の空陰惨　柿葉
校庭の映畫を越えて流れ星　司郎
故郷を棄てた後悔へ流れ星　流石
流れ星慢病院の屋根へ落ち　佐一郎
流れ星俺も一座を拔けて來た　艸樂
俗界は靜かに眠る流れ星　みのる
言ひ敗けて座ればつゞく流れ星　修造
丸丸と流星を見る兒の瞳　由之助
流星へ女しつかり手を握り　同
背の兒が背中を叩く流れ星　紫明
流れ星母が戀しい夜なりけり　同
待ぼけの頭の上を流れ星　同
（五）指差せば微かに星の尾が殘り　京二

(五)京極のあたりは赤い流れ星　紅壽郎
(五)襟足の白さが怖い流れ星　同
(五)流星の行衛凝視た歩哨の瞳　乃の字
(五)流星へ諦めた咳する女　みのる
(人)流れ星片親の子の眼をかすめ　幸男
(地)ロボットの如く流星見てるなり　新水
(天)特報の電波へ星が流れたり　白扇

席題　槍投　新水選

槍投の刹那に光る肉体美　櫻月
我が腕も千切れてしまへと槍を投げ　佐一郎
槍正に飛ばんとするなり肩の肉　流石
槍投げへはるか彼方で手を擧げる　紫明
投げ返す方も槍投げいけるらし　豊次
フイルドを越へよとばかり槍を投げ　佐一郎
槍投げの音寄宿舎は知つてゐる　甫三
記録へとキラリひらめく槍の先　白扇
必勝の意氣が唸つた槍の先　紫水
槍投げは我兒と見えぬ新記録　司郎
槍投げの唸りに起る感嘆詞　みのる
青空へ世界記録の槍を投げ　迷帳
槍投げの十六ミリへ無理が出來　金波

席題　歯　艸樂選

痛む歯へ仁丹噛むで朝を待ち　櫻月
標本室猿の歯数へ少しもめ　みのる
痛いなと生えかけの歯を覗き　京二
歯の欠けたとこが氣になる舌の先　紫水
意地悪い女の歯並が美くしい　佐一郎
歯ぎりぎり友を知つたりキャンピング　柿葉
歯のそろふ頃女の千夏くしやべり　麗光
辨明の奥歯に菜ッ葉つまつてる　白扇
おはぐろの歯にかがつしりと賢母　修造
虫歯かみしめ戀など捨て　新水
入歯したこのごろの母若く見え　由之助
叱つてる人の金歯の光りよう　甫三
白き歯へ紅を映したおちよぼ口　蒼太
入歯をばはづせば子供不思議がり　富美三
お歯黒に昔の京が偲ばれて　迷帳
嬉しくも乳房に痛い歯を叱り　進示郎
眞夜中を歯痛の子供に起される　金波
附添もついでに虫歯を見てもらひ　同
痛む歯へあらん限りの口開く子　流石
抜けた歯を見せに泣きつゝ子は歸り　同
考へてゐるのではない歯の痛み　紅壽郎
歯の痛む姿に女惚れられる　同
級長の氣むづかしさは歯の痛み　同
(佳)歯の抜けた夢へ女將の神詣り　啓秀
(同)なすび歯を見せ舞妓の小さやくれ　紫明
(同)皮はだのかわいが美味い歯を誇り　京二
(軸)白い歯を見せて白々しいお世辭　艸樂

甲賀のつどひ（滋賀）

八月七日　於兒玉小雲居　蒼太記

夕立

山消えて農夫かゞしのやうに立ち　蒼太
まつしぐら夕立道の土をはれ　同
夕立の翠の山の虹の橋　小雲
濡れ猫の馳込む土間も濡れてゐる　同
朝からの夕立下女も樂をする　同

ひかり集 —その九—（大阪）

水谷鮎美報

禱り

哀傷に祈らば落葉する音の　卜居
灰色の壁は默して祈りゐる　同
祈る娘へぐびぢん草がたれてゐる　同
人なく祈る石に苔ありき　鮎美
乙女祈りて朝露のひかりて落つ　同
暴君に裸女は祈りしかひもなや　同
キリストへ祈りて處女をまもりゐる　同

川柳雜誌 松江納涼句叢

天痴人報

月殷ぎの旱りに入つた八月一日夜、天神裏の湖上へ舟を流し乍ら納涼句三昧に耽つた後更に天神境内の一富士食堂へ席を移し生ビールの泡と共に隙し藝やエロ漫談を吹き上げて散會したのが二日午前〇時半頃であつた。

席題　舟出、流れ星、夏の女、涼み舟、

互選、他は共選

涼み舟流れにまかせ呑んでゐる　白谷
昨年は獨りであつた涼み舟　同
方角を心配しつゝ涼み舟　哲緒
アツパツパにする決心を吹き出まれ　同
ルンペンの眼に又一つ流れ星　同
待ち呆けしてゐる空を流れ星　同
涼み舟財界不況など忘れ　玲人
涼み舟女の聲に獵奇心　同
灯を消して流れに竿さす好い月夜　同
處女といふ誇りを見せてアツパツパ　同
アツパツパ際どい所を見せつける　同
流れ星巡航船の目指すところ　同
舟虫の戀を見つけた未亡人　同

舟虫がビールの底でつぶされる　同
涼み舟マドロスらしい腕もあり　卷二
渇上りへマダム夏痩らしいなり　同
アッパッパ長屋も夏となりました　同
流れ星別れし人をふと思ひ　同
流れ星にはつとする若さの戀　同
舟虫の暮しにも似し濱の子よ　同　都之介
涼み舟蝦をつまんで立ち上り　同
紹が包む乳房を嗤ふて日光　同
西瓜の魅惑女の口が大きい　同
素肌が匂ふアッパッパの微風よ　同
流れ星にカーテンは搖れてる　同
流れ星思惑のある座を外す　同
舟虫が見くびる獨りぼつちの岸　同
涼み舟流れのまゝに灯の搖れる　柳人
行水の音へ女を思はせる　同
足だけの太さが目立つアッパッパ　同
涼み臺大の字に寢て女ゐる　同
流れ星子供の智慧がまだ足らず　同
入潮へ遊らふてゐる舟の虫　同
よう言はん話がはづむ涼み舟　天痴人
嬌笑が闇から起る涼み舟　同
逢へぬ夜の感傷つのる流れ星　同
西瓜番に夜更けとなつた流れ星　同
目姦にまかせ晝寢のアッパッパ　同
籐椅子のマダム浴衣をはりきらせ　同
石垣の隙間へ舟虫夏を避け　同

雜誌社　川柳

塗青例會

七月十日　於塗料青年團事務所

席題　涼み船　互選

涼船橋の埃をあびて拔け　紅
橋の上涼しからうと涼み船　無名男
涼み船醉ふた小唄の水の色　瓢水
納涼のボートの二人見えかくれ　光
涼み船女笑ふて居るばかり　小柳子
涼み船それでも團扇だけは持ち　明暗子
涼み船ネオンのとこで唄ひ出し　雅幽
涼み船何か喰べてるなと思ひ　新水
涼み船搖れて笑へばなほゆれる　變人
船世帶から涼み船見下され　木馬
涼み船壹圓也で募集され　永樂
涼船カン〳〵　帽子預けられ　同
涼み船ビールもたいなくつがれ　白峯
涼み船邪魔な所に巡査居る　同
(佳)電燈へ遠く二人の涼み船　錦石
(同)涼み船ゆゝり橋を拔けて來る　紅
(秀)夕立へ橋の下なる涼み船　新水

席題　カーテン　紅選

夕立へカーテン皆んなぐたまゝ　無名男
カーテンを二タ人でぐたまでの事　白峯
寢ふ足の顏でカーテン開け放ち　雅幽
珍客をカーテン搖れる間へ通し　夕鐘
カーテンへ滿洲の風別な音　新水
カーテンを開けて暫く街を見る　小柳子
カーテンを絞つて我儘叱られる　木馬
カーテンの向ふにビール待つてゐる　光
カーテンの白さを眞夏照り續き　錦石
カーテンを除だん〳〵醉ふて來る　變人
(人)カーテンをのけても氣分納まら　同
(地)カーテンを閉めて神經質をしり　新水
(天)カーテンに蚊も滿腹の体で搖　明暗子
(軸)金借りに來てカーテンを撫でる　紅

席題　世相　變人選

演說は世相を歎く腕を出し　明暗子
きせるはたいて世相を憂ふ　錦石
簡單に世相を說いた師團長　白峯
サーベルの光る世相とはなりぬ　新水
軒並のカフエー世相を物語る　光
世相にはうとし鉢植並べて居　雅幽
滿洲へ行く氣も起る借りが殖え　錦石
世相とは別に女房の白い顏　瓢水
こんな世相き足りまぬマダムなる　夕鐘
肩上げが取れて世相が恐しくなり　紅

席題　白壁　小柳子選

白壁に爭議のビラが並ぶなり　光
輕鐵の線路が曲る白い壁　紅
白壁へ馬と疲れて暮れ掛り　雅幽
白壁へ子供ながらに意地を持ち　夕鐘
美しい戀ではありぬ白い壁　變人
白壁に秋を見付けて淋しい日　雅幽
白壁も塗り替えられて養子が來　新水

兼題　冷し飴　新水選

此處からは盛り場としる冷しあめ　永樂
冷し飴ネオンの影で實れてゐる　雅幽
下り腹冷し飴屋に罪をきせ　錦石
冷し飴濠の眺めで賣れて居る　雅幽
繪日傘を眺めて冷し飴屋ゐる　小柳子
バット級此氣安さのひやし飴　夕鐘
冷し飴日焦けの顏が並ぶなり　變人
(軸)場末なることを氣づいひやし飴　新水

兼題　我儘　雅幽選

我儘が言へるやさしい母と寢ゐ　變人

我儘で出れば鼻緒がフツト切れ　錦石
我儘も淋しく空は雨模様　白峯
我儘な顔を鏡に映してゐ　紅
我儘を通した後の淋しすぎ　夕鐘
我儘を言はしてほしい酒を呑み　新水
我儘の顔を覗けば涙ぐみ　明暗子
（佳）我儘を言ふて淋しい病み上り　新水
（同）暗やみの中で我儘泣いて居る　紅
（軸）我儘な奥な襖をピシヤリ締め　雅幽

氷菓子　木馬選

學校がひけると氷菓子屋來る　錦石
氷菓子大人は買ひに行けぬもの　錦石
氷菓子男の方は裸にて　章
氷菓子鹽入れるのと子に聞かれ　變人
氷菓子男兒は白い方を買ひ　虹一
（佳）背の子が横にくわへた氷菓子　錦石
（同）氷菓子涼しいヨタが飛んでゐる　白峯
（軸）アイスケーキ買へへんさ錢お呉れ　變人

草臥れ　變人選

草臥れた足をラツパに引きづられ　まこと
腹かけのつかれをいやすコツプ酒　錦石
草臥れて今日も長屋へ歸るなり　白峯
草臥れて歸つて來れば子の病氣　虹一
草臥て弟と駄々をこれてゐる　永樂
誘れた散歩草臥たとも言へず　章
草臥れを休ますやうに雨が降り　岩石
（佳）草臥れを言譯にする淋しい日　紫水
（同）草臥れてラツシユアワーの人びと　岩石
（同）草臥れて戻つた父の影　法師　虹一
（軸）草臥も忘れて母へペンを取り　變人

夏祭　鮎美選

寄附した有志花笠被せられ　まこと
夏祭海水浴を兒にせかれ　錦石
丸髷で妹が來る夏祭　永樂
夏祭父のゐない子が家に居る　岩石
昨夜來た母も出掛ける夏祭　白峯
夏祭散歩の序手を合せ　紫水
塵箱へ花火を乘せる夏祭　章
（佳）夏祭派手な浴衣の娘が揃ひ　岩石
（同）商用で泊つた街の夏祭　虹一
（軸）父と子の扇が揃へ夏祭　鮎美

川柳光耀會

竹内機見女報

八月七日

八月例會はもの凄い夕立の洗禮を受けて涼味百パーセントの高師の濱の米本氏別邸に於て開かる、路郎師及米本氏が二時半までも驛でお待ち下さつたのに幹事以外の方の出席を見なかつた事は誠に心苦しかつた。のみならず川柳發展のためには殘念な事であつた。

路郎師は「川柳の沿革について」葭乃女史は「海の句」についてお話があつた。席題は「不參」に一決。披講後、松林を取り入れたお庭の散策果ては渚に下りて貝拾ひに興ず。眞面目な顔でカメラに收まつた筈の先生が子供用のブランコに乘つたり、松の木に登るなど茶氣滿々、刻々に變化して行く黄昏の空に廣重の色の妙味を今更の如くに知る。月が松の梢に色づき初めた頃一同は米本氏操縱の自動車で驛まで送つて頂く。苦熱を他所に作句に清遊に興趣盡きざる半日を費す事が出來たのは米本氏御夫妻の御好意に外ならず、誌上にて深謝する次第。

席題　不參　葭乃選

不參者の多さ女はみじめなり　機見女
不參者にこの感激をわかちたし　同
不參者もあれ初志はつらぬかむ　同
不參者の數だけ殘るお水菓子　貴志子
路郎師の汗を不用に驛へ捨て　同
矢印のあつちへ向いた今日の會　同
不參多く松いたづらに眺められ　同
（軸）句會より二人がよろし松竹座　葭乃
不參したおかげ雨にも逢はずすみ　同

兼題　海水着　葭乃選

バスケット中に二人の海水着　武子
海水着寫してみたい夏休み　公子
林間の學校海水着は並だ　同
トランクに水着うれしい巾をとり　機見女
海水着座せば若さがもり上り　同
特大の水着にあまる肉体美　貴志子
泳がれる娘の水着しやれてゐず　同
陽も月も水着でおがむキャンプ連れ　同
海水着砂へ列べた脚線美　房子
海水着ロサンゼルスへ出た氣なり　同
選ばれて母校から出る海水着　同
有りし日を偲ぶ海水着の寫眞　同
海水着たゞ五六人秋の風　同
（軸）只濱を歩るくばかりの海水着　葭乃
（同）海水着ついでに花火見て歸り　同

川柳雑誌社 **神戸句會**（神戸）

七月十四日夕　於華水居　　日野華水報

席題　マスト　互選

マンドリン、マストの月が呀えてゐる　吉左右
水兵はマストに登り寫される　幸村
フト仰ぐマストの先の夏の雲　竹風
マストには風があるんだ汽鑵室　華水

席題　欠席　吉左右選

欠席の暫く續き兄が逝き　幸村
欠席の危く濡衣着るところ　竹風
欠席の理由を仲よし告げて置き　華水
欠席の机へ蠅が止まつてる　同

席題　化粧　華水選

化粧の娘鏡の兄を又叱り　吉左右
横顔を見せて化粧のよく喋り　竹風
化粧する鏡へ年をいつはりぬ　同
（軸）美容院出て來た顔を見違へる　同

兼題　溜息　竹風選

溜息へ昔淋しい花名刺　幸村
溜息は錢落した音で立ち　吉左右
溜息はル手のすじへ目を落し　同
（軸）溜息へ忘れられてる腕時計

兼題　目的　互選

目的へひめくりめくる日が續き　吉左右
目的は外にもあつて夏祭　幸村
目的は堅し年など忘れやう　竹風
目的は遠し足の巾を見ゐる　華水
目的へその日暮しがつきまとひ　竹風

都之介居偶會（松江）

七月卅日夜　　奈良井柳人報

題　團扇　互選

戀をする頃の團扇は顔へ來る　苍二
カフエーの團扇で惡友やつて來る　玲人
時節柄など〻團扇の忘れもの　同
橋上へ團扇の要らぬ腰を据え　柳人
涼み臺團扇で指すは星の空　同
團扇の蔭に簪がゆれてる　都之介
車座の團扇は次へ次へ行き　同

題　生ビール　互選

生ビール女給の袂が濡れてゐる　玲人
生ビール丸く大きな夏の月　苍二
生ビール青い灯赤い灯氣の躍る　柳人
湯上りの胃へ落ちこんだ生ビール　同
水郷の夜景をほめて生ビール　都之介
生ビール瀧の飛沫を涼しがり　同

題　浴衣　互選

街路樹の浴衣が白い待ち呆け　都之介
浴衣着てさて小使がほしいなり　同
浴衣にて暑中見舞を書かされる　苍二
浴衣着た女の足の白いこと　同
屋形船浴衣が片肌脱いでゐる　柳人
浴衣の帶もゆるんだ肉体美　同
浴衣、浴衣、浴衣が押し合ふ夏祭　玲人
遊園地畫の浴衣が怪しまれ　同

川柳雑誌社 **梅田句報**（大阪）

水谷鮎美報

兼題　涼み舟　かほる選

涼み舟待ちぼけらしい人を見る　藤澤
家の裏ばかり見てゆく涼み舟　方眠
いゝのゝごと灯が流れてる涼み舟　夕鐘
どこといふあてどもないに涼み舟　鳴玉
涼み舟女の顔が光つてゐ　まさる
涼み舟團扇がゆるう動いてる　同
涼み舟廣告塔の灯をあびる　鮎美
涼み舟ボートはそばへ寄つてくる　同
（人）三の糸切れたまんまの涼み舟　夕鐘
（地）眞實を聞いて見る氣の涼み舟　鳴玉
（天）涼み舟ゆれるまゝに手をたゝき　鮎美
（軸）涼み舟ござがまくれて岸につき　かほる

兼題　赤面　かほる選

赤面の肩からゆすり笑ふてる　方眠
獨特の着物で赤面舞臺に出　同
短銃を持つ赤面へ半廻し　鮎美
赤面は姫の首を所望する　同
（軸）赤面の後ろ障子が二枚なり　かほる

値下げ　かほる選

値下げした事を知りつゝ買ひそびれ　夕鐘
値下げしてからの勘定にひまがいる　鳴玉
値下げの字大きく書いて店開き　同
値下げして陳列棚の位置をかへ　鮎美
値下げの店頭にマネキンがゐる　同
（人）値下げから歸る四辻にも値下げ　鳴玉
（地）値下げした記事を見てる土曜の夜　鮎美
（天）値下げしたお菓子すこし小さくなり　鳴玉
（軸）鹵磨が十八錢に値が下り　かほる

川柳雑誌社 **加古川句報**（兵庫）

六月二十日　　水田督二記

席題　豆腐

豆腐やを呼びとめてから出る二階借　泰山

豆腐半丁へ大丸髷がゆらぎ　光穂
日盛りをよそに豆腐や晝寢する　美也光
豆腐賣飾り度い娘が一人ある　督二
遊學の子に豆腐やの有りつ金　同

（六月廿日）

席題　腕　組

辻將棋腕組みの後負けて行き　美也光
腕組をはげます女の大膽な　同
腕組もしては臭れるが頼りない　泰山
腕組をする父親へ人が來る　同
腕組の心配が又一つ湧き　光穂
腕組の肩へ子供は立てと云ひ　督二
腕組へ蚊を追ふてから妻もより　同

（七月五日）

席題　小　包

小包が届いた裏の若夫婦　泰山
小包の紐もほどいしまふ母　光穂
ルンペンのせなの小包色あせて　美也光
疲れた小包で來る紺がすり　督二

（同上）

席題　煙　突

煙突に汚れゐても犬は知り　光穂
煙突を武器に加へる爭議團　美也光
煙突が慘めな村に聳へてる　同
失業の目に煙突の黑煙り　督二
煙突の匂ひで父が歸る夜　同
煙突を見上げて今日も立話し　泰山
父ちやんはあの煙突の下にゐる　同

（七月廿日）

席題　想　像

想像はピッタリと來る新世帶　泰山
想像を裏切つて又女の子　美也光
ボーナスは想像よりも少な過ぎ　同
想像の通りほんとの附が來る　督二
席題　看　板

開店へ押しかけて行く看板屋　美也光
看板を頼りに母は來るのなり　同
看板を出す程でない手内職　泰山
この前は藥屋だつた植木柵　光穂
看板屋妙なところから文字になり　督二
看板屋ほめられてから値切られる　同

春秋、明珠對座吟　（神戸）

八月八日　西村明珠報

星、表札、蚊帳、氷水

星とゐて思ひはつゞくバルコニー　春秋
ゆめやゆめ星へ呼びかけたくこゝろ　同　明珠
流れ星決意を語る顏にする　同
星の數かぞへてやつて子と涼み　同
蚊帳の中病人足を立てゝゐる　春秋
二階もう寢てゐて起きてくれぬ蚊帳　同
蚊帳釣つて昔話を敎へられ　明珠
座蒲團を入れさす蚊帳に風があり　同
表札へ街燈更けてゐる格子　春秋
表札に威壓されてぞ戻つて來　明珠
表札になつかしいのもあり露路の臭　同
氷水同窓會の話する　春秋
珍客へ氷水とはお粗末な　明珠
友情に氷水さへ溶けかゝり　同

梅田偶會　（大阪）

七月二十九日夜　於まれき亭

題　ビール

一日の苦勞ビールの汗になり　藤澤
呑みすぎたビールへ友を忘れてゐ　同
突然の客へビールの冷へてゐず　遊歩
意見しながらビールついでやり　同
泡立つたビールへ口をもつてゆき　同
なつかしい話へビール冷へてゐる　晩春
禁酒の俺にビールの泡のふくさ　同
柳談にビールの泡がとんでゐる　鳴玉
割前のビールと知らずのんでゐる　同
親であり子でありビールつゞこぼし　同
泡だちビールに情婦おどろきぬ　鮎美
たまに逢ふ彼の女はビールこぼし　同
かき餅でビールをのめば蠅がくる　同

翠夢居鼎座吟　（大阪）

八月十二日夜　北川あや美報

颱風、未練

颱風にフト植木の事垣の事　あや美
颱風が來るとも思へぬ葉の動き　同
颱風が來る警報へ月が冴へ　同
颱風が何だとビール並べ立て　紫石
ネオン燈颱風に押されて夜ふけ　翠夢
警報の旗未だ搖れて颱風は過ぎ　同
颱風の夜を能面も息をひめ　同
去つた女を思ひ出してる秋の夜　あや美
發車間際棄た煙草をみつめてる　紫石
振りきれど未練の心を讀まれたり　翠夢
未練あれど男の意地の悲しけれ　同

川柳雜誌社

大地吟社例會　（島根）

八月十一日夜　於尼綾之助居

尼綾之助報

兼題　白　尼綾之助選

せめてもの取柄令孃の白さです　鐵漿
生活の音から先に夜が白み　華村
瓢干の眞白く乾く天氣順　比佐緒

午前九時女給の白粉焼けの顔　円鶴緒
風にも倦きたりしろき部屋となる　羅門
白きかひなが夏の夜の情痴となる　同
風は白く流れる瞼が痛き日の　羅門
(人)眞夏の風景の一に巡査の白い服　田鶴緒
(地)風邪にれた妻白靴汚れてる　同
(天)白き雨降ろまるのしゐ蜘蛛の巣　羅門
席題　憂　ひ　堀西鐵漿　選
へこんだお月さんと睫毛と對し憂鬱　羅門
目めくりは減れどおとづれのなき　海月
われのみのうれひか世の中つれなし　比佐緒
憂き朝で夢に見し母のおもやつれ　綠之助
夏の夜をビールの泡に浮くうれひ　同
(秀)白雲が湧く夏休み憂鬱な日びつ　田鶴緒
(秀)憂き影を拾へば壁に折れてゐた　羅門
題　裸　澄田羅門　選
裸ふと冷へを感じる流れ星　華村
一家内眞裸体揃ひ夕餉なる　比佐緒
涼み臺裸の辯を叱られる　綠之助
(秀)川遊び背に日輪は動かず　同
回覽互選句　登　山
登り切れば山の靈氣よ滿足よ　海月
深綠の魅力に登山隊の意氣　同
山の魅惑よ暇が欲し金が欲し　鵜天
絶頂を仰ぎ疲れた肩の息　與詩雄
白雲が湧く絶頂はまだ遠し　同
山登り落伍する氣で上を見る　綠之助
登山隊霧の中から陽を拜み　同
日　傘
横へ向く日傘少々すれてゐる　海月
滿員のバス日傘の置き所　比佐緒
夏の日を眞赤に受けて行く日傘　喜久路
日傘無雜作にオールドミスの行く　同
繪日傘をクル〳〵廻し待ちあぐみ　田鶴緒
どうしても思ひ出せぬ日傘路次に消え　同
振り返る日傘の主にハッとする　鵜天
ルンペンに日傘の刺戟強すぎる　同
日傘から伸ぶ空想に蟬が鳴き　綠之助
憂鬱ハ日傘となりて戻り來る　同

川柳雜誌社　**梅田句會**（大阪）
七月九日　武庫川於鳴玉居　小寺鳴玉報

題　虫　夕　鐘　選
夏の朝むくろになりし虫あはれ　坊茄子
虫賣りの無口へ鳴いたきり〳〵す　鳴玉
うち落された姿のまゝの黄金虫　晩春
閉めきつた雨戸へ虫のなきつゞけ　鮎美
害虫を除いて父と陽にやける　古木
ほのぐらいとこへ虫賣荷をおろし　方眠
俺の氣も知らず馬追ひ騷々し　同
(秀)生きんとて虫もいのちのるような　まさる
(軸)虫の音が甘たるうに戀の味　夕鐘
題　行　水　鮎　美　選
行水のこゝから山が見へてゐる　卜居
牛小屋の父へ行水知らせてゐ　坊茄子
行水へのれんの風がありすぎる　夕鐘
行水の兒は健かにのびをして　まさる
行水の女は太い線を見せ　古木
(秀)行水の母はめつきりやせたい　方眠
(軸)行水の手のくぼこにかたつむり　鮎美
題　月　夜　古木　選
いゝ月夜子の唄妻の唄となり　鳴玉
めぐまれる俺にも月の照すなり　鮎美
月澄みて乙女は戀に更けてゐる　夕鐘
酒倉へ月が靜かに降りてゐる　同
灯を消せば三日月さまに覗かれる　方眠
目がさめて不淨へ立てばよい月夜　同
おぼろ月女の方は泣いてゐる　鮎美
(秀)いゝ月夜夫婦の膝のつゝましく　まさる

題　扇風機　方　眠　選
汗ばんだびんほつれへ扇風機　坊茄子
盲判葉卷が匂ふ扇風機　卜居
借金があるとは見へぬ扇風機　まさる
御馳走の膳に向ふた扇風機　鳴玉
扇風機去年のまゝでまはつてゐ　同
催促へかゝはりのない扇風機　鮎美
扇風機膝をくずさぬお人柄　同
(秀)扇風機新聞が散つて誰も居ず　卜居
軸扇風機あつかましいのが前に立ち　方眠

題　庭　互　選
强意見庭の眺めへ通される　夕鐘
庭下駄の今日もさびしく客を待ち　晩春
木作りの庭半分で畫にする　鳴玉
庭づたひ旦那は少し醉ふてゐる　古木
一坪の土堀りかへす狹い庭　鮎美
妾宅の襖をあける庭の雨　同

川柳雜誌社　**鶴町句會**（大阪）
八月十九日　於白峯居　宮岡白峯報
兼題　大　阪　變　人　選
成功を目指し大阪の土となり　のぶを
大阪へ來ても矢張り力瘤　雅幽

借金がふえて落ちつく大阪市　紅
大阪の土盆栽は疲れて來る　同
大阪で住んで夜逃を話してゐ　岩石
大阪市お城の見へとこに住み　同

兼題　燈明　紅選

亡き父をしたひ燈明ともされる　岩石
燈明へ父は眞赤な顔でゐる　白峯
寢つかれぬまゝに燈明ともすなり　變人
後家立てゝ行く燈明のほの暗し　雅幽
燈明を點けて噂さを噂とし　同
(C)燈明の灯に變屈な父の顔　雅幽
(B)燈明へ時勢遲れの母の顔　同
(A)燈明へ無條件なる手を合し　岩石
(軸)もみ手しなら燈明をかき立　紅

席題　坂　雅選

坂道を越してなつかしい我が家な　岩石
此の坂を登れば別莊地帶なり　白峯
足跡をのこして馬は上つて來　紅
測量師背のびしてゐる坂の下　雅幽
(軸)坂は秋風病む友が立ちて　白峯

席題　襷　選

襷がけ母の背中が丸いなり　岩石
獨者襷をかける月もあつて　小柳子
襷はづせば玄關の藥賣り　紅
御馳走が出來ます妻の襷がけ　同
(佳)灯がついてからも襷の母でゐる　變人
(同)もう襷いらぬ母のアッパッパ　紅
(同)來客に暑い〳〵と襷がけ　のぶを

席題　野球　互選

まんろいのたんびに腕をまくりゐる　白峯
太陽も野球ファンにわすれられ　小柳子
ホームラン守備あつけなく見つめ　紅
一塁へ出てデットボール元氣づき　雅幽
ランナが出て應援の肩がこり　岩石
ラッキセブン三振バットたゝきつ　同

川柳雜誌社　高知句會（高知）　中澤濁水報

席題　漫畫　兼子選

大臣も漫畫に成ると與太に見え　狂聲
漫畫からヒントを掴む發明家　紫涙
漫畫には後姿はないものか　啞聲
流行妓描かれる記者へ漫畫じみ　濁水
面白い漫畫子供の目をうばひ　映珠
(五客)漫畫への不足が太い男前　青果
(同)自畫像の漫畫ちよつとも似ぬ　同
(同)無造作に漫畫に動く輕いペン　翠葉
(同)ボタ〳〵と漫畫涙の丸いこと　春風
(同)禿頭漫畫三本ほど生やし　紫白
(人)大臣は漫畫で孫にからかはれ　濁水
(地)特徴を掴んで漫畫喜ばせ　紫白
(天)寄せ書に君そつくりとは顔　濁水
(軸)國會へ自分の漫畫笑つて出　同

晩酌　青果選

晩酌を父は淋しい齡で飲み　浮城
三本目ですと晩酌笑はれる　啞聲
共稼儲を晩の酒に見せ　狂聲
晩酌の量を過して風邪の氣味　翠葉
晩酌の話題は次の間へも延び　春風
晩酌がすむと愛の巣留守になり　兼子
晩酌の臍から涼む扇風機　映珠
(五客)晩酌もボーナスの日醉心地　春水
(同)晩酌の機嫌へ一家丸く居る　紫涙
(同)晩酌の量へ手加減する女房　紫白
(同)晩酌のすぐに寢轉ぶ癖がつき　映珠
(同)晩酌へ割り込んでくる釣仲間　兼子
(人)夕立を賞めて晩酌叱られる　濁水
(地)晩酌の先づ一盃へ目をつぶり　紫白
(天)晩酌の親子融通の利く話　春風
(軸)憚のない晩酌へ蚊がとまり　同

西瓜　春風選

長話西瓜の皮に蠅がゐる　濁水
臺所西瓜は立つたまゝで食ひ　春水
宵祭西瓜の山へ雨が落ち　啞聲
買ひそうな顔へ西瓜をポントとう　花舟
西瓜割るのへ車座は膝をたて　兼子
さし向ひと成つて西瓜へ手がゝり　紫涙
(五客)西瓜賣叩きつかれた頃賣れ　濁水
(同)親しみへ西瓜兩手で提げる切　青果
(同)子の口を横切る西瓜痕をつけ　映珠
(同)切られたがましだと西瓜叩れる　浮城
(同)盛裝の膝へ西瓜は遠くゐる　紫涙
(人)好い西瓜どこから食べよやうに持ち　濁水
(地)庖丁を上手に逃げた西瓜の實　啞聲
(天)パッチリと割西瓜不意な客　紫涙
(軸)惡分の西瓜の切にある光り　春風

兼題　骨　濁水選

越後獅子背骨はちつと腹が立ち　映珠
迷猫今日は目出度い鯛の骨　春風
燒着器用にめくら骨を除け　狂聲
墜落に骨は不平を告げてくる　啞聲
レントゲン骨の異狀を見とゞける　浮城
雞の骨子には見せない滋養分　同

骨抱いて故郷へ歸る成れの果て　翠葉
(五客)悲しさの凱旋をする骨の壺　紫白
(同)凱旋の骨へ母親驚かず　浮城
(同)隊商は砂漠に轉ぶ骨に慣れ　映珠
(囲)鰻屋は大分貰れた骨を盛り　啞聲
(同)接骨醫輕い力にある自信　青果
(人)夏痩の柄でもないに頬の骨　紫浪
(地)肋増の數あり〳〵と夏を痩せ　花舟
(天)戰友の骨燒くとこへ着く手紙　同
(軸)太古らしい骨に博士は惱んで

川柳雜誌社

鳥取句會（鳥取）

八月二十日夜　中島鐵洲報

川端町の料亭萬よしに於て句會を開く集る者舌長。鐵洲。耕民。暢山。のぼる。源太夫。湖山の七名　朝田スエノ女追悼句會麻生葭乃女選　半襟をものせんとしたが皆期待に反かれた結果らし

半襟を買つて親娘笑つて出　源太夫
三人で半襟を買いそびれ　湖山
妻死して半襟の汗附いて　のぼる
半襟を讓り合つたる姉は逝き　暢山
追憶の半襟であり母涙　耕民
襟買ふて柄に自信の靴が鳴る　鐵洲
あたら惜しくも半襟を乳に分け　舌長

川柳雜誌社

西條句會（愛媛）

八月十三日於西條裁判所　荒井英賀夫報

暴助、下男、敗ける、朝顔、入陽、納涼、氷屋
暴力へ櫛がはたりと落ちつた音　虹一
暴行の覺めれば留置場であり　英賀夫
暴行へ社長の舌がもつれてる　孤鶴
澤庵石へ下男が又呼ばれ　非子
國からは下男になれと出しはせぬ　童人
湯かげんも上手下男の老けてゐる　英賀夫
敗けた方も柏手を送る優勝旗　同
子守する兄は兄らし敗けてゐる　孤鶴
結極は敗けて辯護士代がいり　虹一
カタログの程の朝顔咲いた朝　非子
朝顔の明日咲ツボミ子は數へ　英賀夫
朝顔へ夜勤の父が戻つて來　虹一
朝顔の大さを軒へ持つて來る　西英子
朝顔を賴んで旅へ出る亭主　狂波
退院の室に朝顔咲き續き　孤鶴
明日の入陽には内地の富士　微笑
赤い入場へさはぐ茄子の葉　村雨
陽の入りへ逼路も宿のある歩み　西英子
いゝ入陽明日の天氣へ鎌を研ぎ　孤鶴
おそ方に嫁も出て來る涼み臺　西英子
納涼へ子は當があり氷店　英賀夫
父がゐる母がゐる祖父、祖母も涼み臺　非子
蒸せ暑さも一度蚊帳を出て涼み　孤鶴
納涼の花火へ背の子があはて　英賀夫
納涼臺いろんな足がぶらさがり　西英子
風向を賞めて隣は涼みに來　虹一
氷屋の出店へすれる孫をつれ　西英子
松虫の籠釣つてある氷店　虹一
氷屋の卓に銅貨が濡れたまゝ　孤鶴
讓り合ふ客へ氷が解けかゝり　同
氷屋に問へば不景氣かこつなり　非子

川柳雜誌社

御旅納涼句會（大阪）

七月廿四日　嵐山　生田翠夢報

連日の酷暑を避けて一夕、嵐山へ我等の句會の席を移す、會するもの路耶師を初め琴人紅、あや美、みつる、いさむ、紫石の諸氏と私、涼しい納涼電車、嵐峽遊覽船に時を過し中之島にて野天句會をやる（既報）野趣滿々たりき

兼題　骨　路　路耶選

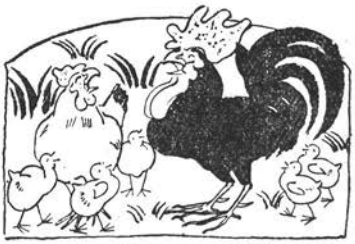
鐵骨へただ雨風の夜が更ける　紫石
骨折りを買つてもやれる手編シャツ　あや美
骨がどこへ行つたお前の肉体美　翠夢
骨上げの人に圓タク値切られる　紅
友の出世に御馳走が咽喉へ骨　琴人
頬骨の出た上役の下につき　同

兼題　噂　路　耶選

噂より餘つ程ひどいヒステリー　紅
噂ほどそれ程でなしぜんざい屋　琴人
噂など噂で流し溺れきり　同
噂もう眞相に近く奢らされ　翠夢
ちと違ふ噂ふゝんと聞いて置き　同

兼題　停　電　琴　人選

停電へ女の顔が白く見え　あや美
停電は二人の中の氣をうばい　同
停電へ彼女の息がはずむなり　紫石
停電へ古里のランプ畫き出し　同
停電の窓へ稻妻とんで來る　翠夢
停電に秋風そつと顔を撫で　同
停電を降りると電車動き出し　紅
停電をいつそ其まゝ寢てしまい　同
停電へバスは素知らぬ顔でゆれ　同



編輯の窓

山雨樓

▼八月特輯號は非常に好評であつた。銷夏ナンセンス「柳壇諸家に對する第一聯想」は意外の反響があつて輕い抗議やら批評やら夥しく殺到して來た。あんなものを毎月見せてくれと云ふ希望もあつた。大したお叱りもなく愉快に讀んで貰つたことを感謝する。

▼前號の表紙繪は時期に適し柳味タップリとあつて好評を博した。本號も同じく鳥平畵伯を煩はしたもの、味つて頂きたい。

▼連載の「武玉川初篇研究」は蛭子氏の超人的努力によつてどし〳〵寄稿下さるので編輯部大助り。しかしあの原稿が活字になる迄に幾度か海を渡つてゐることを思へば涙ぐましい。

▼「柳の架」が十四日の編輯日に來なかつたので一時心配したこれも海を渡つてくる原稿だ。

▼主幹の「五葉を語る」續稿は番傘の追悼號へも執筆されたので次號へ割愛することにした。

▼閑生氏の「作句前後」主幹の「自信は強く」春田獅子王の「川柳雜誌句内閣」等地下鐵は賑かだ「句内閣」の執筆者は差詰内閣書記官長の要職を承る人物なんだが、役不足なので大臣の椅子が空くのを待つて任命する。

▼松窓老から柳界の彦左と呼ばれた半文錢氏「千日前今昔史」に健筆を續けられてゐるが、其内風雲を捲き起すやうな評論を寄せられるであらう事を待望。

▼「朝田スエノ女追悼記」は主幹が別項記載の如く御子達看病の中を葭乃奥樣に代つて特に執筆されたものである。

▼七月二十日端の坊で川柳光纏會主催の下に朝田スエノ女の追悼句會が催された。大變盛會で閨秀作家數名が出席せられたこともこの會にふさわしかつた。主幹夫妻はアートちやんの急病で出席が出來なかつた。

▼本社八月句會の餘興、新柳劇の熱演は非常に好評で自分等の如きは未だにその舞臺を思ひ浮べて悅に入つてゐる有樣。當夜主幹は微恙で來られなかつたが葭乃奥樣がお忙しい中を見に來て下すつたのは嬉しかつた。當夜の句會プリントでは天地人制廢止の不可なる實例として、主幹や雀郎氏などの選句を示し益々その感を深からしめた。

▼八月七日高師濱で光纏會句會が催された。當日は雨と差支の爲めに參會者は尠なかつたが主幹夫妻も出席されて非常に愉快な會合であつた。

▼各地吟社其他柳友から本社へ暑中見舞を多數頂いてゐる。小生から代つてこゝに厚くお禮を申上げる。

▼京都支部の句會は八月十九日仲源寺で催され、暑さにも拘はらず益々盛會だつた。

▼路郎主幹の二男アートちやん（尋四）が急病で一時は危險を傳へられた程重態であつたが、主治醫の手當がよかつたのと看護婦二人も付き切つて日夜看護に努められた結果、其後次第に快方に向はれてゐる。これが爲主幹は一切の原稿執筆中止の止むなきに至つたので本號卷頭に飾るべき原稿を頂く事が出來なかつた。アートちやんの一日も早く全快を祈る。

▼阪大の笠原教授は右主治醫の先生なので毎日電話で治療上の指圖をして下すつたことを主幹は非常に感謝してゐられた。

▼大阪朝日が「川柳に見る近代女性」と題し八月二十三日から三日間ホームセクション欄へ連載した。選句と評釋は主幹と水府氏。川柳の新聞進出は勿論結構であるが寧ろ文藝欄へ載せてほしかつた。

▼大正日日新聞に柳壇が復活することになつた。選者は本社の松盛琴人氏、柳友の後援を祈る

▼神戸市中山手七丁目青年團報「中七の青年」に川柳部が開設され、華水、竹風、明珠、春秋の諸君が選者として活躍してゐる。

▼八月二十六日のBK、OK、KKからラヂオレヴュー「川柳スケッチ帳」が放送された。作並に讀句は水府氏、同日の大朝ダイアル欄で醫博鈴木昇氏（昇柳水）が「川柳子」と題し川柳家の號と怖がるものに付談じてゐられる。

▼青森川柳社の「川柳隊」滿洲派遣軍慰問號に一、推擧する名川柳二、新川柳に對する意見を徵し發表してゐる中で、靜岡の珍竹林氏が擧げた句の内「俺に似よ俺に似るなと子を育て」とあるは恐らく主幹の句「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」の誤であらうと思ふ。あんなときには餘程注意してほしい。

▼小松の柳友林革刄氏が暑中休暇で歸阪せられ訪れて下すつた一目會つたらもう十年の友達の樣にかんたん相照した。

▼久し振りに白柳子君が訪れてくれた。話してゐると一時間や二時間は飛行機で旅行するやうに過ぎ去つてしまふ。うまが合ふので發動機に故障の起らぬ限り止度がない。葉平君が來てくれたときも同じこと。綠雨とは話が電車の中迄續く。いや電車を降りても別れる迄續く。

▼僕は歩くとき必ず包か鞄をもつ事にしてゐる。最近選句の返事が五、六箇所遲れてゐるのだが賴まれた日から今日まで一日として離した事はない。必ずその包みの中にもつてゐる。僕は元來事務員なのだが選を事務的に片付けることを極度に恐れてゐるものだ。

▼「あなたは川柳をやつてゐられるから、句をひねつてゐられると暑さも苦にならぬのでせう」僕「ほんとにさうです」とうつかり社交辭令を出してから、この頃句に苦んでゐる自分は又一枚煩悶の重ね着をした。

▼僕は最近二人の親友を失くした。それがどちらも帝王切開をやつて助からなかつたのだ。切開をせねば死を待つのみと云ふ呪はしい重患とわかつて、萬一を望みに手術を賴んだ家族のことを思ふと一足飛びに氷河の中に立つやうな寒氣を覺える。僕は若い地下の二人に對して少くも二人分働かうと決心してゐる

▼本號からこの欄を僕が書くことになつた。主幹には他の方面で自由に活動して頂く爲斯う云ふ細い仕事は當方で引受けたのだ。不慣の爲思はず不快を與えるやうな事がないとも限らぬ、その邊は不惡御諒恕の上叱正鞭韃を賜りたい。

▼次號から「飛燕往來」を復活のことにする。地方支部や柳友からの手紙には納つておくには惜しいものが多い。それに付て思ひ浮べるのだが、以前誰だつたか隣同志に住み乍ら毎日ハガキで意見の交換をしてゐたさうだ。今日そんな暇は誰も持つて居まいが努めて文通を多くしたいものだ。

轉居

中沼若蛙君は（神戸市灘區徳井一〇二へ）石田沐天君は（大阪市外千里山六九六、金正方へ）竹内機見女さんは（大阪市天王寺區寺田町三へ）

正誤

八月號五二頁、腕自慢力自慢のなれの果　曲豆

本社基金醵金者御芳名

醵金を拜受しました方の御芳名を錄し御厚志の程を深謝致します。

金五圓也　朝田　新水殿

小計　五圓也

累計金　四百九圓七十錢也

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。

▼光耀抄は女性作家に限る。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第九卷第十一號課題

九月五日締切

（各題十句以内）

▼闇　大島蔚明選

▼損料　朝田新水選

▼食堂　須崎豆秋　西村明珠共選

第九卷第十號課題

十月五日締切

（各題十句以内）

▼嵐　關本雅幽選

▼懷手　中澤濁水選

▼情熱　水谷鮎美選

毎號募集

▼近作柳樽（雜十句）麻生路郎選

▼光耀抄（雜廿句）麻生霞乃選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部　金參拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

（半ヶ年分以上御送金の方には投句用箋を贈呈致します）

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます　▼御希望により集金郵便を選立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

昭和七年八月廿五日印刷
昭和七年九月一日發行

第九卷第九號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　麻生幸二郎

發行所　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　川柳雜誌社
振替口座大阪三一五一四番
電話天下茶屋二五七九番

事務所　大阪市住吉區平野西之町八三番地　川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市内　各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、寶文館（顧館）　石塚
（京都）三宅　（松山）弘文舍　（石川縣）マコトヤ

川柳雑誌社關係の人々

（順はろいい）

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　嘉納純吉　田中辰二　長崎柳秀　國枝史郎　藤村作　藤本卯之助　赤井清司　淺田一　末弘嚴太郎

客員

伊藤彦造　鳥山一歩　森東魚

大島壽明　大谷五花村　岡田三面子　龜井花童子　川上三太郎　川村花菱　岡本一平　大道弘雄　長谷川一徹　長崎柳秀　田中辰二　吉田清　岡村孝之介　米村あん馬　春元紀太　市塲沒食子　松下小柳子　石曾根民郎　生田翠夢　桑原京郎　廣江天痴　山本雨迷　平井蒼太　關本雅幽　日野華水　増位汀柳　熊谷紅平　妹尾變人　岩司郎　橋本綠雨　伊藤愚陀　須崎豆秋　安井ひろし　山本丹路　西田帥樂　西杏三　福田山雨樓　麻生馥乃　住田亂耿　中見光路　中島鐵洲主幹　高橋かほる　太田朝陽　安西　北山悟郎　立井登美坊　辻左馬喜　西おさむ　中川めかく子　中野柳陽　三輪夏曉　永田里十九　麻生路郎

社友

中澤濁水　村松夢裡　水谷鮎美　白井梅里　上野錦水　伊藤綠之助　岩垣奇可愛　篠原春雨　柴谷柴舟　前田五健　前田雀郎　安川久流美　窪田銀波樓　大西八歩　越田久水　片桐靈竜　阿形一杉　岩本素人　松丘町二　岩崎柳路　松盛琴人　櫻井愚寵　龜井圓角　吉田水車　坂井拓水　蛭子省二　三好計加酒　水田光穂　木村晃卓　朝田新水　朝田閑生　阿部梅里　中川めかく子　左馬

同人

編輯局（同人）

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
天滿支部（大阪市）幹事北山　悟郎
濱寺支部（大阪庁）幹事太田　朝陽
神戸支部（神戸市）幹事日野　華水
國館支部（函館市）幹事亀井　花童子
高知支部（高知市）幹事中澤　濁水
梅田支部（大阪市）幹事永田　里十九
螢ヶ池支部（大阪府）幹事亀井　愚寵
金澤支部（金澤市）幹事中川めかく子
田邊支部（和歌山）幹事辻　左馬

籔川支部（島根縣）幹事伊藤　綠之助
豊橋支部（愛知縣）幹事白井　梅里
平塚支部（神奈川）幹事酒井　駒人
加古川支部（兵庫縣）幹事水田　光穂
京都支部（京都市）幹事桑原　京郎
鳥取支部（鳥取市）幹事中島　鐵洲
別府支部（別府市）幹事木村　晃卓
堺支部（堺市）幹事八木　均
松山支部（松山市）幹事坂井　拓水
守口支部（大阪府）幹事朝田　新水

御旅支部（大阪市）幹事生田　翠夢
高岡支部（富山縣）幹事越田　久水
天王寺支部（大阪市）幹事須崎　豆秋
鶴町支部（大阪市）幹事妹尾　變人
小松支部（石川縣）幹事上野　錦水
御池橋支部（大阪市）幹事村松　夢裡
松江支部（松江市）幹事廣江　天痴人
蓼青支部（大阪）幹事熊谷　紅
西條支部（愛媛縣）幹事荒井英賀夫
光耀會（大阪）幹事竹内機見女

道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が來たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいゝ古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衞生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過きてしまつた。道ブラの次でに公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

（路郎生）

古本は

高價に申し受けます。
御通知次第早速參上確實
迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南五六二番

カナメ喫茶店

朗らかな心と愉快な顏は
カナメ喫茶店より
大阪市南區疊屋周防町
東入南側

女給を募る

二十二三までの朗らかな方、美しい方をお世話下さい—葭乃

大阪市西成區玉出本通三ノ三六（仲小路）
喫茶店 キング
電話 天下茶屋 二五七九番

▽川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋を左の價額でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。

五〇枚綴一冊 價金拾二錢（送料共）

▼御申込は本社事務所宛。（二錢切手代用不苦）

京 金拾錢
京都市富小路御池南小笹方
京都川柳社

國民川柳 金十六錢
東京府品川町二日市二二五
國民川柳會

短冊頒布

筆者 麻生路郎先生

上短冊一葉金參圓 送費不要
作品は入金順に發送、振替は「大阪七五〇五〇」を利用されたし（句の希望の方はお知らせ下さい）

申込所
大阪市住吉區平野西之町八三番地
川柳雜誌社事務所內、短冊頒布係

懸賞川柳募集

題 「色」 路郎選
九月十日締切

▼その他雜吟を募る
▼用紙 官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟 大阪市玉出本通三の三六 麻生路郎氏宛

化粧新聞社

綠雨居偶會

九月七日午後六時
兼題「押賣」
會費 不要

本社事務所にある他の柳誌を見ながら語りませう。別に案內狀は出しませぬから御遠慮なくお越し下さい（綠雨）

場所は住吉區平野西之町八三（市バス平野綠橋停留所）
（下車西約四丁 今川町市設住宅）

清酒

白鶴禮讃

白鶴をチントンシャンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を强ひ
白鶴が縁ではなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寢る

攝津灘

嘉納合名會社釀

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和七年八月廿五日印刷納本　昭和七年九月一日發行

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

伊豆椿ポマード

精の椿島大　一唯產國

輝く美髪

伊豆椿香油本舗

いさ下用愛御に直今
りあに店藥品粧化名有國全

川柳雜誌　（第一〇四號）

定價　金三拾錢